

旭塚古墳

城山古墳群発掘調査報告書

— 第1・2次確認調査結果の概要と
多角形終末期横穴式石室墳の保存調査 —



旭塚古墳

城山古墳群発掘調査報告書

— 第1・2次確認調査結果の概要と
多角形終末期横穴式石室墳の保存調査 —

2009年3月

芦屋市教育委員会



大阪湾上空から芦屋市街地や六甲山地東南麓を望む（▲の交点が調査地、梅原章一氏 撮影）



六甲山上空から芦屋市街地や大阪湾を望む（▲の交点が調査地、梅原章一氏 撮影）



六甲山上空から芦屋川と旭塚古墳周辺を望む（▲の交点が調査地、梅原章一氏 撮影）



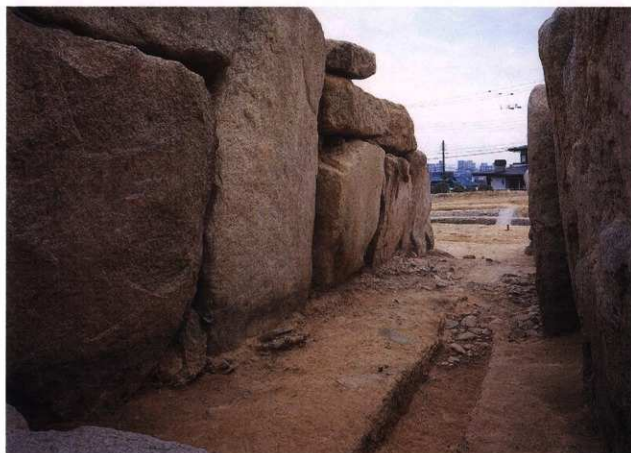
市街地上空から六甲山地前山と旭塚古墳周辺を望む（▲の交点が調査地点、梅原章一氏 撮影）



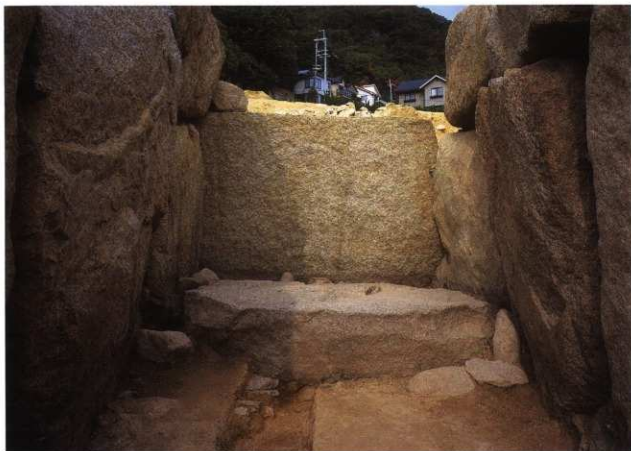
追塚古墳前庭部調査区南端から樹木伐採後の墳丘と石室を望む（梅原章一氏 撮影）



開口部付近からみた旭塚古墳の石室（梅原章一氏 撮影）



奥壁付近からみた旭塚古墳の石室（梅原章一氏 撮影）



玄室玄門部付近からみた奥壁と直下の床石（梅原章一氏 撮影）



奥壁上からみた旭塚古墳の石室と床石
（梅原章一氏 撮影）

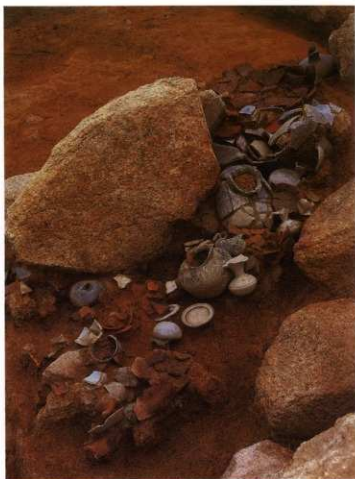


墳丘南西部の多角部基底石と残存テラス面における土器群出土状態（西から）



墳丘裾部テラス面出土の大量の供獻土器群（須恵器と土師器）

墳丘裾部テラス面出土土器群
(遊離石材除去前、東から、梅原章一氏 撮影)



墳丘裾部テラス面出土土器群
(遊離石材除去前、西から、梅原章一氏 撮影)



拡大調査区Aトレンチ 子持器台ほか出土状況（西から、梅原章一氏 撮影）



拡大調査区Aトレンチ 子持器台ほか出土状況（北東から、梅原章一氏 撮影）



拡大調査区Aトレンチ 溝201土器出土状況（南西から、梅原章一氏 撮影）



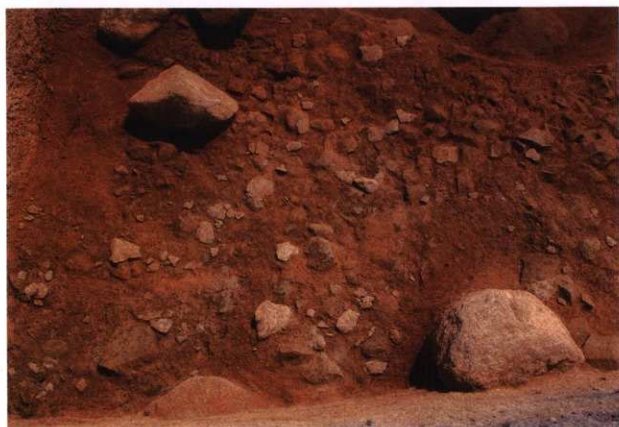
拡大調査区Aトレンチ 溝201 須恵器平瓶出土状況 (梅原章一氏 撮影)



拡大調査区Aトレンチ 溝201 土師器甕出土状況 (梅原章一氏 撮影)



前庭部 西Ⅳ区 亀山石散布面検出状況（南から）



前庭部 西Ⅳ区 亀山石散布面検出状況（北、上方から）



復元された主要出土土器（梅原章一氏 撮影）



第98図- 8

復元された子持器台（梅原章一氏 撮影）



第98図- 8

復元された子持器台（梅原章一氏 撮影）



第104図-19~24



第106図

墳丘裾部テラス面出土遺物（梅原章一氏 撮影）



第110図

耳環 (A面)



第110図

耳環 (B面)



第107図-2



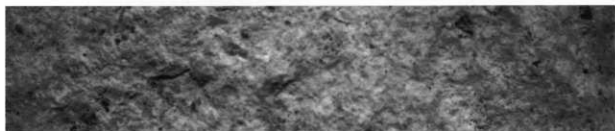
第99図-3

第108図-15

耳環と土師器 (壺) (梅原章一氏 撮影)



第112図



第112図'

前底部 龜山石大型剥片（上下がA・B面、中央が接写、梅原章一氏 撮影）



前庭部 龜山石中型剥片（上下がA・B面）（梅原章一氏 撮影）1mm方眼紙



前庭部 龜山石小型剥片 (A・B面) (梅原章一氏 撮影) 1mm方眼紙



龜山石剥片集合 (梅原章一氏 撮影)



竜山石片 法量別集合(1) サンプル

(梅原章一氏 撮影) 1mm方眼紙



竜山石片 法量別集合(2) サンプル

(梅原章一氏 撮影) 1mm方眼紙

序

「陰宅風水」という言葉があります。風水思想に則った大変意味深い土地選びの思惟が漂う不思議な語感があります。今風に言えば、寝所をどこにするとか、門をどこに構えるかといった家相に近いものだと思いますが、7世紀の古墳時代の終わり頃には、墓をどのような適地、良所に造るべきかといった風水の思想が既に大陸から伝来していたようです。

本書で発掘調査成果を公にする旭塚古墳は、まさにこの風水の考え方に適合した古墳だと言われています。六甲山地前脈の通称城山の麓に位置するこの古墳は、雄麗な山を背に負い、芦屋川・高座川の清流に面し、遠く大阪湾への眺望のゆき届く自然に恵まれた場所を選び、この特別な場所には他の古墳築造を極力排した形で石室や墳丘を営んでいたようです。何度も発掘現場に足を運びましたので、この奥津城の体感、実感といったものがあります。

旭塚古墳の初調査は昭和36年（1961）のことで、今から50年近く前のことです。爾来このたびの発掘調査まで詳しい考古学的な調査は行われていませんでした。今回の調査は、この古墳の先取りの保存施策と周辺の再開発との調整を企てる目的で実地されたものです。その結果、大変数多くの成果が上がりました。

本書はその記録を収めた正式の調査報告書ですが、古墳保存の方策も安全を最も配慮してひととおり定まり、保存管理の具体的な内容が当面の課題です。旭塚古墳の調査が、その保護と未来社会への永年の継承を当初からの方針として実施され、主体部石室が関係各方面で最も望ましい地下保存の姿で保全されたことはまことに慶賀にたえません。

長年の調査の計画、実施、保存といった各工程において種々ご助言、ご協力いただいた数多くの関係各位に対し、深く感謝の意を表します。文化都市芦屋が誇るべき「宝物」がまた一つこうして記録にも残り、市民や研究者が広く活用されることを期待いたします。

平成21年3月31日

芦屋市教育長
藤原 周 三

例 言

1. 本書は、芦屋市文化財調査報告第77集として、城山・三条古墳群に所在する旭塚古墳の発掘調査成果を報告するものである。本報告書の作成、編集は、平成19・20年度事業として芦屋市教育委員会が実務を行い、原因者 旭化成株式会社との事業協定に基づき、平成21年3月末日を期限に公開するものである。
2. 本書は、芦屋市教育委員会が宅地造成事業に伴う事前調査を実施した城山・三条古墳群中の旭塚古墳およびそれを含む事業地の発掘調査結果の正報告書である。調査期間は、第1次確認調査が平成18年7月10日～平成18年8月15日であり、第2次確認調査が平成19年7月2日～平成19年12月10日である。両調査併せて、延日数およそ121日を費して行った。遺跡は、兵庫県教育委員会が平成16年3月に公開している『兵庫県遺跡地図-第1分冊-(発掘調査の手引き・遺跡地名表)』の地名表欄P11に「遺跡番号070027 城山・三条古墳群」(種類:古墳、時代:古墳～古代)として掲げられている。また、その位置や範囲については、同『兵庫県遺跡地図-第2分冊-(遺跡分布地図)』の図版96(国土地理院発行2万5千分の1地形図複製「西宮」)に、周知の埋蔵文化財包蔵地として記載されている。さらに同遺跡は、芦屋市の公開している遺跡分布地図[芦屋市教育委員会2001a]においても周知されている。なお、昭和30年代に名付けられた当該古墳名は、現行の地権者 旭化成株式会社の「旭」にちなんだものであって、地名や地誌に拠るものではない。
3. 調査地は、兵庫県芦屋市山芦屋町23番地(敷地面積7,438.01㎡)に所在する。
4. この調査は、芦屋市教育委員会が調査主体となり、社会教育部生涯学習課文化財担当主査 森岡秀人(学芸員)と同嘱託 坂田典彦(学芸員)が担当した。調査・整理事業に係る事務は、平成18年度について、同課課長補佐 長谷川易司、主事(庶務担当) 春木和子、臨時的任用職員 国政恭子が主担した。平成19・20年度については、長谷川が異動したため、後任の課長補佐大橋伸一(平成19年度)及び主査細井良幸(平成20年度)が事務を統括し、森岡・春木と臨時的任用職員の国政・木本真味(平成18・19年度)、田中智美(平成20年度)がこれを補佐した。
5. 本発掘調査の実施に関しては、兵庫県教育委員会の下記の方々からご指導、ご助言を受けた。
深井明比古(文化財室課長補佐兼審査指導係長)、平田博幸・柏原正民(同主査)
6. 調査過程における遺構撮影は、森岡・坂田と天羽育子(補助員)が行い、他に要所を捉え、写真家の梅原章一氏に大型カメラによる専門撮影を委託した。本報告に使用した梅原氏撮影のカットは()書きで明記した。また、整理作業後の本報告書掲載遺物写真も梅原氏に撮影を依頼した。表紙写真も梅原氏撮影。
7. 山本徹男氏(映像作家)には、発掘調査状況のビデオ撮影を依頼し(市費)、調査記録保存の充実を図った。
8. この調査については、文化財保護法に基づき、平成18年度に関係協議を行い、発掘調査通知を行っている。
9. 第1次確認調査・第2次確認調査共に、測量・記録、出土遺物・資料の整理作業は、森岡・坂田が担当し、その指示・指導の下、下記の実務・補助員が従事した。
第1次確認調査-大谷夏恵 長山智幸
第2次確認調査-天羽育子 今村 悟 住本孝太 武谷俊彦 竹中 充 西澤俊明
報告書作成作業-天羽育子 住本孝太 平山裕之
なお、以下に記した芦屋市教育委員会文化財保護ボランティアの方々には、これまでに培った経験と技術を十分に発揮される場として、土器の接合復元・染色をはじめ数々の整理作業に従事して頂き、多大な協力があった。記して、感謝の意を表する。
相澤敦子 梅本素子 久保ふく子 小島静子 中井みどり 仲谷由利子

10. 本書の編集・執筆は、森岡秀人・坂田典彦が担当した。執筆分担の責は、目次および担当章・節・項の末尾に掲げたとおりである。本書全体の責は、編集を担当した森岡と坂田にある。
11. 現地調査および調査前後の検討、報告書の作成において、下記の方々に専門的な立場や地元の経験的な視野から、献身的なご教示、ご協力、ご支援を賜った。以下にお名前と所属（当時）を記し、深く感謝の意を表す。また、発掘調査および整理作業の全般を通して、同僚の学芸員 竹村忠洋、堀誌 白谷朋生・守田めぐみ（学芸員）の協力を得た。
- 浅岡俊夫（六甲山麓遺跡調査会）、尾子奈美枝（元興寺文化財研究所）、荒木幸治（赤穂市教育委員会）、伊井孝雄（文化財保存全国協議会・加茂遺跡を守る会）、池田朋生（熊本市立装飾古墳館）、勇 正廣（元兵庫県文化財パトロール監視員、芦屋市史料館執筆）、魚津知克（大手前大学）、梅原章一（写真家）、太田宏明（河内長野市教育委員会）、奥田智子（大手前大学）、奥田 尚（奈良県立橿原考古学研究所共同研究員）、喜多貞裕（文化財サービス）、北垣聡一郎（石川県立金沢城郭研究所）、北山峰生（奈良県立橿原考古学研究所）、木村 守（御所市教育委員会）、来瀬光博（宮崎県都市教育委員会、他1名）、合田茂伸（西宮市教育委員会）、合田幸美（大阪府文化財センター）、笹栗 拓（岡山県古代吉備文化財センター）、島田 拓（上郡町教育委員会）、清水一文（高砂市教育委員会）、関野 豊（神戸市教育委員会）、高橋照彦（大阪大学）、高原孝明（竜山石文化会）、田中由理（大阪大学）、寺岡 洋（むくげの会）、寺前直人（大阪大学）、富山直人（神戸市立博物館）、直宮憲一（宝塚市教育委員会）、中野 咲（奈良県立橿原考古学研究所）、中村 弘（兵庫県立考古博物館）、西谷麻衣子（奈良女子大学）、福井英治（元尼崎市教育委員会）、藤川祐作（芦の芽グループ）、藤田和尊（御所市教育委員会）、藤原清尚（高砂市教育委員会）、古川久雄（摂陽文化財研究所）、本間元樹（大阪府文化財センター）、村川行弘（芦屋市文化財保護審議会委員）、森本 徹（大阪府文化財センター）、山村 薫（城郭談話会）、山本三郎（兵庫県教育委員会）、山本徹男（市内遺跡ビデオ撮影、映像作家）、横田真吾（宇治市歴史資料館）、吉田健一（宝塚市教育委員会）、渡邊邦雄（大阪市立咲くやこの花高等学校教諭）、渡辺 昇（兵庫県教育委員会）、和田晴吾（生命館大学）
- （敬称略・五十音順）
12. 調査に用いた基準座標は、石室主軸をY軸にとり任意に設定した。写真測量図には、GPSによる簡易国土座標も併記した。
13. 旭塚古墳墳丘周辺全体図、テラス部平面図・立面図・断面図、石室平面図・立面図・断面図の3Dデジタル写真測量は、東海アナース株式会社・文化財サービスに作業委託した。
14. 近世の生産遺跡である徳川大坂城東六甲探石場城山刻印野に関わる内容では、大坂城と大坂城とを使い分けて記載した。これは、当時の古文書や絵図等に見られる用例に拠った。歴史的な理由は諸説みられるが、字義の繰起直しによるものとされる。
15. 本書では、土層観察記および土器の色調について、『新版標準土色帖1998年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）を使用するとともに、適宜、視認色を用いた。なお、土色帖で判定した「褐色」は「褐色」を代字として使用した。
16. 本書表紙・背表紙題字「旭塚古墳」は、書道家、内藤孝彦氏の揮毫による。
17. 確認調査・発掘調査の経費並びに整理作業費や報告書印刷費は、すべて事業者である旭化成株式会社が負担し、株式会社 間地工業（第1次確認調査）・東海アナース株式会社（第2次確認調査・内業整理業務の一部）に事業者との委託契約に基づき、作業委託した。記してそのご協力に感謝したい。
18. 出土遺物や調査関係資料のすべては、芦屋市役所分室三条整理事務所に保管している。学校教育や社会教育、生涯学習の分野で広く多くの人々の活用に使われることを希望する。

本文目次

序	芦屋市教育長 藤原周三	i
例言		ii
本文目次		iv
挿図目次		vi
表目次		vii
図版目次		viii
I. 序章		
(1) 保存されてきた旭塚古墳—その発見と小林行雄氏による最初期の発掘調査	(森岡秀人)	1
(2) 21世紀における確認調査の動機と経過	(森岡)	1
II. 旭塚古墳をとり巻く景観と地質・地理・歴史		
(1) 旭塚古墳がとけ込んできた地質と地理	(森岡・坂田典彦)	5
(2) 旭塚古墳を生み出した芦屋川上・中流域の歴史環境	(森岡)	8
III. 城山・三条古墳群調査・研究逸史		
(1) 緒言	(森岡)	11
(2) 近世以前—石切場や古墳と関わる古絵図の存在	(森岡)	11
(3) 明治・大正期(1868~1926年)—さまざまな伝承と「朝鮮土器」「祝部土器」の出土	(森岡)	11
(4) 昭和前期(1926~1969年)—紅野芳雄・吉岡昭など地元考古学者の活躍	(森岡)	12
(5) 昭和後期(1970~1988年)—市民に知られるようになった旭塚古墳	(森岡)	14
(6) 平成段階(1989~2008年)	(森岡)	16
城山・三条古墳群、旭塚古墳関係文献集成		17
IV. 旭塚古墳調査・研究の流れと調査記録の整理		
(1) 昭和36年の小林行雄氏ほか京都大学による発掘調査	(森岡)	20
(2) 芦屋市史編集室による基本調査	(森岡)	20
(3) 武庫川女子大学考古学研究会による測量調査	(森岡)	20
V. 確認調査結果の概要		
(1) 第1・2次確認調査の動機と調査目的	(森岡・坂田)	25
(2) 第1次確認調査の実施		
①調査方法と調査経過	(森岡・坂田)	26
調査日誌抄	(坂田)	27
②調査結果	(坂田)	30
トレンチ1 トレンチ2 トレンチ3 トレンチ4 トレンチ5 トレンチ6 トレンチ7		
トレンチ8 トレンチ9 トレンチ10 トレンチ11		
③小結	(森岡)	38
(3) 第2次確認調査の実施		
①調査方法と調査経過	(森岡・坂田)	39
調査日誌抄	(坂田)	39

②拡大調査区Aトレンチの調査概要	(森岡・坂田)	47
トレンチの設定と概要 基本層序 Aトレンチ北東壁土層観察記録 拡張部北西壁土層断面について 拡張部北西壁土層観察記録 土器溜りA 円弧状の溝201		
③旭塚古墳の墳丘・石室確認調査		57
墳丘トレンチの概要(坂田) 墳丘構造(森岡・坂田) 石室構造(森岡・坂田) 石室構造(森岡・坂田) 石室床面の遺構と遺物(森岡・坂田) 外部施設(森岡・坂田) 墳丘(緑)テラス面の存在と供献土器群(森岡・坂田) 前庭部の調査と検出遺構(森岡・坂田) 徳川大坂城石切場関連遺構(森岡・坂田)		
④小結	(森岡・坂田)	90
(4) 第1・2次確認調査の出土遺物	(森岡・坂田)	92
①概観	(森岡・坂田)	92
②第1次調査出土遺物	(坂田)	93
③第2次調査拡大調査区(Aトレンチ)の出土遺物	(森岡・坂田)	94
④第2次調査旭塚古墳関係出土遺物	(森岡・坂田)	100
VI. まとめ		
(1) 立地の特性	(森岡・坂田)	125
(2) 墳形と墳丘構造の特殊性	(森岡・坂田)	125
(3) 墳丘テラス面の存在と多数の供献土器	(森岡・坂田)	125
(4) 石室構造をめぐる二、三の特質	(森岡・坂田)	126
(5) 竜山石の受容とその背景	(森岡・坂田)	126
(6) 供献須恵器群にみられる播磨以西の要素	(森岡・坂田)	126
(7) 城山古墳群の群集墳としての性格	(森岡・坂田)	126
引用・参考文献目録		127
報告書抄録	(坂田)	
編集後記	(森岡)	

挿 図 目 次

第1図	社宅解体後 旧造成地形 調査前現状平面図	2
第2図	土地利用(宅地造成)計画平面図と旭塚古墳保存区域の明示	2
第3図	調査地域(事業地)位置図	3
第4図	兵庫県と芦屋市の位置図	6
第5図	芦屋川・宮川流域地形分類図	7
第6図	芦屋市内主要遺跡分布地図	9
第7図	旭塚古墳周辺主要遺跡分布図と主な出土品	10
第8図	天保8年(1837)の『三木村絵図』にみえる「塚穴」(矢印)	11
第9図	大正年間出土の甕形土器スケッチ	12
第10図	城山南麓出土甕形土器実測図	12
第11図	紅野方雄が残した大正一昭和初期の遺跡地図	13
第12図	古岡氏作成の城山山麓遺跡地図	14
第13図	山芦屋古墳の発掘状況(1)	15
第14図	山芦屋古墳の発掘状況(2)	15
第15図	城山15号墳の発掘調査風景(西方から)	15
第16図	城山17号墳石室内部の発掘風景	16
第17図	古墳時代終末期段階に築造された城山18号墳	16
第18図	城山20号墳石室新制状況(南から)	16
第19図	昭和36年当時の旭塚古墳墳丘(南から)	21
第20図	昭和36年当時の旭塚古墳石室開口部付近(西から)	21
第21図	昭和36年当時の石室(左側壁列の状況)	21
第22図	昭和36年当時の石室(奥道右側壁の状況)	21
第23図	昭和36年当時の旭塚古墳(外護列石西側)	21
第24図	昭和36年当時の旭塚古墳(外護列石東側)	21
第25図	昭和36年当時の石室(兼門付近から奥壁を望む)	21
第26図	昭和36年当時の石室(奥壁上方から見た石室)	21
第27図	発掘前の旭塚古墳墳丘(昭和36年)	22
第28図	旭塚古墳石室上面図	23
第29図	旭塚古墳石室実測図	23
第30図	発掘直後の旭塚古墳(上)正面南から(中)石室内部から(下)側壁の状況	24
第31図	昭和56年当時の近景(北東から)	24
第32図	同石室内部 義道と支室(義道から)	24
第33図	旭塚古墳外形実測図	24
第34図	第1次確認調査トレンチ配置図	26
第35図	調査風景(トレンチ2、北東から)	27
第36図	藤原教育長の現場視察(石室開口部付近)	27
第37図	調査風景(北から)	29
第38図	第1次確認調査 トレンチ1 南壁土層断面図	31
第39図	第1次確認調査 トレンチ2 南壁土層断面図	32
第40図	第1次確認調査 トレンチ3 南壁土層断面図	32
第41図	第1次確認調査 トレンチ4 北西壁土層断面図	34
第42図	第1次確認調査 トレンチ5 西壁土層断面図	34
第43図	第1次確認調査 トレンチ6 南壁土層断面図	35
第44図	第1次確認調査 トレンチ7 北壁土層断面図	35
第45図	第1次確認調査 トレンチ8 南壁土層断面図	36
第46図	第1次確認調査 トレンチ9 北壁土層断面図	36
第47図	第1次確認調査 トレンチ10 東壁土層断面図	37
第48図	第1次確認調査 トレンチ11 北壁土層断面図	37
第49図	調査地全体図・座標割付図	40
第50図	トレンチ配置図と座標割付平面図	41
第51図	市学芸員の現場検討とビデオ記録撮影	42
第52図	現代の竜山石工も来訪しての現場検証	42
第53図	報道関係者発表の光景	44
第54図	現地説明会の一コマ	44
第55図	藤原教育長現地視察風景	46
第56図	Aトレンチ 北東壁土層断面図	48
第57図	Aトレンチ 北西壁土層断面図・互層堆積状況写真	49
第58図	Aトレンチは張部 北西壁土層断面図	51
第59図	Aトレンチ 土器溜りA 子持器台等出土状況平面・立面図	53
第60図	Aトレンチ 土器溜りA 土器出土状況	54

第61図	Aトレンチ サブトレンチA・B 平面・断面図	55
第62図	Aトレンチ 完形土器出土状況 平面・立面図	56
第63図	第1トレンチ 主軸ラインより西へ30~60cm 西壁土層断面図	58
第64図	主軸ライン 土層断面図	58
第65図	第2・3トレンチ 南壁・北壁土層断面図	59-60
第66図	第4トレンチ北壁・セクションC北西壁・第5トレンチ北・南壁土層断面図	61
第67図	第6トレンチ東壁(上)・西壁(下)土層断面図	62
第68図	石室内竜山石出土状況平面図	64
第69図	旭塚古墳石室展開図	65-66
第70図	旭塚古墳石室断面図(開口部からの見越し図)	67-68
第71図	旭塚古墳石室断面図(奥壁からの見越し図)	69-70
第72図	墳丘南西部 コーナー部とテラス面 遺存状況写真	71-72
第73図	墳丘南西部 コーナー部とテラス面 遺存状況平面図	73-74
第74図	石室内制木炭平面・断面図	75
第75図	石室内東西土層断面図	75
第76図	石室内表土出土の閉封時のタイムカプセル	75
第77図	興味深いタイムカプセルの中身一覧	75
第78図	古墳正面図・写真	76
第79図	墳丘南西部テラス面検出直前の平面図・断面断面図	77
第80図	開口部西側外縁列石東面	78
第81図	開口部西側外縁列石西面	78
第82図	墳丘西平城前面第2辺基礎石列 石列正面観 立面図	79
第83図	テラス面遺物出土状況	81
第84図	テラス面遺物出土状況立面図	82
第85図	前庭部西Ⅲ・Ⅳ区・東Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区平面図	83
第86図	前庭部Ⅰ~Ⅳ区 セクション南壁土層断面図	84
第87図	前庭部 竜山石検出状況平面図	85-86
第88図	前庭部Ⅳ区 十字セクション断面図	87
第89図	前庭部東Ⅳ区 土器出土状況平面図	88
第90図	前庭部東Ⅴ区 土器出土状況平面図	89
第91図	前庭部東Ⅴ区 土器出土状況平面・立面図	90
第92図	玄室右側壁 矢穴石平面・断面図	91
第93図	矢穴各部法量測定基準模式図	91
第94図	矢穴石平面・断面図	92
第95図	第1次発掘調査出土遺物 実測図	94
第96図	Aトレンチ出土遺物 実測図	96
第97図	西側サブトレンチ出土遺物 実測図	98
第98図	土器盛りA出土遺物 実測図	99
第99図	Aトレンチ 溝201出土遺物 実測図	100
第100図	Aトレンチ 掘乱出土遺物① 実測図	101
第101図	Aトレンチ 掘乱出土遺物② 実測図、拓影(外面・内面)	101
第102図	墳丘出土遺物 実測図	102
第103図	石室内出土遺物 実測図	103
第104図	墳丘裾部テラス面出土遺物 実測図	104
第105図	墳丘裾部テラス面出土遺物 実測図	106
第106図	墳丘裾部テラス面出土遺物 実測図	107
第107図	墳丘裾部テラス面出土遺物 実測図	108
第108図	前庭部出土遺物 実測図	110
第109図	石器 実測図	111
第110図	耳環 実測図	111
第111図	表面採集遺物 実測図	112
第112図	竜山石剥片 実測図(1)	113
第113図	竜山石剥片 実測図(2)	114
第114図	竜山石 実測図(3)	115
付 図	旭塚古墳全体測量図(袋保存)	

表 目 次

第1表	旭塚古墳確認調査別設定トレンチ法量・発掘面積一覧表	4
第2表	玄室右側壁石付矢穴計測値一覧表	91
第3表	石室・前庭部出土竜山石 数量・法量計測表	116
第4表	遺物観察一覧表	117

図版目次

巻頭図版1 (上)	大阪湾上空から芦屋市街地や六甲山地 東南麓を望む (梅原章一氏 撮影)	巻頭図版19 (上)	竜山石片 法華別集合(1)サンプル (梅原章一氏 撮影)
(下)	六甲山上空から芦屋市街地や大阪湾を 望む (梅原章一氏 撮影)	(下)	竜山石片 法華別集合(2)サンプル (梅原章一氏 撮影)
巻頭図版2 (上)	六甲山上空から芦屋川と旭塚古墳周辺 を望む (梅原章一氏 撮影)	図版1	解体前の旭化成社宅と城山 (南から) 解体前の旭化成社宅と築港前の旭塚古墳 (南から)
(下)	市街地上空から六甲山地前山と旭塚古 墳周辺を望む (梅原章一氏 撮影)	図版2	調査前の事業地の現状 (南から) 調査前の事業地の現状 (南西から)
巻頭図版3	旭塚古墳前庭部調査区南端から樹木伐 採後の墳丘と石室を望む (梅原章一氏 撮影)	図版3	第1次確認調査前の状況 (調査地北東端・北西から)
巻頭図版4 (上)	開口部付近からみた旭塚古墳の石室 (梅原章一氏 撮影)	トレンチ1と旭塚古墳 遠景 (北西から)	
(下)	奥壁付近からみた旭塚古墳の石室 (梅原章一氏 撮影)	トレンチ1 旭塚古墳・墳丘部石列検出状況 (北西から)	
巻頭図版5 (上)	玄室支門部付近からみた奥壁と直下の 床石 (梅原章一氏 撮影)	トレンチ1 旭塚古墳・墳丘部北東壁・土層断面 (南西から)	
(下)	奥壁上からみた旭塚古墳の石室と床石 (梅原章一氏 撮影)	トレンチ2 東端・遺物出土状況 (北東から)	
巻頭図版6 (上)	墳丘南西部の多角部基底石と残存テラス 面における土器出土状態 (西から)	トレンチ3 表土除去後の状況 (北東から)	
(下)	墳丘裾部テラス面出土の大量の供献土 器群 (須恵器と土師器)	トレンチ4 表土・盛土除去後の状況 (南西から)	
巻頭図版7 (上)	墳丘裾部テラス面出土土器群 (造雑石 材除去前、東から、梅原章一氏 撮影)	トレンチ5 完掘状況 (南から)	
(下)	墳丘裾部テラス面出土土器群 (造雑石 材除去前、西から、梅原章一氏 撮影)	図版4 トレンチ6 完掘状況 (東から)	
巻頭図版8 (上)	拡大調査区A トレンチ 子持器台ほか 出土状況 (西から、梅原章一氏 撮影)	トレンチ7 基礎床の確認状況	
(下)	拡大調査区A トレンチ 子持器台ほか 出土状況 (北東から、梅原章一氏 撮影)	トレンチ8 完掘状況東・南壁断面 (西から)	
巻頭図版9	拡大調査区A トレンチ 溝201 土器出 土状況 (南西から、梅原章一氏 撮影)	トレンチ9 完掘状況 (東から)	
巻頭図版10 (上)	拡大調査区A トレンチ 溝201 須恵器 平砥出土状況 (梅原章一氏 撮影)	トレンチ10 完掘状況東壁断面 (北西から)	
(下)	拡大調査区A トレンチ 溝201 土師器 壺出土状況 (梅原章一氏 撮影)	トレンチ11 北壁土層断面 (南西から)	
巻頭図版11 (上)	前庭部 西Ⅳ区 竜山石敷布面検出状 況 (南から)	第1次確認調査地中央部の掘り戻し状況 (西から)	
(下)	前庭部 西Ⅳ区 竜山石敷布面検出状 況 (北、上方から)	図版5 第2次確認調査前の状況 (北西から)	
巻頭図版12	復元された主要出土土器 (梅原章一氏 撮影)	調査区機械掘削の状況 (北西から)	
巻頭図版13 (上)	復元された子持器台 (梅原章一氏 撮影)	A トレンチ 人力掘削開始風景 (北から)	
(下)	復元された子持器台 (梅原章一氏 撮影)	A トレンチ 遠景 (南西から)	
巻頭図版14	墳丘裾部テラス面出土遺物 (梅原章一氏 撮影)	2層上面精査状況 (西から)	
巻頭図版15	耳環と土師器 (虎)	図版6 A トレンチ 深掘部2段目掘削状況 (南東から)	
巻頭図版16	前庭部 竜山石大型剥片 (上下がA・B面、中央が接写、梅原 章一氏 撮影)	A トレンチ 北壁 礫出土状況 (北から)	
巻頭図版17	前庭部 竜山石中型剥片 (上下がA・ B面) (梅原章一氏 撮影)	A トレンチ 2層上面精査状況 (北から)	
巻頭図版18	前庭部 竜山石小型剥片 (A・B面) と竜山石剥片集合	A トレンチ 北半部 礫出土状況 (南西から)	
		A トレンチ 機械掘削後の精査面 (北東から)	
		図版7 A トレンチ 南半部と拡張部 礫出土状況 (南から)	
		A トレンチ 北壁土層断面 (1段目)	
		A トレンチ 北半部 土層断面 (南東から)	
		A トレンチ 北半部 2層下面礫出土状況 (北西から)	
		A トレンチ 北半部 2層下面礫出土状況 (北西から)	
		A トレンチ 南端部 完掘状況 (南東から)	
		A トレンチ 南半部 遺物出土状況俯瞰 (北東から)	
		A トレンチ 南端部 遺物検出状況 (東から)	
		図版8 A トレンチ 土器溜りA 遺物検出状況 (南から)	
		A トレンチ 南半部 遺物出土状況俯瞰 (北東から)	
		A トレンチ 土器溜りAと拡張部の状況 (東から)	
		A トレンチ 土器溜りA 遺物検出状況 (北西から)	

	Aトレンチ	土器溜りA	土器取り上げ後状況 (東から)	床面の半截状況(北西から)				
	Aトレンチ	土器溜りA	土器取り上げ後状況 (南東から)	玄室部床面の半截状況(南東から)				
	Aトレンチ	土器溜りA	土器取り上げ後状況 (西から)	築造部床面遺物検出状況(竜山石敷布面)				
	Aトレンチ	土器溜りA	土器取り上げ後状況 (西から)	築造部床面遺物検出状況(竜山石敷布面)				
図版9	Aトレンチ	土器溜りAと完形土器検出状況 (北東から)		図版19	腐植土除去後の石室床面状況(南東から)			
	Aトレンチ	南半部	遺物出土状況		石室床面主軸トレンチ掘削状況(南東から)			
	Aトレンチ	溝201	完形土器検出状況俯瞰 (南東から)	図版20	玄室部副木床検出状況(左側壁から)			
	Aトレンチ	溝201	完形土器検出状況 (北東から)		玄室床面(玄門から)			
	Aトレンチ	溝201	完形土器検出状況(南から)		玄室奥壁と床石、詰石除去状況(東上から)			
	Aトレンチ	溝201	完形土器出土地連景 (北東から)		奥壁裏込めの状況(東から)			
	Aトレンチ	溝201	完形土器検出状況(南から)	図版21	調査前の多角部と外護列石風に覆まれた後補石材 (南から)			
	Aトレンチ	溝201	完形土器出土地連景 (北東から)		表土除去後の墳丘遺存状況(南西から)			
	Aトレンチ	溝201	検出状況俯瞰(北西から)	図版22	多角部掘とテラス面の状況(南西から)			
	Aトレンチ	溝201	検出状況(北東から)		多角部掘と掘削前のテラス面の状況(西から)			
	Aトレンチ	溝201	検出状況(北東から)	図版23	基底列石とテラス面検出状況(南東から)			
	Aトレンチ	溝201	検出状況(北東から)		貼石の崩壊状況とテラス面の土器出土状況 (西から)			
図版10	Aトレンチ	溝201	検出状況(北東から)		テラス面出土の土器群(南から)			
	Aトレンチ	溝201	検出状況(北東から)		テラス面出土の土器群(西から)			
	Aトレンチ	溝201	検出状況(北東から)	図版24	テラス面出土の土器群(西から)			
	Aトレンチ	溝201	検出状況(北東から)		テラス面出土の土器群(南から)			
	Aトレンチ	溝201	検出状況(北東から)	図版25	テラス面出土の土器群(南東から)			
	Aトレンチ	溝201	検出状況(北東から)		テラス面出土の土器群(東から)			
図版11	Aトレンチ	掘張部	北西壁 (旧旭化成社宅掘形断面)		墳丘・列石・供献土器除去後掘削、テラス面完掘 後の状況(西から)			
	Aトレンチ	掘張部	北西壁 (旧旭化成社宅掘形断面)	図版26	前庭部調査区設定状況(南東から)			
	Aトレンチ	掘張部	北西壁 (旧旭化成社宅掘形断面)		前庭部調査区掘削状況近景(北、墳丘側から)			
	Aトレンチ	掘張部	北西壁 (旧旭化成社宅掘形断面)	図版27	砕石層除去後の状況(南東から) (俯瞰)			
	Aトレンチ	溝201	セクション断面(西から)		西Ⅱ・Ⅲ区	表土除去後の状況(南西から)		
	Aトレンチ	溝201	完掘状況俯瞰(北西から)		西Ⅰ～Ⅲ区・東Ⅰ～Ⅲ区	掘削状況(北西から)		
	Aトレンチ	掘張部	北西壁土層断面(東から)		東Ⅳ区中央	土器出土状況(南から)		
図版12	旭城古墳南側	(北西から)			東Ⅳ区東端	土器出土状況(南から)		
	調査前の墳丘	(南東から)			東Ⅳ区	土器器表検出状況(北から)		
	墳丘列石出土状況	(北東から)			西Ⅳ区	竜山石敷布面検出状況(南から)		
	墳丘列石出土状況	(北西から)			西Ⅳ区	竜山石敷布面検出状況(南東から)		
図版13	墳丘トレンチ設定状況	(西から)		図版28	西Ⅳ区	竜山石敷布面検出状況(西から)		
	墳丘トレンチ設定状況	(北西から)			西Ⅳ区	竜山石敷布面(東から)		
図版14	第1トレンチにみる盛土の状況	(南東から)		図版29	西Ⅳ区	竜山石検出状況(北から)		
	第1トレンチ奥壁裏込め部の概観	(北東から)			西Ⅲ・Ⅳ区	竜山石敷布面分層調査セクションベ ルト設定状況(北から)		
	第1トレンチ東壁土層断面と近世遺構	(西から)		図版30	西Ⅲ・Ⅳ区	竜山石敷布面除石後完掘状況 (東から)		
	第2トレンチ掘削状況	(東から)			主軸トレンチ最終掘削 (開口部から前庭部を望む)			
	第2トレンチ南壁土層断面	(北から)			主軸トレンチ最終掘削 (前庭部から開口部を望む)			
	第2トレンチ南壁土層断面	(北から)			図版31	石室奥壁背面コッパ出土状況(東から)		
	第3トレンチ掘削状況	(西から)				石室奥壁背面土層断面(南から)		
図版15	第3トレンチ掘削状況	(西から)				墳丘第1トレンチ	コッパ出土状況(北から)	
	第3トレンチ完掘状況	(西から)				墳丘北西部の近世遺構と現代の石列	(南東から)	
	近世遺構と墳丘内列石	(北東から)		図版32	第1次確認調査	出土遺物		
	コッパ溜りと墳丘内列石	(北西から)		図版33	Aトレンチ	土器溜りA出土土物	子持器台 (南側)	
	コッパ溜りと墳丘内列石	(西から)			Aトレンチ	土器溜りA出土土物	子持器台 (横から)	
	墳丘内列石	(北東から)			図版34	Aトレンチ	土器溜りA出土土物	子持器台 (復元途中)
	墳丘西部の掘削状況	(南東から)				Aトレンチ	土器溜りA出土土物	子持器台の台 座か
図版16	調査前の状況	(南東から)			図版35	Aトレンチ	掘削出土土物②	外面
	除染後の状況	(南東から)				Aトレンチ	掘削出土土物②	内面接写
図版17	調査前の状況	(北西から)				Aトレンチ	掘削出土土物②	内面接写
	後補石材除去後の状況	(南東から)				Aトレンチ	掘削出土土物②	内面接写
	調査前の状況	(右側壁)				Aトレンチ	掘削出土土物②	内面接写
	調査前の状況	(南東から)				Aトレンチ	掘削出土土物②	内面接写
図版18	築造部床面の半截状況	(北東から)				Aトレンチ	掘削出土土物②	内面接写
	床面の半截状況	(北西隅から)				Aトレンチ	掘削出土土物②	内面接写

- 図版36 Aトレンチ 溝201 出土遺物
- 図版37 Aトレンチ 溝201 出土遺物
- 図版38 Aトレンチ 土器溜りA 西側サブトレンチ 第1次確認調査出土遺物
- 図版39 Aトレンチ 土器溜りA 西側サブトレンチ出土遺物
- 図版40 Aトレンチ 出土遺物
- 図版41 墳丘裾部テラス面出土遺物
- 図版42 墳丘裾部テラス面出土遺物
- 図版43 墳丘裾部テラス面出土遺物
- 図版44 墳丘裾部テラス面出土遺物
- 図版45 墳丘裾部テラス面出土遺物
- 図版46 墳丘裾部テラス面出土遺物
- 図版47 墳丘裾部テラス面出土遺物
- 図版48 墳丘裾部テラス面出土遺物
- 図版49 墳丘裾部テラス面出土遺物
- 図版50 墳丘裾部テラス面出土遺物
- 図版51 墳丘裾部テラス面出土遺物
- 図版52 墳丘裾部テラス面(上)、前庭部(下)出土遺物
- 図版53 墳丘裾部テラス面出土遺物
- 図版54 墳丘裾部テラス面出土遺物
- 図版55 Aトレンチ・墳丘・墳丘裾部テラス面出土遺物
- 図版56 墳丘・石室内・前庭部出土遺物
- 図版57 Aトレンチ・西側サブトレンチ・土器溜りA・溝201・攪乱①出土遺物
- 図版58 Aトレンチ・西側サブトレンチ・土器溜りA出土遺物
- 図版59 Aトレンチ・西側サブトレンチ・土器溜りA・攪乱①出土遺物
- 図版60 墳丘・墳丘裾部テラス面出土遺物
- 図版61 墳丘・石室内・前庭部出土遺物
- 図版62 前庭部出土遺物
- 図版63 墳丘・墳丘裾部テラス面・表面採集遺物
- 図版64 石器
- 図版65 電山石 大型剥片(A面)
- 図版66 電山石 大型剥片(B面)
- 図版67 電山石 中型剥片
- 図版68 電山石法量別集合①
電山石法量別集合②

I. 序 章

(1) 保存されてきた旭塚古墳—その発見と小林行雄氏による最初期の発掘調査

表六甲の閑静な山の手の住宅街に建てられた旭化成株式会社の社宅内に、多くの人々の努力によって長年ひっそりと保存されてきた一つの古墳があった。この古墳を一体どれくらい訪れたことであろうか。高等学校のクラブ活動で見学したのが昭和42年（1967）のことだったから、既に40年以上も前の話になる。芦屋市役所のある上司は、この古墳の石室の中を指指して友達同士中に入ってはしゃぎ遊んだ小学校時代の頃を大変懐かしむ。巨石でとり囲まれた閉鎖的でありながら、天井のない開放的な非日常的な空間が、幼な心に一生の思い出、消えることのない印象となって残っているのだろう。同じように昔なつかしげにノスタルジイに浸ってこの古墳を眺めてきた人は多い。なぜ、こんなところに石をふんだんに使った石の部屋が……。——その名も「旭塚古墳」。この古墳の保存を理解し、日頃接してきた寮内の方々はもちろんのこと、芦屋市民が六甲山の山麓部の住宅地に佇むこの古墳と親しんで実に半世紀近くになる（巻頭図版1・2、図版1）。

さて、冒頭から雑々記してきた本書の主人公、旭塚古墳の発見は、昭和30年代に遡る。中世の山城でつとに知られる鷹尾城の存在する烏帽子形の山容を誇示したやや独立的に見える三角錐状の山塊は、通称「城山」と呼ばれており、その南麓に大きな石室を有する古墳がかなり群集したことは、明治時代の頃からよく知られている。大正年間には、芦屋の名所絵葉書の一枚に「城山古墳」として作られる程、地域の人々に密着し、認知された存在であった。現在、兵庫県芦屋市山戸町23番地に所在する旭塚古墳は、当時、数多く見出されていた群集墳中の一墳だったと思われる。そして、今から半世紀近く前、先に記した旭化成株式会社社宅建設に際して、昭和36年（1961）に発見されるに至り、京都大学考古学教室の小林行雄氏や小野山節氏らが発掘調査を行ったのである〔小林1961〕。昭和の高名な考古学者の足跡が、この芦屋の地域にもこうして残されていたのである。

（森岡秀人）

(2) 21世紀における確認調査の動機と経過

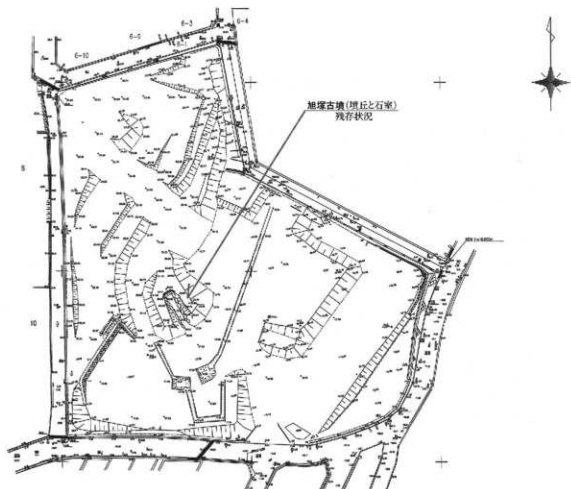
今から50年近く前に遡る旭塚古墳の発見とその発掘調査を経て、本墳は旭化成株式会社のご好意により、社宅内に長らく保護されてきた。後述するように、その間、二、三の予備調査や武庫川女子大学考古学研究会による測量調査が実施されたが〔武庫川女子大学考古学研究会1984〕、社宅において以後大きな改変を被らず、兵庫県下でも古墳時代終末期を代表する巨石使用の横穴式石室墳の一つとして、多くの人々に親しまれ、研究者には観察の機会と便宜を与えてきた〔森岡・村川1996〕。

しかし、平成18年（2006）の春頃になって、経済変化に伴い旭化成株式会社関係の再開発の動きが俄かに活発化し始め、その年の秋頃には、同社社宅の住民自体が既に退去していることを確認、同時に旭塚古墳自体の現状写真記録が樹木の繁茂や保存管理の上から早急に必要と考え、同社の許可を得て、再開発計画以前の現状写真を数多く撮影した。旧状を示すこの記録は、今となっては、当時の面影を知る貴重な記録と言える（図版1）。

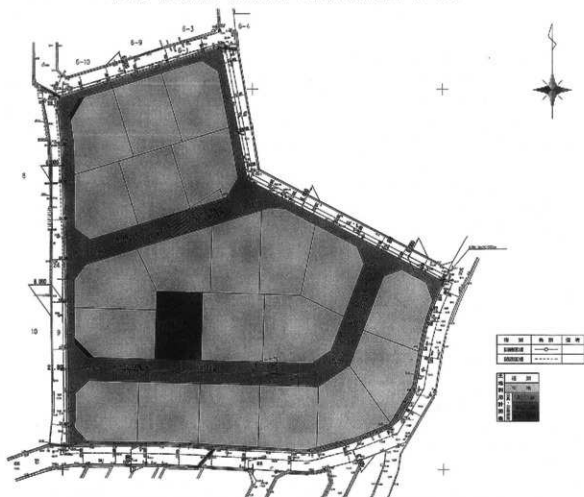
具体的な再開発計画については、文化財保護法（昭和25年法律第214号）第93条第1項の規定に基づき埋蔵文化財発掘届出書（第6号様式-2）が、平成20年（2008）7月3日付、事業者の旭化成ホームズ株式会社代表取締役波多野哲吾（東京都新宿区西新宿二丁目3番1号）から兵庫県教育長宛提出されたため、芦屋市教育長名により届出書を兵庫県教育委員会に進達した（芦教生第599号、平成20年7月3日）。

平成20年10月工事着手、平成21年10月工事終了が予定された宅地造成を目的とした戸建分譲住宅建設計画の概要は、復建調査設計株式会社大阪支社（榎井征一郎、大阪市淀川区西宮原1-4-13）を代理者とし、事業地の面積7,438.01㎡、切土約3mで面積2,891㎡、盛土約4mで面積4,320㎡を測り、1m前後の土砂地盤改良を全体的に加える内容が提示されたものであった（第1・2図、図版2）。

第1図は建築図面として添付された旭化成社解体後の現況平面図（縮尺1/500）をさらに50%縮図して1/1,000にしたものであり、第2図は旭塚古墳を含む1区画を芦屋市に寄附提供した状況での土地利用計画平面図（1/500）を第1図同様1/1,000にして統一を試みた平面図である。また、第3図は事業地を中心にマークされた1:5,000の地形図（事業者提供）を1ページに入る大きさに加工したものである。なお、本開発行為は、



第1図 社宅解体後 旧造成地形 調査前現状平面図 1/1000



第2図 土地利用(宅地造成)計画平面図と旭塚古墳保存区域の明示 1/1000



第3図 調査地域（事業地）位置図 1/5000

土地所有者等関係利用者の同意を開発行為者である旭化成ホームズ株式会社（代表取締役波多野信吾）から権利者の旭化成株式会社（代表取締役経田史郎、大阪市北区堂島浜1丁目2番6号）に求めたものである。

第4号様式に基づく兵庫県教育長への第2次確認調査の結果報告については、芦教生第600号、平成20年7月3日付、芦屋市教育長藤原周三名によって行い、別表（第1表）の試算を行って調査面積996㎡を割り、平成19年7月1日～11月30日の期間でもって実施したことを通知し、その後の取り扱いを慎重工事とした。この報告は、先に記した文化財保護法に基づく土木工事等の届出に添えて提出した。その結果、遺跡分布地図の追補訂正を要し、第5号様式に基づき、包蔵地を旭塚古墳を含む一画として保存し、他は全体の調査を終えたとして、城山・三奈古墳群の包蔵地範囲から削除した。また、以上の進捗に呼応した「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」は、教文第1908号（平成20年9月2日付）により兵庫県教育長から芦屋市教育長宛、通知されたので、これを受理した。

（森岡）

第1表 旭塚古墳確認調査別設定トレンチ法量・発掘面積一覧表

第1次確認調査 設定トレンチ法量・面積表				
トレンチ番号	幅(m)	長さ(m)	面積(㎡)	発掘全体におけるトレンチ面積の割合
1	2	48	96	1.8
2	2	30	60	0.9
3	2	20	40	3.4
4	2	22.5	45	2.5
5	2	26	52	2.3
6	2	31	62	3.4
7	2.5	7	17.5	2.5
8	2	16	32	2.3
9	2	25	50	2.4
10	2	36	72	2.0
11	2	28	56	1.2
合計面積(第1次)			992.5	8%
敷地面積			7488.01	

第2次確認調査 設定トレンチ法量・面積表					
地区名	トレンチ番号	幅(m)	長さ(m)	面積(㎡)	発掘全体におけるトレンチ面積の割合
Aトレンチ	上段	13	32	416	7.8
	下段	9	10	90	
	裾張線①	5.5	5	27.5	3.4
	裾張線②	9	10	90	
	小計			623.5	
	1	2	10	20	1.1
項丘	2	2.5	13	32.5	2.8
	3	3	9.5	28.5	2.6
	4	2	5	10	1
		4	3	12	
	5	1.5	3	4.5	0.8
	6	1.5	4	6	0.8
セクション	小計			113.5	
	A	1.5	5.5		
		1×1.5÷2=0.75 (面積計算上引く値)		7.5	—
	B	1.5	6.5	9.75	—
	C	3.5	5	17.5	1.4
	小計			34.75	
度面跡東	1	2.5	6		
		6×5÷2=15 (面積計算上引く値)		30	9.4
	2	1.5	6	9	1
	3	1.5	6	9	1
	4	2.5	6		
		0.5×6÷2=1.5 (面積計算上引く値)		13.5	1.2
度面跡西	5	4	6	24	1
	裾張線	3	6	18	1.2
	小計			103.5	
	1	1.5	6		
		6×1÷2=3 (面積計算上引く値)		6	1.2
	2	1.5	6	9	1.2
度面跡西	3	1.5	6	9	1
	4	2.5	6		
		1×2.5÷2=1.25 (面積計算上引く値)		13.25	1
	5	3	3.5	10.5	—
	小計			47.75	
	石室	1	9.5	9.5	0.5
合計面積(第2次)				992.5	13%
第1・2次 総合計				1,515.0	21%
敷地面積				7488.01	

II. 旭塚古墳をとり巻く景観と地質・地理・歴史

(1) 旭塚古墳がとけ込んできた地質と地理

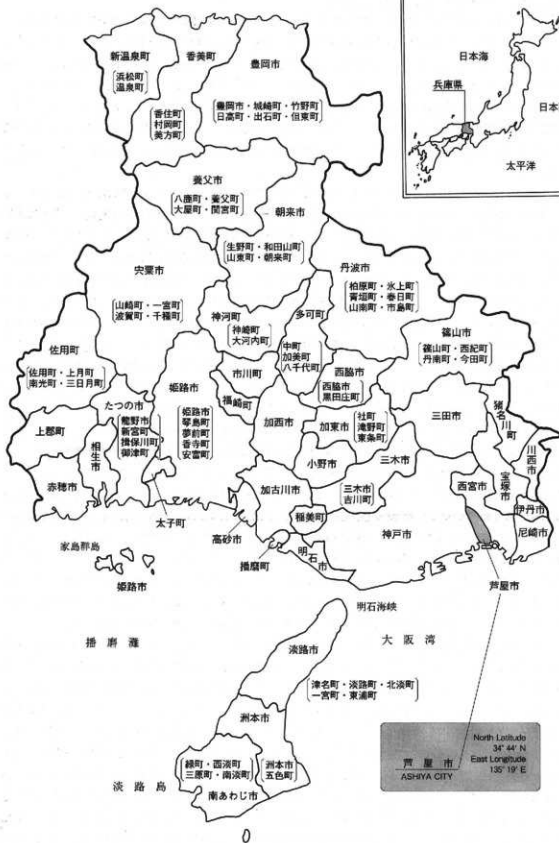
旭塚古墳が所在する芦屋市は、兵庫県南東部に位置し、瀬戸内海の東端になる大阪湾の北岸に面した県下第2の小さい自治体である。行政域は、西側は港都神戸市と、東側は文教都市西宮市と接しており、いわゆる阪神間と呼ばれている地域に存在する。市域は東西約2.5km、南北約8.3km、面積18.57km²の広さで、推計人口93,096人（平成21年4月1日現在）を数える（第4図、巻頭図版1・2）。東西は狭く、南北には長い小都市である。商都大阪、港都神戸への交通の利便性はすこぶる良く、阪神間の東西物流の要所であることも手伝って、古代以来の求心の人の動きや屈指の高級住宅都市としての一面を垣間見せる。また、昭和26年以降は、正式に国際文化住宅都市として、現代に至る芸術・芸能・文学・歴史の幅広い文化を積極的に街中に取り込み、常に先進的な受容と模索を試みている。

本墳は、上記芦屋市の西端寄り、市域西部を南流する芦屋川右岸の鷹尾山山城（通称 城山、標高260m）の南麓斜面、標高77m前後の所に立地する。城山は六甲前山の一角を占め、山頂部一帯には弥生時代の高地性集落や中世城郭である鷹尾城関連の遺構が広がっている。この地域を地質概要の面から眺めると、有名な六甲山地を構成する地史は、2億年より少し前、中生代三畳紀やジュラ紀前半段階の丹波層群時代に遡り、大陸縁部にあった日本列島のものは当時海底であり、沈積した泥岩が主体をなす。現状での分布域は狭であるが、近傍では東おたふく山辺で散見される。隆起・浸食が加わった後、白亜紀には火山活動が活発化し、同紀中頃には有馬層群、同紀後半になると、六甲花崗岩や布引花崗閃緑岩が形成される。両者は大隆起期での火山活動を要因とするものであり、丹波層群中を花崗岩が貫入する。6500万年前以降に始まる古第三紀は、砂岩・礫岩・泥岩・凝灰岩が溜まる3000万年代の時代には、柔らかい神戸層群の分布として把握できる。約1500万年前、新第三紀中新世を迎えるが、ここに私たちがみる日本列島の原型が完成する。火山の噴火により、甲山安山岩が火山活動の溶岩として誕生し、その後の浸食で独立した甲を伏せたような特徴的な形態が窺い出された。関連する安山岩を主とする活動痕跡は、大阪府二上山、香川県屋島をはじめ、瀬戸内海地域で広い分布形態を示す。六甲山の基盤地質である六甲花崗岩の上に新生代第三紀鮮新世～第四紀更新世（約300～25万年前頃）に堆積した大阪層群と呼ばれる海成層が乗る。古瀬戸内海と呼ばれる沈降の淡水湖に堆積したのが大阪層群で、その後120万年前頃には周囲から海水が流入し、さらに六甲変動が生ずる。この間、氷期と間氷期をおよそ10万年周期で繰り返す気候変動を伴ったが、約100万年前頃から東西方向の圧縮を受け、六甲山地を形成する隆起活動（六甲変動）が始まり、この山地生成過程を含む地殻変動において六甲断層系と呼ばれる多くの断層（六甲断層、五助橋断層、芦屋断層、甲陽断層、大月断層、諏訪山断層、布引断層、瀬が森断層、須磨断層など）が生じたのである。これらの断層は、岩盤の弱いところにひび割れができ、それが両端からの圧力により一方が押し上げられて形成されるため、押し上げ断層（衝上断層）とも呼ばれている。かかる隆起に際して、古大阪湾に堆積した大阪層群が引きずられるように持ち上げられ、現在では地上の高所部でも大阪層群を構成する海成粘土層が断続的に確認できる。

その後、およそ25～15万年前頃に山頂付近をはじめ、階段状に断層崖として露出している花崗岩体の節理から風化・剝離や浸食が始まり、やがて崩落と流下が進んで大阪層群が被覆する山地裾斜面上に再堆積する。そして、これらはさらに段丘化し、古い地形面から段差を解消しながら平野部と接続しており、多数の円磨を帯びた花崗岩巨礫を包含することによって、段丘礫層と呼称されている。段丘礫層中にはこのように二次的に移動した花崗岩塊が無秩序に含まれているが、傾向として、六甲前山側の南斜面で見られる花崗岩礫は、径1mを超える大割れの巨礫が多い。六甲山地の基幹岩である花崗岩は、マグマが地下深い場所で時間をかけて冷却、固結した深成岩の一種で、石英・斜長石・カリ長石の3鉱物を数多く含む岩石である。これに黒雲母や角閃石が加わるが、前述した3鉱物の含有率によって細別され、山地全体に分布する六甲花崗岩は、総称「本みかげ」の名を有し、薄いピンク色を呈するカリ長石の存在が大きな特徴で、半透明の石英や白っぽい斜長石より際立っている。そして、市内高座川以西には、斜長石が多く、有色鉱物を含む布引花崗閃緑岩が分布している。第5図には、現状の芦屋市周辺地形分類図（芦屋川・宮川流域）を辻康男の業績（辻2002、辻ほか2003）から引いておく。

六甲山南麓斜面には、これらの石材を巧みに使用した横穴式石室を内蔵する6～7世紀の古墳群や、17世紀初

日本海



第4図 兵庫県と芦屋市の位置図（平成18年10月作図、市町村合併状況含む）（ ）は旧市町を示す

めの元和・寛永期に行われた大坂城再築に伴う石垣石材の採石場が分布する。

旭塚古墳は、従来から巨石墳として知られているが、長軸長が3mにおよぶ花崗岩の大きな石材を石室に活用している。さらに、上記の大板城岡連遺構として、石室石材の一部を石垣用材に転用しようと切り出した際の江戸時代初期の欠穴重も確認されている。

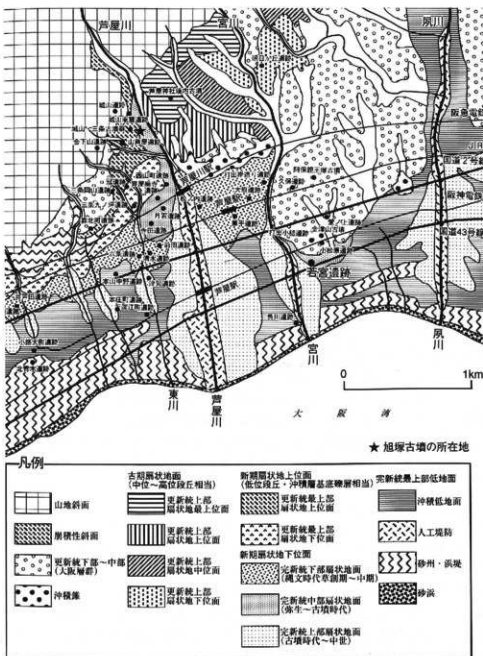
このような地質・地形環境の下、本墳をミクロ的な視点で眺めると、城山から派生する微丈尾根の先端付近に立地し、墳丘背面を大きくカットし、地山を残核状に削り出した高まりで最小限の盛土をし、封土を成している。墳丘の立地プランとしては、いわゆる「山寄せ」とか「山付け」と称される視覚的効果を最大限利用し、墳丘と背山のある城山の互いの端ラインが見えかけ上重複し、開口部から眺めるとより一層雄大な印象を受けるような配置とされているようである（参照図表1・2、図中表紙2・2下・3最上段）。

一方、別の視点からみるならば、陰宅風水の思想を意識的に取り入れた立地であり、ねらいを定めた選地を窺い知ることができる。東西に派生する尾根側の谷状地形奥部の独立した突出微支尾根上に立地し、北に城山を背負い、東に芦屋川が流下し、南は大阪湾を眺望できる「四神相応の地」に選地されていることが容易に理解できる。いずれにせよ、津梁系氏族の墓域と考えられている当古墳群中に所在する祖塚古墳は、後述するように目に

見える墳丘や石室の構築技術という古墳自体の特異性に加え、その立地においても大陸の思想や文化などを積極的に摂取した先取性と計画性ある選地が行われていたことは間違いない。

以上、周辺地域の地理・地質環境の特性について概略を触れてきたが、最後に六甲山地の森林植生を構成する植物が180種以上にも及び、明治時代初期の禿山から現在の植生の回復に至るまでの森を目指した治山事業を看過できない。常緑針葉樹のアマツ・コケツが優勢し、他にシイ・カシ・コナラ・スギ・ヒノキ・ブナなどの林が人工林を含む形で展開している。かような背山環境が往時はどうであったのだろうか。

(森園・坂田農産)



第5図 菅屋川・宮川流域地形分類図 [古2002, 2003]

(2) 旭塚古墳を生み出した芦屋川上・中流域の歴史環境

紙幅の都合もあり、本書では芦屋川流域の古代環境までの個々の遺跡に比重を置いて、旭塚古墳が生れた歴史的な環境や時代背景を記述する。芦屋市域全般の原始・古代から近代・現代に向けての流れについての詳細は、他の地誌・市史類や調査報告書、事典・辞典の類に委ねたい。本節では、旧石器・縄文時代から営まれた主要な流域遺跡を取り上げることに留め「芦屋市1971、芦屋市教育委員会1993・2001a、勇・藤岡1976、田辺・岩本・森岡ほか1979、村川・森岡1976、森岡・村川1996」、近辺の遺跡地図を掲げておきたい（第6・7図）。

①山芦屋遺跡（山芦屋町）

芦屋川と高座川の合流点の北方、標高80m前後の段丘上に立地している。これまでの調査では、縄文時代早期～後期の土器や石器が多数出土している。14地点に及ぶ調査や工事立会などが経過しており、遺跡範囲も東西150m以上、南北200m以上に広がりをみせつつある。検出された遺構では、早期末の石垣炉や中期末～後期初頭の堅穴住居跡1棟なども認められ、時期ごとに生活の基盤となる有力地点の推移があったと考えられる。会下山や城山の山裾に展開した縄文集落の動きが看取される。本遺跡をもって設定された「山芦屋式」の縄文土器は、まだ全貌が明らかになっていないが、近畿地方におけるタイプサイトとしての重要性を示唆している。

②城山遺跡（大字城山）

標高220～260mの山頂尾根部一帯に点々と土器や石器が確認されており、一部発掘を行ったところでは堅穴住居跡がみついている。西方の尾根上に存在する会下山遺跡（兵庫県史跡第1号）と並んで、近畿地方を代表する典型的な弥生時代高地性集落の一つである。中期末～後期初頭の弥生土器をみる限り、中河内地域とも深い交流があったようである。会下山遺跡より大規模な高地性集落がこの尾根上に存在するのかもしれない。

③城山南麓遺跡（大字城山・山芦屋町）

城山山境には弥生時代中期末から後期前半の高地性集落である城山遺跡が存在している。その山麓部、標高70～160mの所に位置する城山南麓遺跡においても、同時期の集落跡が確認されている。眺望もある程度確保されており、準高地性の遺跡の一つと言える。空壕の一部などがみつかり、争乱に関係した集落とも考えられている。後述する城山古墳群とも重なる。土器は弥生中期後半～後期前半の資料が出土。

④城山古墳群（大字城山・山芦屋町）

古墳時代後期から飛鳥・白鳳文化期にかけて営まれた群集墳である。円墳中心で一部方墳を含み、主な埋葬施設は横穴式石室である。芦屋川の支流である高座川を挟んで、西方には6世紀前半から造墓活動を開始する三条古墳群が分布している。ただし、高座川は中世後期に付け替えられた人工河川とも考えられている。

当古墳群では、これまでに山芦屋古墳・旭塚古墳・第3・4・10・15・17・18・20号墳など10基程度の古墳が発掘調査されている。それらの特徴は、本書全体を通して随所で触れられるが、阪神地方では珍しい巨石墳・終末期古墳・多角形墳・小型堅穴式石室墳などを含み込み、異色なものが数多くみついている。さらに、耳環など装身具の多い八十塚古墳群とは異なり、武器・馬具の副葬が顕著で、甕形土器をもつ古墳も4例認められる。これは兵庫県下の8割近くを占めるものであって、特異な分布である。これらの諸特徴から、本古墳群の被葬者は、当地域に本拠地を有する有力な渡来系氏族である可能性が高いと考えられている。

なお、この時期の集落跡は、芦屋川右岸の扇状地を中心に立地する月若・芦屋庵寺・寺田・西山町・三条岡山・三条九ノ坪・冠などの諸遺跡でみつかり、6～8世紀の人口密度もきわめて高い地域である。

⑤鷹尾城跡（大字城山）

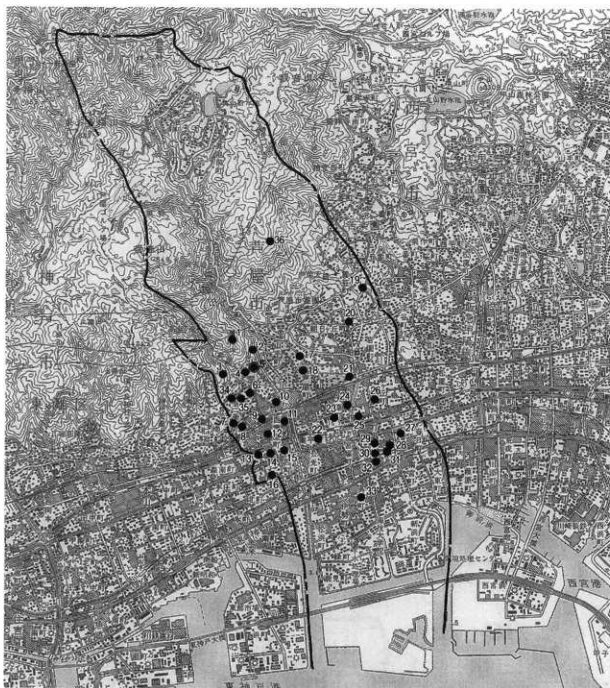
時代が下り、室町時代になると、摂津豊島の土豪、瓦林政頼が16世紀前半、鷹尾山（通称城山）山頂に、鷹尾城を築くが、前記した城山南麓遺跡のこれまでの調査でも同時期の建物跡や火葬墓などが検出されている。これらの遺構の性格は、山城（鷹尾城）と対になる平城（日常の居館）と考えられている。

⑥徳川大坂城東六甲採石場城山刻印群（大字城山・山芦屋町）

近年、注目度が急速に高まった近世の生産遺跡の一つである。「徳川大坂城東六甲採石場」と呼ばれるこの石切場は、江戸幕府によって元和6年～寛永6年（1620～1629）にわたって推進された徳川氏による大坂城再建事業に伴う石垣用石材の採石場跡で、石切丁場とも表現される。六甲山地南麓地域一帯（西宮市西部～神戸市灘区）の東西約7kmにわたって分布している。また、刻印石の内容や分布を軸にして、6つの刻印群（東から甲山・北山・越木岩・岩ヶ平・奥山・城山刻印群）に細分されており、その中で芦屋市域には、東から岩ヶ平・奥山・

城山の3つの主要刻印群がその広がりをもち、分布域の中核的な位置を占めている。

今回の調査地域を含む城山刻印群は、芦屋川西岸の城山山塊に分布している。これまでの調査で著名な採石大名などとかかわる刻印石や矢穴石、割石がみつまっている。刻印の種類から、日向佐土原藩島津右馬頭忠興、豊後臼杵藩稲葉彦六典通・稲葉民部少輔一通、丹波福知山藩稲葉淡路守紀通らの石切丁場跡があることが明らかにされている。石材の切り出しに用いられた矢穴は、元和～寛永期特有の大きなものである。(森岡)



- | | | | |
|--------------|---------------|------------|--------------|
| 1. 城山遺跡 | 2. 城山南麓遺跡 | 3. 会下山遺跡 | 4. 山内屋遺跡 |
| 5. 城山・三条古墳群 | 6. 冠遺跡 | 7. 三条岡山遺跡 | 8. 三条九ノ坪遺跡 |
| 9. 戸塚庵寺遺跡 | 10. 西山町遺跡 | 11. 月若遺跡 | 12. 寺田遺跡 |
| 13. 六条遺跡 | 14. 清水遺跡 | 15. 前田遺跡 | 16. 津知遺跡 |
| 17. 戸塚神社境内古墳 | 18. 藤ヶ谷遺跡 | 19. 八十塚古墳群 | 20. 朝日ヶ丘遺跡 |
| 21. 山口遺跡 | 22. 栗平遺跡 | 23. 大原遺跡 | 24. 打出岸遺り遺跡 |
| 25. 久保遺跡 | 26. 阿保親王塚古墳 | 27. 堂ノ上遺跡 | 28. 金津山古墳 |
| 29. 打出小堤古墳 | 30. 打出小堤遺跡 | 31. 小松原遺跡 | 32. 荻宮遺跡 |
| 33. 興川遺跡 | 34. 三条町50番地遺跡 | 35. 三条会下遺跡 | 36. 徳川大坂城石切場 |

第6図 芦屋市内主要遺跡分布地図 1/50,000

III. 城山・三条古墳群調査・研究逸史

(1) 緒言

この芦屋の地を含む六甲山系の後期・終末期の古墳は、今から300年程前になる江戸時代の中期頃よりその存在が知られてきた。それらの地誌類などを残した識者の認識にのぼったものにすぎないが、今は消え去った古墳も随分登場するようで、この地域の古墳、古墳群、古墳研究には欠かすことのできないものである。発掘調査の一連の報告に先立ち、先ず城山古墳群や三条古墳群の調査・研究の沿革を述べるが、以下では、近世以前、明治・大正期、昭和前期、昭和後期、平成期の5段階に分けて整理を試み、画期を順次追ってみたい。

また、城山古墳群と三条古墳群は古墳時代後期の別個の群集墳として捉えられているケースが多いが、分布地域や副葬品を含めた古墳の様相など類似要素も多くみられる。本章では、両古墳群を一括して捉え、その調査・研究の歩みを概観し、逸してはならぬ経緯や動機、エピソードなどを記録に留めたい。

(森岡)

(2) 近世以前一石切場や古墳と関わる古絵図の存在

花崗岩により基盤が構成される六甲山地の山麓部には、その豊富な転石を用いた横穴式石室墳が数多く造られているが、同石材自然石の用いられた豊臣期大坂城や切石加工のみられる徳川期大坂城の石垣の普請に際して、古墳の石材がかなり抜き取られたことも伝えられている。江戸時代以前の記録はきわめて乏しいが、天保8年(1837)の『三条村絵図』にみえる「塚穴」の表記は注目されてよい(第8図)。

(森岡)

(3) 明治・大正期(1868～1926年) —さまざまな伝承と「朝鮮土器」「祝部土器」の出土

明治44年(1911)刊の仲彦三郎編『西摂大観』を紐解くと、郡部の巻の「武庫郡東部」名所旧蹟の項に、「葦屋村のコンコン塚、三条のシヅメ塚の塚塚の如きは、鷹尾城址の南麓に在るを以て一般の人は城壁壘なりとの説もある、此は穴居時代の遺蹟」との記載がみえ、同書の墳墓の項には、三条村の「石窟塚」や「烏塚」の存在が記されている(仲1911)。中でも「烏塚より以西松林中に散在せる卑丘は多く古墳にいて、中には主墳とおぼしき周囲には数個の陪塚を有するものあり、或は自然に崩壊して数多の土器の破片散乱せるを見る、如何に往者居民も発展せしやを推想せらるるなり、是等土民の発祥地を破壊して墳石を庭園石垣に用ゆるは遺憾のことといふべし。」などの叙述には興味深いものがある。この時点で、地域の人々にも古墳の存在がクローズアップされる。芦屋庵寺周辺(西山町)で石棺の出土が報じられたのもこの頃のことである(村川1970c)。

考古学上の発掘記録の始まりとしては、大正8年(1919)に清家植直氏が城山山麓部における甕形土器の発見

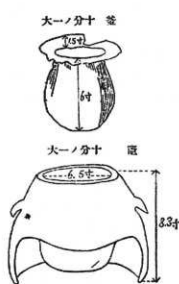
地を『考古学雑誌』第9巻第8号(日本考古学会)誌上に報じられたことがあげられる(清家1919)。「現在古墳と認められるもの、約十数あり、其の中には、全部石部を露出したもの、又は炭道を穿ちたるものもある」と記されている(第9図)。この甕形土器は、現在京大が所蔵しており、昭和49年(1974)に実測調査したものを第10図として示しておく(勇・藤岡1976)。おそらくこれらの古墳から出土したものであろうが、出土地の特定には至っていない。

大正10年(1921)刊の『武庫郡誌』では、「石窟は城山の麓にあり。

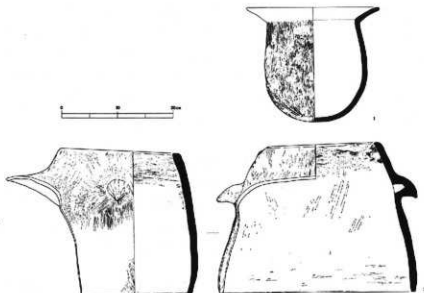


第8図 天保8年(1837)の『三条村絵図』にみえる「塚穴」(矢印)

其数二十、太古穴居の遺跡ならんとい」と記し、石室墳も大昔の住居と考えられたようである。コンコン塚と呼ぶものは、「芦屋の手手、鷹尾城址の南麓にあり。其中二箇は完全に原形を存すれども、ほかは破壊せられて原形を止めず。其東に在るものは他と形式を異にす。穴は東北に面し、一屈折して南に入る。西に在るは普通の形式なれども、南方の義道は埋まりて蓋石の一箇墜落せり。之を上方より窺ふに、内部は多く損所なく完全に残れるが如し。」と書かれている〔武庫郡教育会編1921、森岡1984〕。



第9図 大正年間出土の
甕形土器スケッチ
〔清家1919〕



第10図 城山南麓出土甕形土器実測図〔勇・藤岡1976、森岡1984〕

コンコン塚は一つの古墳の固有称ではなく、周辺横穴式石室墳一般の俗称とみられ、民俗的にみても面白い名称である。さらに、「此塚より西、高座谷を上る義道の附近にも古塚あり。多く朝鮮土器を出せり。然れども悉く破碎せるものにして、一も完全なるものを認めず。」との記述から、その位置関係にある程度類推することができる。ここに言う「朝鮮土器」とは須恵器のことを指している。

他に、大正11年（1922）発刊の『神戸市史』別録1の記載〔喜田1922〕や別録附図の「武庫地方遺物遺蹟分布図」にも西芦屋1基、山芦屋3基、鷹尾山12基の計16基の古墳マークを数えることができ、その中に明治41年（1908）4月の造成で石棺蓋が出土した西ノ坊地区が含まれている。この地図は、神戸史談会の福原潜次郎氏と吉井太郎氏の踏査に基づくものである〔勇・藤岡1976、森岡1984c〕。

（森岡）

（4）昭和前期（1926～1969年）—紅野芳雄・吉岡昭など地元考古学者の活躍

昭和初期には地元考古学者、紅野芳雄氏の遺跡探訪活動が活発化する。昭和15年（1940）刊の紅野芳雄著「考古小録」には城山南麓に5つの円墳印がみえ、高座川左岸の4基、右岸1基に分けられる（紅野1940）（第11図）。昭和17年（1942）頃より、主として芦屋の遺跡踏査を続けた地元の吉岡昭氏も昭和19年（1944）、17歳の若さにして和綴墨書の「摂津国芦屋郷土石器時代文化研究」を著し、さらに同年書かれた「考古随録」などにも古墳の存在を記している。とりわけ「城山麓之遺跡地図」は貴重なもので、昭和17年8月29日作成段階では、図上総数61基の古墳が確認でき、大きくは3つのグループに分けることができる（第12図）。これをみると、古墳の分布は急斜面を避け、比較的緩やかな斜面地形に密集するようである。吉岡氏の踏査活動により採集された「城山麓」出土の須恵器には完形品も伝わっており、城山古墳群の副葬土器を知る上で重要な資料といえる。同じ頃、地元の山本正男氏も城山中腹の古墳など、今では確認できない石室墳の写真を撮影している。なお、昭和30年（1955）の神戸市民同友会の「旧武庫郡古墳地名表」には、鷹尾山群集墳17、山芦屋群集墳4、西芦屋古墳1などがみえるが、それぞれ発掘された古墳とどう対比できるのか、今となっては難しい。

戦後には郷土史家細川道草氏によって「芦屋郷土誌」（昭和38年刊）が著されており、旧三条村の古墳として



昭和初期、芦屋市は武庫郡精進村と呼ばれていた。その頃、旧石器・縄文時代の遺跡はほとんどみつからず、弥生時代の高地性遺跡も六甲山系においては保久良山を除いて顕著ではない。しかし、群集墳自体は小円墳の高密度の分布から捉えることができ、岩ヶ平から菅薬園にかけての丘陵地や芦屋川の上流域などにいくつかのグループが認識されている。

第11図 紅野芳雄が残した大正～昭和初期の遺跡地図〔紅野1940〕

小字「塚穴の場」が目ざされている。「字寺の内の北方で太平山（会下山）の南麓にあたり、土地高燥展望よく明治の初頃まで多数の古墳があった」とし、市立山手中学校建設に際して近在の尾除観音堂の下を掘ったところ、「沢山の祝部土器などが出土」したと記している〔細川1963〕。「祝部土器」とは、須恵器を指している。

また、篠山鳳鳴高校の所蔵考古資料中にも「城山南麓採集品」があり、その伝来には福原会下山人が関与している〔勇・藤岡1976〕。昭和42年（1967）、初めて公にされた芦屋市による「埋蔵文化財包蔵地台帳」では、旭塚を「S-1」の遺跡番号で記し、周辺では城山古墳・からす塚・山手中学校グラウンド内古墳址・山手中学校テニスコート内古墳址などが登場する〔藤岡・橋爪1966〕。昭和20～40年の戦後約20年間は、城山古墳群が一気に消滅の一途をたどった時期と考えられる。

（森岡）

（5）昭和後期（1970～1988年）—市民に知られるようになった旭塚古墳

かつては、旭化成株式会社社宅内に所在した大型横穴式石室墳について、昭和36年（1961）に京都大学文学部考古学研究室が発掘調査を実施している。それが旭塚古墳である。発掘担当者は小林行雄氏で、大学院生として小野山節氏が参加したという。当時の調査終了報告によれば、「両袖式の横穴式石室墳で、天井石全部と側壁の一部は失われていた。羨道は南に開口し、羨道入口部から化粧石が両側にまわる円墳」とされている〔小林1961〕。その後、武藤誠氏や村川行弘氏が『新修芦屋市史』本篇において、調査内容を再録し〔武藤・村川1971〕、『新修芦屋市史』資料篇1では、古墳時代の執筆を担当した勇正廣・藤岡弘岡氏が記録や略測を手懸りとして、両袖式の石室は、全長11m、玄室長4m、玄室幅1.8m、羨道幅1.6m、石室現存高2.2mと捉え、墳形も外護列石の黒線をたよりに方墳と推定している〔勇・藤岡1976〕。

また、出土遺物については、須恵器高杯3個体、蓋2個体分の破片が若干量と鉄鏝1本があったことを記すものがみられるが〔武藤・村川1971〕、これまでに所蔵先の京都大学にての遺物確認を経ていない。

昭和30年代の調査は、内容が公にされていないこともあり、昭和56年（1981）になって武庫川女子大学考古学研究会が墳丘や石室の測量調査を計画、実施した。調査担当安田博幸教授、助手奥野礼子、調査指導森岡秀人、調査協力藤川祐作のメンバーで、部長岡田良子以下部員学生28名が随時交替参加して、墳丘と石室の実測図を作り上げた。その報告書は、同大学考古学研究会から創設20周年を記念し、昭和59年（1984）に刊行され、現在でも公表された測量記録として重宝されている〔武庫川女子大学考古学研究会1984〕。

昭和51年（1976）、旭塚古墳の西方約100mの至近地（山芦屋町10-1）から住宅建設に伴い突如として大型石室が姿を現した。当時、関西学院大学教授であり、芦屋市史編纂委員長であった武藤誠氏を団長として直ちに緊急発掘調査が実施され、現在石室は、庭園下に石材ごと地下保存されている。これを山芦屋古墳と呼ぶ〔森岡1976、勇・藤岡・森岡1977、芦屋市教委1977、森岡1984〕。

古墳は直径約25mの円墳と推定され、正方形に近い玄室に狭長な羨道部がとり付く異色なプランの横穴式石室が調査された。その規模は、玄室幅3.15m、玄室長3.6m、羨道幅1.7m、羨



第12図 岡岡氏作成の城山山麓遺跡地図（昭和17年）



第13図 山芦屋古墳の発掘状況(1)



第14図 山芦屋古墳の発掘状況(2)
(1)奥壁側から (2)羨道側から各々撮影



第15図 城山15号墳の発掘調査風景(西方から)
左側 中世諸遺構、右側 城山15号墳

道残存長5.95m、石室残存長9.55mを計画する。奥壁には重さ30tを超える大石1個を据える超巨石墳であるが、着手した住宅建設工事によってかなり乱掘を受けていた(第13・14図)。

原位置を保つ遺物はほとんどなかったが、杯身・杯蓋・高杯・細頸壺(百濟系)・器台などの須恵器や水晶製三輪玉・ガラス製霽玉・ガラス製小玉などの装身具、雲珠・方形鍔金具・留金具・鞍骨など金銅装馬具が出土し、往時は優秀な副葬品目で構成されていたようであり、工事中の発見と準備不徹底のまま実施した緊急発掘が今となっては惜まれる。6世紀後半に築造され、7世紀前半にかけて築造に追葬が行われていたものと考えられる。そして、旭塚古墳と並んで群中でトップクラスの盟主墳の位置にあったものと思われる。ただし、築造時期は旭塚に先行するものとみられる。

山芦屋町19-1、-7、-8、旭塚古墳の西北西の方角120mの近接地には、城山4号墳があった。調査前の分布調査によって知られるようになったものである。高座川に面する急斜面でみつかった。昭和55年(1980)に宅地造成に伴い発掘調査され、敷地内で移築保存された。古墳は標高84mの高座川東岸の急崖面に立地する径約14m、残存高2mの円墳で、奥壁・左側壁の半分と右側壁基底の一部を残すのみの半環墳である。多くの石材が墳丘の崩落とともに、高座川川床へ落ちたのであろう。石室は残存長4.8m、幅1.6m、残存高1.6mを測り、奥壁から3.0mのところに玄門石の立柱がみられた。台付長頸壺・短頸壺・杯身・杯蓋・有蓋高杯・無蓋高杯などの須恵器、鉄鍔・刀子・鉄釘・鍔金具などが副葬され、6世紀後半頃の築造とみられる。追葬も7世紀初頭～前半において、1～2回あったようである。

城山4号墳と同じ敷地の中央でみつかった城山10号墳は、同事業地の緩斜面に存在

している。とりあえず径9～11mの円墳と認識したが、墳丘は低平で、残存高0.7m程である。墳形は方墳の可能性も考えられる。石室形式は無袖式で壁体の損傷が著しく、幅1.2m、残存長2.7m、現存高は0.8mしかない。床面には敷石が認められた。須恵器・土師器・鉄釘などの遺物が認められ、開口部付近では珍しいミニチュア甕形土器が出土している。築造時期は7世紀初頭以降とみられる。

次いで、城山15号墳の調査が行われた。山芦屋町6-8の住宅建設地、段丘上に位置する横穴式石室墳である。径約15mの円墳と推定され、右片袖式の横穴式石室の規模は、石室残存長7.9m、玄室幅1.9m、玄室長3.9m、玄室残存墳高2.0m、羨道幅1.2m、羨道長4.0mを測り、床面には棺合とみられる白石列が設置されていた。須恵器・鉄鍬・馬具・耳環などの副葬品と鉄釘が検出されている。副葬須恵器の大半は7世紀代の年代を示し、その多くが追葬時のものと思われる。ただし築造は、石積段敷、玄門石、倍数尺などを加味した石室型式から、6世紀後半頃に通る。中世には再利用されていた(第15図)。

さらに、城山17号墳が発掘された。山芦屋町4、4-1、5、6、6-4の一角に所在する横穴式石室墳で、城山の南東麓、標高90mの斜面地に立地している。城山15号墳の北西約30mの所に位置し、径約15m、残存高2.5mの円墳である。上部壁石の多くと天井石のすべてを失った半壊墳である。横穴式石室は、長い袖石で仕切られる右片袖式である。多くの点で、15号墳に先行する要素をもっていた。石室の大きさは、玄室幅1.68m、玄室長3.35m、玄室残存高1.71m、羨道幅1.28m、羨道残存長2.40mで、羨門部を欠いている。石室はおそらく7mぐらいあったものと思われる。副葬土器は須恵器2点を除き、細片であり、他に耳環が1点出土している。このような状況から、かなり盗掘にあっていることが判明した。この古墳は、調査後に消滅した(第16図)。

この他、城山の南西斜面、標高116mには淡神文化財協会の調査を行った城山3号墳がある。多角形の外護石を有する横穴式石室で、ミニチュア甕形土器を副葬していた。7世紀中葉を越えての築造と思われる。



第16図 城山17号墳
石室内部の発掘風景

(6) 平成段階 (1989～2008年)

平成の時代に入り、城山古墳群での発掘調査件数はかなり低下した。平成11年度には、城山18号墳の調査が国庫補助事業により実施された。群中でも最南部に位置する山芦屋町49番地に所在し、標高67mの緩傾斜地に立地している。墳丘の削平が著しい堅穴系の石室をもつ古墳である。当古墳群のみならず、近畿地方でも最末期に位置づけられる古墳で、7世紀後半の築造と考えられる。石室は長さ3.0m、幅1.25mを測る。副葬土器は原位置をとどめるものが多く、須恵器坏蓋3点、坏身3点、高坏1点、長頸壺1点、土師器坏1点が出土した。埋葬棺を上から納めたことも考えてよいものである。城山古墳群の造墓活動が新しくなると、南部に下りてくることを証するものとして貴重な調査記録を残した(第17図)〔森岡・竹村2005b〕。



第17図 古墳時代終末期段階に
築造された城山18号墳



第18図 城山20号墳
石室断割状況(南から)

平成18年(2006)には、共同住宅建設に伴い城山20号墳が発掘調査された。山芦屋町24番1、2、3、4、5、6の斜面地に所在する無袖式の小規模横穴式石室で、最大幅1.08m、残存長3.1m、残存高0.92mを測る。機能上は堅穴系になる構造を示す。石室内から須恵器5点と鉄製品34点が出土している。墳丘については流失が著しく、その規模や形態はよくわかっていない。単葬とみられるもので、7世紀第2四半世紀以降の築造と推定される。この古墳は旭塚古墳の北東方85mの急傾斜地に位置している。調査後に消滅した(第18図)〔竹村・白谷2007、竹村・白谷編2007〕。(森岡)

城山・三条古墳群・旭塚古墳関係文献集成

明治44 (1911)

仲 彦三郎 編 1911 『西撰大観』 郡部 明輝社

大正8 (1919)

清家桂直 1919 『釜及甕形土器の新発見』『考古学雑誌』9
— 8 日本考古学会

大正10 (1921)

武庫郡教育会 編 1921『武庫郡誌』武庫郡教育会

大正11 (1922)

喜田貞吉 1922 『古墳墓の二、各地の形墳』(第3章 武庫地方上代の遺物遺蹟)『神戸市史』別録1 神戸市役所

昭和3 (1928)

島田貞彦 1928 『本邦発見の甕形土器』『歴史と地理』22—5

長町 彰 1928 『摂津山芦屋古墳調査報告』『考古学雑誌』18—11 日本考古学会

昭和4 (1929)

島 之夫 1929 『芦屋の里』宝蔵館

昭和15 (1940)

紅野芳雄 1940 『考古小録』西宮史談会

昭和19 (1944)

吉岡 昭 1944a 遺稿『考古隨筆』(和報本)

吉岡 昭 1944b 『摂津国家原郷土石器時代文化研究』(和報本)

昭和31 (1956)

落合重信 他 1956 『神戸地方古墳地名表』神戸市教育委員会

武庫 誠 1956 『道跡・遺物から見た古代の芦屋地方』『芦屋市史』本編 芦屋市教育委員会

昭和36 (1961)

小林行雄 1961 『旭塚古墳発掘調査概要』(プリント)

昭和37 (1962)

村川行弘 1962 『大坂城と芦屋』<芦屋市文化財調査報告第2集> 芦屋市教育委員会

昭和38 (1963)

細川道幸 1963 『芦屋郷土誌』 芦屋史談会

昭和39 (1964)

村川行弘、石野博樹 1964 『芦屋市道路遺物分布地図』『金下山遺跡』<芦屋市文化財調査報告第3集> 芦屋市教育委員会

昭和42 (1967)

芦屋市教育委員会 1967 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳』<芦屋市文化財調査報告第5集>

昭和45 (1970)

村川行弘 1970 『芦屋廃寺址』<芦屋市文化財調査報告第7集> 芦屋市教育委員会

昭和46 (1971)

武庫 誠・村川行弘 1971 『考古学上からみた芦屋』『新修芦屋市史』本編 芦屋市役所

昭和50 (1975)

古川久雄 1975 『芦屋市内出土古墳時代関係遺物実測調査報告(1)』<市史編集作業プリント> 芦屋市史編集室

昭和51 (1976)

勇 正廣・森岡 弘 1976 『古墳時代』『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所

森岡秀人 1976 『仮称城山古墳予察調査概要報告』 芦屋市教育委員会

武庫 誠・森岡秀人・上田祥子 1976 『吉岡 昭 摂津国芦屋郷土石器時代文化研究 文獻改題』『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所

昭和52 (1977)

森岡秀人 1977a 『貴重な資料を発掘—山芦屋古墳・埋蔵文化財発掘調査の記録』『広報あしや』5月号 芦屋市役所

森岡秀人 1977b 『仮称城山古墳予察調査概要報告Ⅱ—北トレンチの試掘調査結果—』 芦屋市教育委員会

森岡秀人 1977c 『山芦屋古墳緊急発掘調査の概要—白江郎西側建設工事に伴う事前調査—』<芦屋市文化財調査報告第4集> 芦屋市教育委員会

芦屋市教育委員会 1977 『(現地説明会資料)山芦屋古墳発掘調査概要』

昭和53 (1978)

勇 正廣・森岡 弘 1978 『山芦屋古墳』『日本考古学年報』29 (1976年版) 日本考古学協会

稲田孝司 1978 『忌の嶽と王権』『考古学研究』97 考古学研究会

村上敏博 1978 『兵庫県(動向)』『日本考古学年報』29 (1976年版) 日本考古学協会

森岡秀人 1978 『<資料紹介>山芦屋古墳隣接地出土の須恵器』『あしや文化財短信』新刊号 芦屋市教育委員会

昭和54 (1979)

森岡秀人 1979 『城山古墳群と山芦屋古墳』『芦屋の生活文化史—民俗と史跡をたずねて—』 芦屋市教育委員会

昭和55 (1980)

芦屋市教育委員会 1980 『<現地説明会資料>城山古墳群発掘調査の成果』

森岡 弘・森岡秀人 1980 『城山古墳群緊急発掘調査概

- 報「<芦屋市文化財資料遺跡調査No.8>
芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1980 「芦屋遺跡めぐり(9) 山芦屋古墳の出現
—巨石墳の系譜を求めて—」『海技通信』
第344号 海技大校
- 森岡秀人 編 1980 「芦屋市埋蔵文化財調査分布地図及び
地名表(第1分冊)」<芦屋市文化財調査
報告第12集> 芦屋市教育委員会

昭和56 (1981)

- 芦屋市教育委員会・山芦屋遺跡調査会 1981 「<現地説明
会資料>山芦屋遺跡緊急発掘調査の成果—
N・S両地点の縄文・弥生遺跡を中心に
—」
- 山芦屋遺跡発掘調査会 1981 「山芦屋遺跡(S2地点)の
発掘調査の概要」

昭和57 (1982)

- 芦屋市教育委員会・山芦屋遺跡発掘調査会 1982 「山芦屋
遺跡S3地点の発掘調査概要」
- 森岡秀人 1982a 「城山古墳群第4・10号墳緊急発掘調
査」『昭和55年度 兵庫県埋蔵文化財調査
年報』兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1982b 「山芦屋遺跡N地点緊急発掘調査」『兵庫
県埋蔵文化財調査年報 昭和55年度』兵
庫県教育委員会
- 森岡秀人 1982c 「山芦屋遺跡S1地点緊急発掘調査」『兵
庫県埋蔵文化財調査年報 昭和55年度』
兵庫県教育委員会

昭和59 (1984)

- 森岡秀人 1984a 「旭塚古墳および城山・三条古墳群をめ
ぐる諸問題」『兵庫県芦屋市 旭塚古墳—
表6甲城山群集墳中の一巨石墳の測量調査
とその考証—』武庫川女子大学考古学研
究会
- 森岡秀人 1984b 「表6甲東南麓における群集墳の動静」
『歴史と神戸』第23巻第4号 神戸史学会

昭和60 (1985)

- 森岡秀人 1985a 「城山南麓遺跡A地点」『兵庫県埋蔵文化
財調査年報 昭和57年度』兵庫県教育委
員会
- 森岡秀人 1985b 「山芦屋遺跡(S3地点)」『兵庫県埋蔵
文化財調査年報 昭和57年度』兵庫県教
育委員会

昭和61 (1986)

- 森岡秀人 1986a 「三条古墳群」『兵庫県埋蔵文化財調査年
報 昭和58年度』兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1986b 「三条寺ノ内B墳所在推定地」『兵庫県埋
蔵文化財調査年報 昭和58年度』兵庫
県教育委員会
- 森岡秀人 1986c 「城山古墳群第17号墳」『兵庫県埋蔵文化
財調査年報 昭和58年度』兵庫県教育
委員会
- 森岡秀人 1986d 「城山古墳群第4・10号墳(山芦屋町19
番地1・7・8)」『埋蔵文化財調査メモ
リアル'80~'85』<芦屋市文化財調査報告
第14集> 芦屋市教育委員会

- 森岡秀人 1986e 「山芦屋遺跡S3地点(山芦屋町58番
地)」『埋蔵文化財調査メモリアル'80~'
85』<芦屋市文化財調査報告第14集> 芦
屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986f 「城山南麓A地点遺跡(山芦屋町6番地
8)」『埋蔵文化財調査メモリアル'80~'
85』<芦屋市文化財調査報告第14集> 芦
屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986g 「城山南麓B地点遺跡(山芦屋町4・5・
6番地)」『埋蔵文化財調査メモリアル'80
~'85』<芦屋市文化財調査報告第14集> 芦
屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986h 「近年の埋蔵文化財調査・立会調査一
覧」『埋蔵文化財調査メモリアル'80~'
85』<芦屋市文化財調査報告第14集> 芦
屋市教育委員会
- 森岡秀人・村川義典 1986 「三条岡山遺跡(第5次調査)(三
条町238番地)」『埋蔵文化財調査メモ
リアル'80~'85』<芦屋市文化財調査報告
第14集> 芦屋市教育委員会

昭和62 (1987)

- 瀬川芳則・森岡秀人 1987 「城山古墳群・山芦屋遺跡」
『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和59年
度』兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1987a 「山芦屋遺跡(E1地点)」『兵庫県埋蔵
文化財調査年報 昭和59年度』兵庫
県教育委員会
- 森岡秀人 1987b 「古墳時代からの芦屋地方(上) - 近年
の遺跡調査をふりかえって - 』『兵庫県の
歴史』23 兵庫県(歴史編纂室)

昭和63 (1988)

- 森岡秀人 1988a 「三条寺ノ内A・B墳」『兵庫県埋蔵文化
財調査年報 昭和60年度』兵庫
県教育委員会
- 森岡秀人 1988b 「三条古墳群(南縁)」『兵庫県埋蔵文化
財調査年報 昭和60年度』兵庫
県教育委員会
- 森岡秀人 1988c 「芦屋市」『角川日本地名大辞典』28 兵
庫県 角川書店
- 森岡秀人 1988d 「古墳時代からの芦屋地方(下) - 近年
の遺跡調査をふりかえって - 』『兵庫県の
歴史』24 兵庫県(歴史編纂室)

平成3 (1991)

- 明元和子 1991a 「『速報』芦屋市城山3号墳の発掘調
査(1)」『淡神文化財協会ニュース』第14
号 淡神文化財協会
- 明元和子 1991b 「『速報』芦屋市城山3号墳の発掘調
査(2)」『淡神文化財協会ニュース』第15
号 淡神文化財協会

平成4 (1992)

- 渡辺邦雄他 1992 「神戸市東灘区生駒古墳調査報告—六甲
東南麓地塊の終末期古墳の測量調査と後期
古墳研究動向—」<神戸大学考古学研究会
調査報告第2集> 神戸大学考古学研究会

平成5 (1993)

- 芦屋市教育委員会 1993 「芦屋市埋蔵文化財 包蔵地分布

平成8 (1996)

森岡秀人・村川義典 1996 「摂津国」【兵庫県史の考古学】吉
川弘文館

平成13 (2001)

辻康男・森岡秀人・竹村忠洋 2001 「六甲山地南麓におけ
る沖積扇状地の層序と考古遺跡の形成過程
について－芦屋川・宮川の事例－」(－第
36回低地遺跡研究会発表要旨・資料－)

平成17 (2005)

森岡秀人・竹村忠洋 2005 「平成10年度 城山・三条古墳
群発掘調査実報報告書 平成11年3月」
「平成9・10年度国庫補助事業 芦屋市内
遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財
緊急確認・本発掘調査－実報報告書集」＜
芦屋市文化財調査実報報告集2＞ 芦屋市
教育委員会

平成18 (2006)

竹村忠洋・辻 康男 2006 「平成12年度国庫補助事業 城
山・三条古墳群C地点発掘調査実報報告
書 平成13年(2001)3月」【平成11・12
年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査
－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本
発掘調査－実報報告書集】＜芦屋市文化財
調査実報報告集3＞ 芦屋市教育委員会
芦屋市教育委員会 2006 「芦屋川水車場跡現地見学会資料
－芦屋川水車場跡と城山古墳群第20号墳の
発掘調査成果－」

平成19 (2007)

芦屋市教育委員会 2007 a 【広報あしや考古連載記事にみ
る芦屋の古代史】
芦屋市教育委員会 2007 b 【＜現地説明会資料＞古墳時代
終末期石積・竜山石積出 旭塚古墳とそ
の周辺－確認発掘調査の成果と説明のひと
とき－】
竹村忠洋・辻 康男 2007「城山南麓遺跡(C・D地点)」【平
成12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘
調査実報報告書－震災復興に伴う埋蔵文化
財発掘調査の成果－】＜芦屋市文化財調査
報告第65集＞ 芦屋市教育委員会
竹村忠洋・白谷朝世 2007 「兵庫県芦屋市芦屋川水車場跡
の調査－六甲山地南麓における産業用水車
場遺跡の検討－」【有限責任中間法人日本
考古学協会第73回総会研究発表要旨】有
限責任中間法人日本考古学協会
竹村忠洋・白谷朝世編 2007 「芦屋川水車場跡発掘調査報
告書－城山古墳群第20号墳と芦屋川水車場
跡の発掘調査成果－】＜芦屋市文化財調査
報告第71集＞ 芦屋市教育委員会
芦屋市 2007 「芦屋考古学再発見35 郷土地名の考古学
(10)－地名と竜山石と芦屋－」【広報あ
しや】第997号
森岡秀人 2007 「飛鳥時代の終末期古墳、瀬尾城岡遺跡、
および準高地性遺跡」【平成12年度国庫補

平成20 (2008)

森岡秀人 2008 「第1章 考古学が語る本庄地区周辺の地
域史」【本庄村史 歴史編－神戸市東灘区
深江・青木・西青木のあゆみ－】本庄村
史編集委員会
森岡秀人・坂田典彦 2008 「芦屋市旭塚古墳の調査成果－
多角形墳・竜山石・内部構造が明らかにな
った終末期古墳－」【古代文化】VOL.59
－IV 古代学協会
芦屋市 2008 a 「芦屋考古学再発見41 古墳発掘断章(1)
－夢多き考古少年 吉岡 昭－」【広報あ
しや】第991号
芦屋市 2008 b 「芦屋考古学再発見42 古墳発掘断章(2)
－武藤 誠と山芦屋古墳の登場－」【広報
あしや】第993号
芦屋市 2008 c 「芦屋考古学再発見43 古墳発掘断章(3)
－山芦屋古墳の巨大石室を掘る－」【広報
あしや】第995号
芦屋市 2008 d 「芦屋考古学再発見44 古墳発掘断章(4)
－行政調査の草分けと熊田橋次－」【広報
あしや】第997号

平成21 (2009)

芦屋市教育委員会 2009 【広報あしや考古連載記事にみる
芦屋の地名と遺跡びと】
森岡秀人・坂田典彦 2009 「摂津における終末期古墳の
様相－旭塚古墳の分析を中心に－」【有限
責任中間法人日本考古学協会第75回総会研
究発表要旨】有限責任中間法人日本考古
学協会
森岡秀人 2009 「六甲山地南麓地域の終末期古墳－周辺施
設に竜山石を用いた旭塚古墳の調査報告
－」古代学研究会10月例会(2009年10月17
日)発表資料

IV. 旭塚古墳調査・研究の流れと調査記録の整理

(1) 昭和36年の小林行雄氏ほか京都大学による発掘調査

本墳の発掘調査の嚆矢は、昭和36年（1961）の京都大学考古学教室による調査に遡る。発掘調査の担当者は、くり返し記しているとおり、当時京都大学文学部の講師であった小林行雄氏で、大学院生の小野山節氏が発掘作業に従事したことが伝聞されているが、正確な教室員のメンバーは判っていない。

この調査の結果は、芦屋市教育委員会公文書綴にB4版1枚の「旭塚古墳調査終了報告」（タイプ印刷）として伝わっており、貴重な記録となっているので、要所を抜粋する（小林1961）。

石室はゆるやかな傾斜地に直接に石を据えて構築されたもので、奥壁だけが地山を少し掘りくぼめて据えられている。石室の平面は、ほぼ南向きの入口をもつ両袖式で、全長11m、玄室の長さ4m、幅1.8m、羨道の幅が1.6mで、袖がわずかに認められる程度である。ほぼ同じ幅で羨道の入口まで続いており、床面は入口に向かってわずかに下降している。現存の高さは、奥壁が1.6m、東西両壁が2.2m、羨道の玄室に近いところで1.6mある。石はこの地方に多い花崗岩であり、大部分が大きな石で、なかには長さ2m、幅1.5mに及ぶものも使われている。このような巨石を用いて構築された石室は、この付近では珍らしい。玄室には奥壁にそって幅いっばいに平らな大石が敷いてあった。玄室の一部と羨道の一部には、粘土まじりの土でつくられた固い床面が認められた。玄室の中央部には、ベニガラを含む砂の部分があって、中から骨片が検出された。この砂は、もとの床面の上下にわたっており、またその中に、須恵器の破片が混在していた点から、第二次あるいはそれ以後の埋葬にともなうものと考えられる。残存していた遺物は、須恵器の高杯3個・蓋2個・破片若干と鉄鏃1本とで、いずれも原位置とは認めたいものである。石室の入口の両側で葺石が発見された。裾の部分には、普通にみられるより大きな石が使用されている。裾の縁が直線的であることから判断すると、この古墳はもともと方形であったかも知れない。古墳の東北西の各方面がすでに破壊されていたので、もとの墳形をたどることはできなかった。

以上の記録は、若き日の小林行雄氏の手によって作成されたものであり、短文ながら要を得たものである。古墳の立地・石室形態・同構造・法量・石材・床面状況・堆積状況・出土遺物・外部構造・墳形などが簡潔に記され、判明したことと不明なことが書き分けられている点に留意しておきたい。この調査で明確に副葬品の一部とみられる資料をあげると、須恵器高杯3個、同蓋2個、破片若干と鉄鏃1本であり、これらの出土品は現在、おそらく京都大学に収蔵されているものと推測される（第19～27・30図、藤川祐作氏撮影）。（森岡）

(2) 芦屋市史編集室による基本調査

昭和40年代、芦屋市教育委員会による新修の市史編集事業に際し、村川行弘氏や武藤誠氏がこの古墳について触れている。本篇（第2章第4節）で、村川氏は両袖式の横穴式石室墳とみ、南に開口する羨道の入口部には両側に化粧石が巡る円墳としている【村川1971】。また、近隣の西宮市所在菅楽園古墳が一封土内に2石室を有し、「⁽⁷⁷⁾両石室を張りによって結び、羨道入口の両側にも化粧石をめぐらせている例」を紹介し、構造的類似性を指摘している。なお、この編集事業で森岡と芦の芽グループの岩橋信幸氏は、1975年に京都大学考古学研究室に出張し、都出比呂志助氏にご配慮を頂いて、石室上面図のみを鉛筆トレースし、公にすることができた（第28図）。

資料篇は考古部門を中心に編纂されたが、昭和49～50年（1974～75）にかけて、第3章古墳時代執筆委員の勇正廣・藤岡弘両氏が、森岡や古川久雄氏などと共に、当墳の表面観察、周辺踏査を行い、「3 古墳各説（へ）城山南麓古墳群」の項に「旭塚古墳」の現状を叙述、記録している。袖が僅かに認められる程度で、幅の変わらない羨道床面が羨門付近へと少し下降していることを説明する。石室両側の列石については、葺石と呼び、その裾部分にはより大きな石が使用されていることが強調されている。墳形に関しては、外まわりの列石の存在を基に方墳の可能性を説いている【勇・藤岡1976】。（森岡）

(3) 武庫川女子大学考古学研究会による測量調査

兵庫県下の古墳の実測調査を精力的に行ってきた武庫川女子大学考古学研究会は、石室や墳丘の測量図が公表



第19図 昭和36年当時の旭塚古墳墳丘（南から）



第20図 昭和36年当時の旭塚古墳石室開口部付近（西から）



第21図 昭和36年当時の石室（左側壁列の状況）



第22図 昭和36年当時の石室（羨道右側壁の状況）



第23図 昭和36年当時の旭塚古墳（外護列石西側）



第24図 昭和36年当時の旭塚古墳（外護列石東側）



第25図 昭和36年当時の石室（羨門付近から奥壁を望む）



第26図 昭和36年当時の石室（奥壁上方から見た石室）

されていないこともあり、横穴式石室の資料化を目的に本墳を対象とする調査を行った。調査担当者は、顧問安田博幸氏（武庫川女子大学薬学部教授）で、森岡秀人と藤川祐作氏が実測全般や写真撮影を指導した。調査期間は、昭和56年（1981）3月3日～3月19日の17日間である。以下は、その報告書〔武庫川女子大学考古学研究会1984〕からの抄録である（第29・31・32図）。

立地 城山南麓台地は、標高75mから90mにかけてかつての浅い谷筋を反映したコンターの大きな出入りが看取されるが、旭塚古墳は南東方面へ派生する高座川から数えて2本目の微丈尾根の西側緩斜面の懐状に奥まった地点に営まれ、墳丘基底を標高77.5mに置く。当時現存する古墳では、城山古墳群中、最低所を占めており、近接する城山4号墳・10号墳・山芦屋古墳との



第27図 発掘前の旭塚古墳墳丘（昭和36年）

比高差はそれぞれ6.5m・8.5m・9.0mを測る。

外形 当初、東西25m、南北28m程の方墳であったと推定されるが、現状はその残核と覚しき一辺約20mの三角錐状のマウンドを残すにすぎず、著しく改変されている。残存墳高は3m弱である（第33図）。

内部構造 平面縦長の玄室に長細い羨道のとり付く同軸式の横穴式石室で、現存部全長10.40m、玄室奥壁部幅2.17m、玄室玄門部幅1.80m、玄室長4.03m、羨道玄門部幅1.50m、羨道羨門（開口）部幅2.17m、羨道長6.32m、現存高2.40mの法量を有する。玄室幅は奥壁部が最大値をとり、羨道幅は開口部分

が最大値を測って、かつ両実測値が同数値で一致する点が注目されよう。

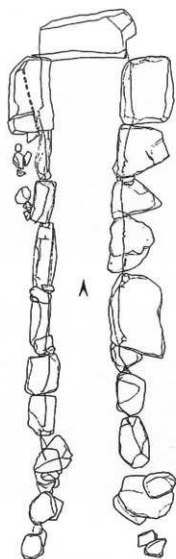
羨道幅が玄室幅に接近し、さらに羨道長が玄室長の1.5倍を凌駕することをみて明らかのように、本墳における羨道の発達には多言を要さない。全長は昭和36年の発掘時11.6mと計測されており、開口部分が本来の姿でないため、羨道長はさらに長くバチ形に開く様相をもつものとみられる（第29図）。主軸はN28°Wを測り、城山古墳群の既掘墳中、総北との交差角度が最も大きい。山芦屋古墳や城山4号墳が南南西を志向するのに対し、城山10号墳及び旭塚古墳が南南東に開口する点は注目されてよい。ただし、『新修芦屋市史』資料編「古墳時代」〔勇・藤岡1976〕所収の第53図の方位との間に若干の差異を認む。数値化の徹底がなお必要である。

平面プランを一口で言えば、形態化した袖部分が最も狭く、奥および入口の二方向に向かって次第に幅を増す。これは玄室についてみれば、視覚的に均等な幅にみえ、羨門付近から墓室を覗いた場合は、羨道部が「心理的に実際より長くみせる配座」と考えられ、羨道自体の長さの発達過程と無縁ではなからう。奥壁幅と開口部分の幅が概ね符号することも充分築造計画に基づいたものと考えたい。

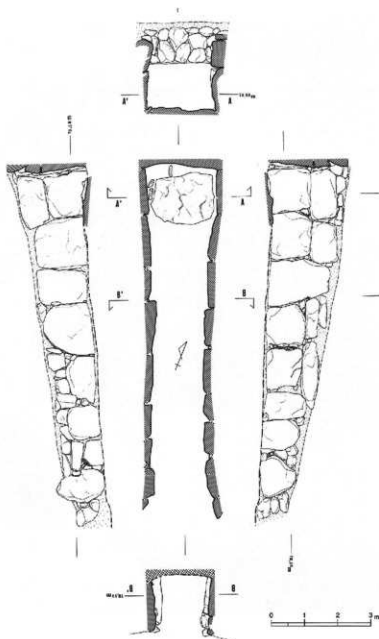
壁石は報告の章でも説かれているように、巨石を主体とするもので、隙間以外の上部壁体で使用された小石材の大半は後に補填されたものとみなされる。それは発掘時点の上面図（第28図）と測量時の石室図（第29図）とをつぶさに比較照合することで明瞭になるし、発掘直後の写真（第30図）と確認調査時の現状写真（図版16・17）を見比べても首肯しうところであろう。第30図下には、玄室奥半部床面に遺存する190cm×150cm大の大きな板石も写っているが、今回の清掃発掘により再検出されている。が、詳細に接し得ない現在、その性格は不詳であり、いかなる性格か、大きな課題と言える。

用石法 大型の割石と自然石を併用し、基底石は原則として縦積み、上部を横積み、とくに重箱積みにすることが指摘できる。石材の種類は六甲花崗岩（黒雲母花崗岩）であり、高座川以西の古墳石材に混在する布引花崗閃緑岩は認められない（第31・32図）。

外護列石 現状では改変を受け、往時の様相を捉えることはできないが、開口部列石が認められ、いわゆる外護列石が存在したようである。第30図上は発掘後の景観だが（昭和36年撮影）、これらを見れば、列石の基底が少なくとも右側壁側で6～7石、左側壁側で5石以上視認でき、小自然石を2～3段野積りに積んだ構造を呈している。側壁用材とは全く異なったつくりの石材が用いられている点に注目しておきたい。



第28図 旭塚古墳石室上面図
〔京大原図、芦屋市1976〕



第29図 旭塚古墳石室実測図〔武庫川女子大学考古学会1984〕

外腰列石を有する古墳は、市内では三条5号墳・八十塚岩ヶ平24号墳・吉楽園1・2号墳（五番町古墳）、同5号墳などがあげられ、そのすべてが7世紀代に入って築造をみた古墳であり、吉楽園5号墳を除いて方墳の可能性が説かれている。旭塚も同じ要素を満たしており、他地域では上下段2列の列石がみられる場合も多い。

かつて顕例を比較検討した橋本久氏は、本例について「葺石がみられたほか、墳丘の裾に沿って、石室の入口から直角に、左右にのびる2段積みみの低い列石が見られ、小さめの花崗岩の粗い割石を用いていた。」と述べている〔橋本1971〕。当初の姿を知る上に参考になろう。

用材にみられる矢穴痕 右側壁最奥部上端石の上面には長軸を斜めに横切る矢穴が8か所認められ、これは第28図においても注意されている。藤川分類〔藤川1979〕Aタイプに属する矢穴であり、打ち込まれた時期は江戸時代初期と推定される。徳川大坂城の石垣用石が本地域から多数供給されていることは周知であるが、本墳の実例については、限定を差し控えたいと思う。ただ、第30図を再び眺めると、側壁部材のいくつかが転倒したり、傾いたりしており、発掘によるものでない限りは石の抜き取りを想像させるので、採石が主因となって石材が減少したことも一考を要しよう。

この点、羨道部の石材はその一部が原位置を保つものでないことを改めて確認しておきたい。（森岡）



第30図 発掘直後の旭塚古墳
(上) 正面南から (中) 石室内部から (下) 側壁の状況

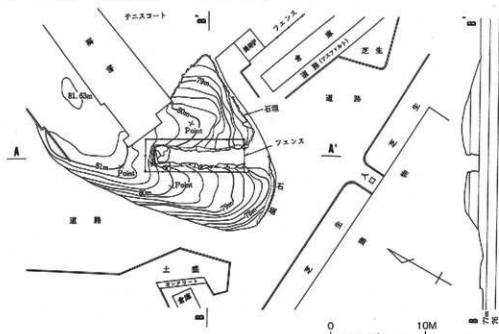


第31図 昭和56年当時の近景 (北西から)



第32図 同石室内部 羨道と玄室 (羨道から)

〔第19～32図の写真は、すべて藤川祐作氏提供
第29・33図の実測図は、武庫川女子大学考古学研究会
第28図 京都大学考古学研究室 提供〕



第33図 旭塚古墳外形実測図 1/400

V. 確認調査結果の概要

(1) 第1・2次確認調査の動機と調査目的

平成17年3月、兵庫県芦屋市山芦屋町23番地(敷地面積7,438.01㎡)において、芦屋市教育委員会生涯学習課は旭化成ホームズ株式会社より、開発に際しての埋蔵文化財(古墳)の取り扱いに関する照会を受けた。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である城山・三条古墳群と城山刺印群の分布範囲であること、土木工事を伴う開発を行う場合においては、確認調査や発掘調査が必要な旨を細かく説明した。平成17年4月、設計士(旭化成ホームズ株式会社)が本課に來室。発掘調査を前提とした調査経費の見積り依頼を受けた。平成17年5月、再び設計士が來室し、該当地に関する土地利用の方針が具体化したため、埋蔵文化財の取り扱いについての説明を再度受けたいとの打診があった。平成17年6～7月、設計士が改めて來室し、発掘調査に関しての具体的な協議を行った。平成17年9月、現存宅の解体工事についての事前協議を行い、後日、現地に遺跡保護の立場から具体的な保存協議を行った。平成17年11月、宅解体工事の開始に伴い、敷地内に現存する旭塚古墳の現状記録が不十分であることから、地権者である旭化成株式会社及び旭化成ホームズ株式会社の許可を得て、墳丘並びに石室遺存状態の現状撮影を行った(図版1)。

平成18年3月、生涯学習課にて集合住宅営業本部宅地開発部長代理(旭化成ホームズ株式会社)と、石濱次長・森岡主査・竹村学芸員(以上、芦屋市教育委員会生涯学習課)の関係者が会し、確認調査の日程や事務手続き等の詳細打ち合わせを行った。

平成18年3月27日、旭化成株式会社代表取締役社長経田史郎より、芦屋市教育長 藤原周三宛に「埋蔵文化財確認調査依頼書」が提出された。本市教育委員会は、受理した調査依頼書に添付された現況平面図と現地観察を基に、遺跡の遺存状況を把握するため、平成18年7月10日～8月15日(準備工除く)に第1次確認調査を実施した。この調査の結果と遺跡の取り扱いについては、応急整理の結果に基づき書面にて回答し、旭化成株式会社の土地利用計画の進捗を待つことになった。

翌平成19年6月20日、敷地内の造成計画および宅地分譲の区割計画が本格化し、旭化成株式会社代表取締役社長より、計画工事に基づく再度の調査依頼があり、埋蔵文化財の確認調査計画をさらに煮詰めた。そして、地権者と芦屋市教育長 藤原周三との間で「埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結した。これを受けて、本市教育委員会生涯学習課文化財担当は、平成19年7月2日～平成19年11月30日までの協定期間により、第2次確認調査を実施した。平成19年12月1日、「調査完了証明書」が作業委託した東海アナース株式会社より提出されたので、確認調査工程完了の証明を行った。以降の調査地の取り扱いと遺跡の保存・整備に関しては、調査結果を踏まえた上、活用方策を含め、将来十分な協議が必要である。

第2次確認調査の目的は、第1次確認調査で埋蔵文化財が包蔵されていると判断された範囲を中心に、宅地造成および開発によって損壊を受ける範囲を照らし合わせ、記録保存の必要な範囲を確定することであった。また、敷地内において、周知の遺跡である旭塚古墳は、石室の保存は再三の協議により確定しているが、墳丘裾の一部および前庭部は損壊範囲に入っており、合わせて保存できない箇所について、記録保存を前提とした事前調査を行った。さらに、古墳の基礎構造を把握するため、玄室部と羨道部の床面に半截トレンチを、墳丘には数本のトレンチを設定して、断面構造と墳丘裾部を判断する材料を求めた。ただし、後世に残る古墳であることも考慮して、調査による損壊を最小限に留める努力は怠っていない。

以上のように、阪神地方有数の古墳として知名度の高かった旭塚古墳は、こうした再開発の時期を迎えることになっても、多くの関係者によってその保存対象としての施策の直話が十分なされる機会がもたれ、当初から先備の努力がなされたものと思う。この古墳を掘り尽くして将来に残すのではなく、新しい世代の人々が最新の技術を駆使して再発掘し、より進化した知見が得られる余地を十分残しての調査と保存措置を求めたのである。

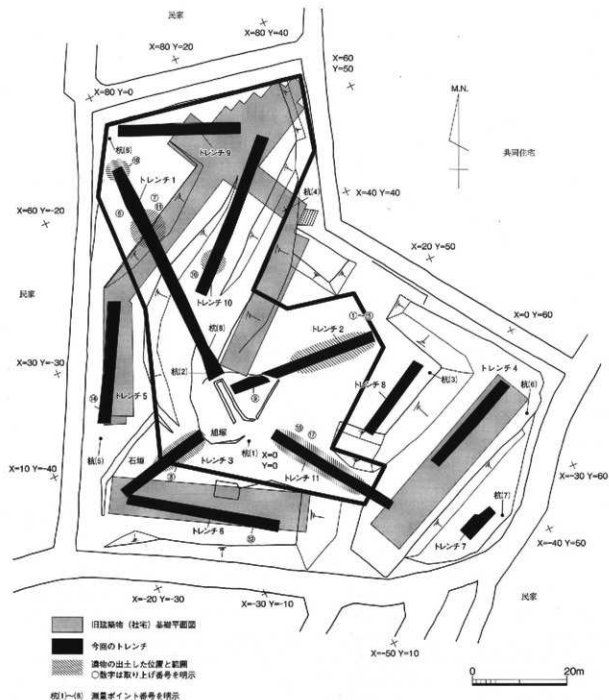
結論として確定や特定のできないことがらもいくつか残ったが、(2)以降の記載を見て明らかとなり、当初目的とした以上に、実りある成果がもたらされたと言える。(森岡・坂田)

(2) 第1次確認調査の実施

①調査方法と調査経過

事業地における造成計画は、確認調査の結果に基づきながら文化財保護の観点も十分加味しつつ、全体工事計画を整えるという事前協議を受け、調査方法を考慮した。したがって、確認調査におけるトレンチの設定箇所は、取り扱いの及ぶ事業地全体を対象とした。具体的には、現状地形測量図と旧建築物の基礎平面図に基づきつつ、以下に説明を加える11本のトレンチを設定した。これを第1次確認調査と呼ぶ（第34図、図版2）。

それぞれのトレンチの掘削面積は、トレンチ1が96㎡、トレンチ2が60㎡、トレンチ3が40㎡、トレンチ4が45㎡、トレンチ5が52㎡、トレンチ6が62㎡、トレンチ7が17.5㎡、トレンチ8が32㎡、トレンチ9が50㎡、トレンチ10が72㎡、トレンチ11が56㎡である。各トレンチの発掘調査面積は合計582.5㎡を測り、敷地全体の8%に相当する（第1表参照）。未周知の埋没古墳などの確認については、一定果されたと考えている。



第34図 第1次確認調査トレンチ配置図 1/800

発掘調査は、表土・盛土・造成土・砕石層・アスファルトなどを重機で掘削し、以下は層ごとに人力掘削で行った。また、旭塚古墳の墳丘部に関しては、表土層からすべて人力にて掘削した。第1次確認調査では、旭塚墳丘部の調査に関しては、表土、現代の盛土の厚みを確認するに留め、墳丘築成土（封土）そのものの発掘には着手していない。なお、発掘による排出土は、すべて敷地内に仮置きし、調査終了後には埋め戻した。

測量の基準杭1（ $X \cdot Y = 0$ ）は旭塚開口部中央に任意に打設し、石室主軸ラインを $Y = 0$ とした。これを基点に北・東方向にプラス値を、南・西方向にマイナス値を与え、仮座標を設定した。仮座標のY軸は、磁北から23°西偏する。測量調査におけるすべての基準点はこれを使用するとともに、それぞれの平面図に記入した。基準高は、調査地南辺を東西に走る市道のマンホール高T.P. +73.24m（本市下水道部所管台板参照）からの水準測量によって求めた。事業地内原点（杭1、 $X \cdot Y = 0$ ）で、T.P. +77.117mを計測する。写真撮影は、35mmリバーサルフィルム、35mmモノクロフィルムを使用し、デジタルカメラを併用して、記録した。

すべての調査図面および出土資料、調査記録などは、生涯学習課（文化財担当）三条整理事務所（芦屋市役所分室）にて整理し、公開できるように一括保管している。

調査は平成18年7月10日より開始し、平成18年8月15日に終了した。調査期間は約1ヶ月を要し、調査終了後は芦屋市教育委員会三条整理事務所（芦屋市役所分室）で実測原図・写真・出土遺物の応急整理を行い、実績報告書の作成に努めた。以下の調査日誌抄は、発掘調査作業の記録のみを重点的に記述する。（森岡・坂田）

調査日誌抄

2006年7月10日（月） 晴れ

本日より、調査開始。調査道具・備品の搬入。発掘作業委託業者（間地工業㈱）の作業班長と現場の段取り、調査トレンチ等についての打ち合わせを行う。

旭塚の石室主軸を、今回の調査任意座標のY軸として、計5本の調査杭を打設した。

トレンチ1を石室主軸上の奥壁裏込め土付近から北西方向に向け設定し、機械掘削を開始した。機械掘削後の精査時に、旧表土内から寛永通寶銭（背文字に「文」第95図6、図版32）を1点検出した。

7月11日（火） 晴れ

トレンチ1の掘削作業を継続して行う。その中央付近盛土下で、須恵器甕体部片が数点出土した。墳丘外であり、旭塚に伴うものかどうかは不明である。

トレンチ2は、石室を中心として、左側壁体の背後から北東方向に設定した。機械掘削は、G.L. -10～-15cm程で、造成盛土は比較的薄い。調査区配置図（1/200）の作成を開始する。



第35図 調査風景（トレンチ2、北東から）

7月12日（水） 晴れ

トレンチ1の北半城高所部で、暗渠を検出した。周辺部に遺存していたらしい芦屋川水車小屋との関係を考える必要がある。

トレンチ2では、盛土直下より須恵器片や土師器片が出土した。トレンチ配置図に位置とレベルを記入して取上げた（第35図）。

トレンチ3を設定した。墳丘を中心に南西側に延長させるトレンチで、墳丘裾付近では、G.L. -10cmで、盛土を除去することができた。西端では、大きな攪乱があり、G.L. -2m以上に及んでおり、撤収後、埋め戻した。

7月13日（木） 晴れ

トレンチ1では、墳丘部の表土を剥がした。表土の厚みは10～20cmで、下層はブロック土が見られる。トレンチ2は、須恵器・土師器検出面の掘り下げ。盛土直下は、黄粉状の細～極細粒砂で、バサバサの斜面堆積層が累重する。周辺の既往調査では、この斜面堆積層に類似した層で、弥生土器片が出土している。



第36図 藤原教育長の現場視察（石室開口部付近）

トレンチ3では、西側の擾乱範囲(旧建築物の基礎)の平面図とレベル測定を行う。

7月14日(金) 晴れ夕方雨

トレンチ1の墳丘裾部の掘削では、奥壁裏込め付近直上のG.L. -40cmレベルで、コンクリート基礎が確認されたため、そのレベルまでトレンチ幅すべてを掘り下げることになった。トレンチ2では、黄粉状の土の上面まで掘削した。

曇りすぎに藤原教育長・川崎次長が来訪し、調査経過の説明を行った(第36図)。

7月17日(月)

海の日(祝日)。作業を全日中止した。

7月18日(火)～21日(金) 雨

雨天のため、この週は全日が中止となった。梅雨といえども、記録的な大雨が続き、全国各地で洪水や土石流の被害が出ている。

7月24日(月) 雨時々曇り

雨天の予報が出ていたが、本日は現場作業を決定した。午後から完全に雨が上がり、先週に溜ったトレンチ内の雨水を汲み出した。

トレンチ1の旭塚現況墳丘部分の盛土(造成土)を除去する。現況マウンド上面から、-50cmレベルでコンクリート底板を検出した。上面からコンクリート底板までは、5～20cm単位の客土によって入念に造成されていることが判った。さらに掘り進め、本日夕方の時点でも、造成盛土が排除できないことから、当墳の現代以降の盛土が予想以上に厚いことが判った。

トレンチ配置図の追加実測。調査杭の新設(杭6・7)。

7月25日(火) 曇り

午前中、発掘担当学芸員2名でトレンチ所見の中間現場検証を行う。

トレンチ1の墳丘裾部の掘削。G.L. -80cmで旧表土と思われる灰色粘土質砂を検出、当層上面を目指して掘削した。その結果、旧表土ではなく、暗渠状石列のベース層であることが判った。北西隅の暗渠の平面実測に着手した。

トレンチ2では、井戸と思われた付近を再掘削・再精査し、範囲の確認を行った。しかし、範囲が明確に検出できず、サブトレンチを抜いたところ、自然傾斜に沿った北東に向かって下る斜面堆積であり、おぼろげに見ることができた平面円形の輪郭は、後世の汚染による土色の変化であることが判った。

トレンチ3は、先週の降雨で満水になった雨水を取り除き、泥土を除去した。盛土層より、遊離遺物として須恵器の高杯が出土した(第95図4、図版38)。

7月26日(水) 晴れ

旭塚墳丘にかかるトレンチ2の南東壁土層の検討を行った。当トレンチで観察できた墳丘の盛土の状況は、旭化成製建設時期の擾乱がG.L. -100cm以上の深さに

至っており、墳丘北東部は大規模な削平が為されていることを確認した。

トレンチ3では、墳丘裾付近にG.L. -100cm未満の擾乱と、トレンチ南東端でG.L. -200cm以上の擾乱を確認した。南東端の擾乱については、旧建築物の基礎に相当し、当トレンチでは、擾乱坑の底端まで掘削することができず、場所をかえて掘削することとする(トレンチ6)。

トレンチ4を新設した。設定箇所は、ユニットハウスを設置している同一平面上で、東端から機械掘削を開始した。盛土の厚みは100～250cmを測る。

7月27日(木) 晴れ

トレンチ1の旭塚墳丘部盛土内で検出した石列の平面実測とエレベーションの測定。

トレンチ4では、機械掘削後の清掃と撮影。盛土・擾乱を取り除くと、100cmを超えるボルダー状の巨礫が多数確認できた。プライマリーな段状礫層が否かの検討が必要である。

調査杭8・9の設定を行った。

7月28日(金) 晴れ

トレンチ4で、巨礫を残しながら掘削を進めた。現段階では、この巨礫を含む砂礫層が人為的な痕跡を持っているか否かが不明瞭である。現在、露呈している巨礫には、矢欠痕や刻印は確認されていない。

7月31日(月) 曇り

トレンチ1では、北壁土層観察用のサブトレンチを機際に設定した。当トレンチより出土している須恵器片の十数点は斜面堆積層に帰属し、近辺に古墳や古墓が遺存している可能性が指摘される。

トレンチ4の土層断面図の作成を行った。

トレンチ5を新設した。北西道路沿い、調査地北西辺に沿って南北に設定した。トレンチは、あえて旧建築物の掘削と、掘削外にまたがるように設定し、遺構の存否確認を行った。盛土および建築基礎による擾乱の深さは現地表面より-150cm程度である。機械掘削は本日までをもって終了した。

8月1日(火) 晴れ

午前中、担当学芸員2名で2回目のトレンチ所見ごとの現場検証を順次行った。

トレンチ1の北壁土層断面図の作成。終日までに、全体の過半が終了した。

トレンチ5の機械掘削後の清掃。数点の須恵器片が出土している。当トレンチは、城山南壁古墳群第2号墳(固有称、山戸屋古墳。昭和52年度発掘調査)に最も近く、連続する遺物包含層などが遺存しているかが重要である。

トレンチ6を新設した。事業地に南接する道路に沿って東西に設定した。トレンチ3では深すぎて確認できなかった盛土・基礎床の下層確認も兼ねており、トレンチ幅を広げることが可能な場所に設定した。

8月2日(水) 晴れ

トレンチ1の土層断面実測を続行。旭塚墳丘手前まで終了した。

トレンチ5は、礫混じり中～細粒砂の上面で、機械掘削後2回目の精査を行う。当面では、遺構は無かった。

トレンチ6は、西端で旧建築物の基礎の掘り確認した。掘形より下層に遺跡が遺存しているか否かを調べるため、トレンチの幅を拡張し、この攪乱層を掘り抜いた。その結果、攪乱の深度は320～340cmを測り、下層から黄灰色の礫層(無遺物層)を確認した上で、安全のため、掘削後すぐに埋め戻した。

8月3日(木) 晴れ

トレンチ5を完掘し、土層断面図の作成に入る。本日は、全体の約1/2を実測した。

トレンチ6も完掘し、土層断面実測に着手し、明日に土層註記作業を残し、本日は終了した。

トレンチ7を新設した。調査地東端の狭小な平坦面上で、当初2m四方で設定したが、巨礫が多く掘削できないことから、拡張しながら掘削を進めた。

トレンチ8を新設した。旭塚の東方造成面、トレンチ2の東側に設定した。北端から機械掘削を開始した。

長谷川課長補佐、竹村芸芸員来跡。

8月4日(金) 晴れ

午前中、調査地全景の俯瞰撮影をするため、各トレンチの清掃発掘を行う。3段の撮影足場は、調査地北西端の高所部に建てた。当日の天候が良かったこと、ここ数日雨が降っていないことから、大気が汚れていて、大阪南部の眺望がややくすんでいたことが、撮影コンディションとして残念である(第37図)。

トレンチ5の土層断面実測・土層註記を行った。

トレンチ7を完掘し、トレンチ配置図の作成と、東壁土層断面の実測を行った。

トレンチ8の機械掘削が完了したので、清掃にとりかかった。

8月7日(月) 晴れ

トレンチ5の土層断面註記を完了した。トレンチ6・7を埋め戻した。トレンチ8では、土層層上面まで掘り下げた。この間に遺物は未検出である。

トレンチ9を新設した。調査地北端域に設定し、北西隅から機械掘削を開始した。機械による掘削は、碎石層・造成土のみを対象に、現地表面から100～120cmまでである。

8月8日(火) 晴れ

台風が接近しており、暴風雨対策を優先して行った。トレンチ2の旭塚墳丘部の実測と、土層註記を済ませた。トレンチ5を埋め戻した。トレンチ8では、土層断面図の作成に取りかかった。トレンチ9は、機械掘削後の清掃を行った。

トレンチ10を新設した。当トレンチは、トレンチ9の東端から、南に向けて設定した。トレンチ1・9・

10の関係は、トライアングル状になる。標高は81～82m前後を測る。碎石層・造成土は100cmを超える。

8月9日(水) 晴れ

台風は東海地方へ流れ、近畿圏の通過は免れた。

トレンチ8の土層断面実測と土層註記を完了させ、埋め戻しの準備にとりかかる。トレンチ9では、鉄分沈着層を目印として30cm程度、砂礫層を掘り下げた。

トレンチ10は、午前中で機械掘削を完了し、攪乱・削平箇所を見極め、清掃に取りかかった。

8月10日(木) 晴れ

トレンチ9は、茶褐色砂礫層上面で精査し、記録撮影を行った。遺物は出ていないが、良好に自然地形が遺存している。

トレンチ10は、東壁際に先行トレンチを抜き、次の精査面の認定を行う。現時点での記録撮影を行った。

8月11日(金) 晴れのち曇り

トレンチ9の南壁土層断面の実測と土層註記を完了し、埋め戻しの準備を行う。トレンチ10では、礫混じり中～細粒砂層上面まで人力掘削を行う。

トレンチ11を新設した。旭塚の南西域、敷地進入路部分に設定した。G.L. -60～-80cmで、黄褐色礫混じり中粒砂の安定した堆積層を確認した。遺物は、瓦器・須恵器片が数点出土している。さらに、時期は不明瞭だが、不定形土坑を1基検出した。攪乱の可能性もあり、明日再度検討する。

8月14日(月) 晴れ

担当芸芸員で、最終現場検証を行う。

トレンチ9の埋め戻しを完了した。トレンチ11は、現状のトレンチよりさらに東に延長した。この延長は、黄褐色土層と遺物散布の遺存範囲を確かめることを目的とした。

8月15日(火) 晴れ

本日、第1次の確認調査最終日。

トレンチ10と旭塚墳丘部の埋め戻し作業。トレンチ11の4a層上面まで掘削し、土層断面実測と土層註記を完了させた。また、市教委の調査道具の撤収を行った。長谷川課長補佐・国政文化財担当臨時職員来跡。(坂田)



第37図 調査風景(北から)

②調査結果

第1次確認調査において設定、掘削したトレンチは、合計11本である（第34図、第1表、図版3・4）。ここには必要に応じて他のトレンチとの比較を行い、基本的にはトレンチごとに調査概要と付随する所見を記載することとする。土層観察による堆積状況、旧表土層・土壌層の有無については、第38～48図も参照して頂きたい。

断面実測図に用いた土層番号は、現地表面を含む表土層を第1層とし、上から順に通し番号でアラビア数字を付した。また、同一層と認められるものでも漸次変移しており、土色・土質に違いがあるもの、異なる複数の層をセグメント関係でとらえたものは、アルファベットの小文字を付して細別した。色調は『新版標準土色帖1998年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）と視認色を使用した。なお、細分土層の註記は、各神図ごとに記載した。

トレンチ1 旭塚の石室主軸を通るトレンチで、墓趾奥壁裏込め付近から敷地北西コーナーに至る幅2m、全長約48mの長いトレンチである（第34・38図、図版3）。調査地中央から北西域の傾斜状況を知る上で有効なトレンチであり、設定面（現地表面）は、T.P. +81～86mを測り、造成段差を差し引いてもかなりの落差がみられる。土層の堆積状況は、造成土・砕石層を取り除くと、直下には斜面堆積層（2a・3a・3b層）が遺存していた。また、T.P. +83m前後の3a層上面や、旧建築物の基礎により攪乱を受けていない箇所では断続的ではあるものの、土壌層を確認することができた。ただし、この土壌層は旧建築物が建っていた時の庭地に相当するもので、現代に帰属する形成層である。

当トレンチで確認した遺構は、旭塚古墳（墳丘北半部）と近世以降の栗石を充填した暗渠状遺構などである。

遺物は、須恵器片・土師器片と寛永通寶が出土している。出土状況は、燐層層位が3a・3b層で、ある程度の密集度を保って点的に出土していることが特徴である。トレンチ北西端で出土した遺物群は、城山南麓古墳群第2号墳（固有称、山芦屋古墳）に近いことから、流出遺物とも考えられるが、トレンチ中央付近の遺物群は、このエリアに該期の遺構が遺存している可能性が高いことを示唆するものと判断される。

旭塚墳丘部にかかる箇所（第38図下）については、奥壁の現状上端と同レベルまでは、明らかに現代の盛土である。このことは、昭和36年に撮影された写真（第25図）を見ても明白であり、当時、奥壁は上半部が石材を欠落させ、剥き出しの状態になっている。つまり、現在、奥壁の上に2段ほど俵状の塊石が不自然に積まれているが、これらは昭和36年以降の墳丘整備に伴う積み直し用石であり、天井石をはじめ、墳丘築成土自体も奥壁基底石上端レベルまでは削平を受け、失われていることが判った（第22・24・26・30図などと符号）。

トレンチ2 旭塚石室主軸に直交するトレンチで（座標、X=10）、左側壁玄門石墓壁裏込め付近から北東方向に長く設定した（第34・39図）。幅2m、長さ約30mの規模で掘削し、設定面の標高はT.P. +78mである。

当トレンチは、造成盛土・砕石層が最も薄く、現地表面～30cmで築建策以前の整地層を確認した。土層断面では、アスファルト層を確認し、以前は駐車場もしくはテニスコートのスペースであったと判断され、建築による大規模な攪乱が及んでいないことが判った（図版3）。

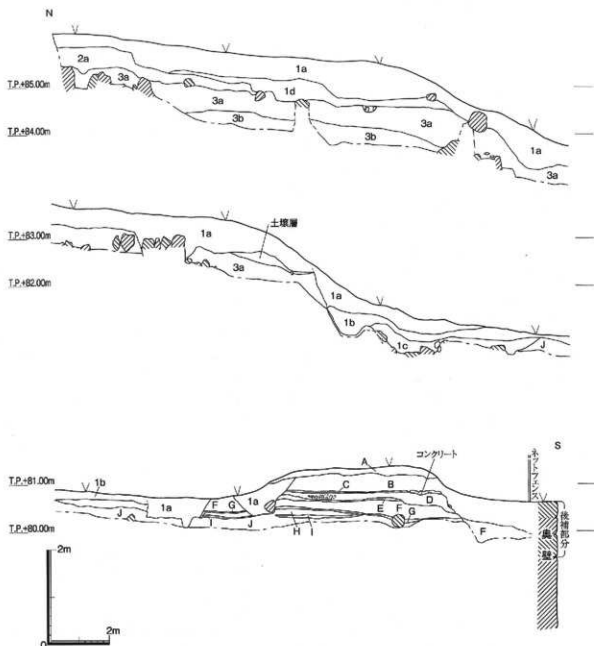
この整地層や北東域で観察された耕土層に似た礫混じりシルト質中～粗粒砂（1d層）上面で、須恵器片・土師器片十数点が有機的な散布を示して出土したため、平面掘削は当面までとし、東端のみ土層観察のため、深部についてサブトレンチを抜いた。

下層確認については、トレンチ中央の深掘トレンチとトレンチ8で補うこととした。以上、当エリアでは、盛土・砕石層除去後の比較的浅い深度で、注意すべき遺物の散布が認められた。

トレンチ3 旭塚の石室から南西方向に事業地南西隅を目指して設定した。石垣による土留めがあり、トレンチ2と同一ライン（座標、X=10）には乗ってこない（第34・40図、図版3）。幅2m、長さ20m、現地表面の標高はT.P. +77m前後である。

現況の墳丘裾から10m離れるまでは、攪乱を伴いながらも表土層直下で、須恵器の高杯片をはじめ、甕体部片が出土した。南西半分は、建築基礎によって攪乱を受けている。当トレンチでは、安全掘削の点で攪乱の底面まで完掘することができなかったが、トレンチ6の調査結果から、この攪乱深度は、G.L. -320～-340cmであることを確認した。

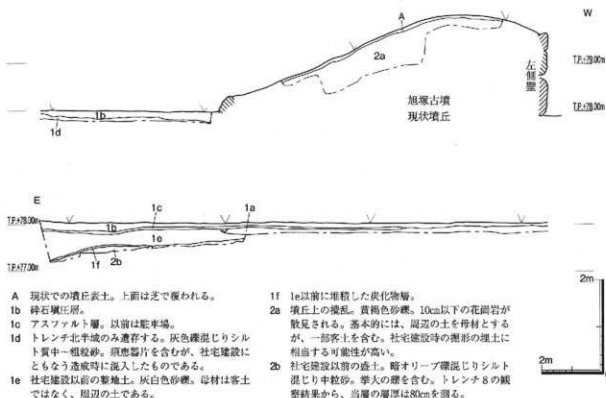
本トレンチの所見として、現況の墳丘裾から攪乱掘形までの部分では、一定の遺物の包含が認められた。現状では、旭塚古墳に最も接近する位置での出土遺物の確認状況として注意される。



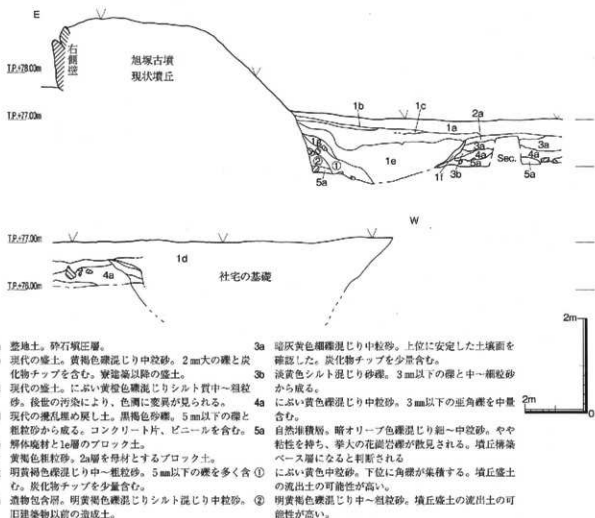
- 1a 現在の盛土。造成時の盛土。砕石を含む。
 1b 砕石填圧層。
 1c 砕石を敷く前の盛土。砕石投入前の盛地土。
 1d 現代の盛土層。コンクリート・廃材片を含む。
 2a 自然堆積物。明黄褐色礫混じり粗粒砂。5mm大の礫を多く含み、局所的に50cm大の巨礫（花崗岩）を包含する。
 3a 遺物包含層。にぶい黄～黄褐色砂礫。層相としては、段丘礫層を母材とした斜面堆積層で、須恵器片を含む。周辺では、古墳や中世墓の遺構が検出されており、それらの遺物を包含しているものと判断される。
 3b 3aと同様の層相であるが、部分的に上面の土壌化が看取でき、3a層が供給されるまでに、一定期間の開放状態があったと判断する。
 施塚墳丘部の盛土（昭和36年以降の盛土）
 A 現状の墳丘表土。現代の盛土。上面は、芝で覆われる。
 B 現代の盛土。母材は、当地周辺の灰黄色粗粒砂（径5mm以下の花崗岩粒を含む）。ビニール・コンクリート・金属片など

- を含む。奥壁より上の石積みは現代の積み直しであり、その裏込め土に相当する。
 C 現代の盛土。客土（当敷地内の土ではなく、敷地外から供給された土）。楊灰色中粒砂。
 D 現代の盛土。客土。黄褐色礫混じり中粒砂。玉砂利を含む。
 E 現代の盛土。客土。灰色中粒砂。
 F 現代の盛土。暗オリーブ礫混じりシルト混じり中～細粒砂。やや粘性を帯びる。薄層の累重であり、作業単位が解かる。
 G 砕石層。築設以前の保存整備時のものと判断する。ただし、1b層とは時期を異にする。
 H 現代の盛土。砕石層を敷くための置き土。明黄褐色礫混じり中粒砂。
 I 現代の盛土。灰色細～中粒砂。やや粘性を帯びる。層厚3～5cmの薄層の累重。
 J 現代の盛土。明黄褐色礫混じり粘土質粗粒砂。1cm以下の花崗岩片を含む。比較的にたかたか。敷地内もしくは周辺の土を母材とした盛土。

第38図 第1次確認調査 トレンチ1 南壁土層断面図 タテ1/80 ヨコ1/120



第39図 第1次確認調査 トレンチ2 南壁土層断面図 タテ1/80 ヨコ1/120



第40図 第1次確認調査 トレンチ3 南壁土層断面図 タテ1/80 ヨコ1/120

トレンチ4 調査地東端の平坦部に設定した。杜宅の建っていた場所である。幅2m、長さ22.5mで、現地表面の標高はT.P.+75mを測る(第34・41図、図版3)。全城が旧建築物の基礎にかかっており、この工事攪乱の下層に遺跡が遺存しているかを見極めが必要となった。基礎埋め戻し土は、現地表面-200cm前後で、深いところでは-250cmを超える箇所もある。T.P.+73~73.5mで、径100cm強の巨礫を包含する砂礫層を検出した。当層は、段丘礫層を母材とした二次的な堆積層で、遺構は無く、考古遺物も包含していなかった。

トレンチ5 調査地西辺の道路に沿って南北方向に設定した。幅2m、長さ26mで、設定面の標高はT.P.+81.5mを測る(第34・42図、図版3)。旧建築物の基礎は、現地表面-150~180cmまで掘削されており、盛土・砕石層により充填されている。盛土層を取り除くと、灰褐色~暗オリーブ褐色凝結し粗粒砂が確認でき、1点の須恵器片が出土した。城山南麓古墳群第2号墳(固有称、山声屋古墳)に最も近い場所での検出であり、近辺上方からの流出遺物と思われる。また、山声屋遺跡(S4・S7・N14地点)にも接しており、縄文時代早期の押型土器文化段階の遺物や、中期末から後期初頭の縄文文化期の遺物包含層の有無についても慎重に確認した。その結果、遺構や遺物はなかった。

トレンチ6 旭塚の南方、調査地に南接する道路に沿って設定した。幅2m、長さ31mで、標高はT.P.+77mを測る(第34・43図、図版4)。トレンチ3で確認できなかった旧建築物の基礎の深さと、その下層に遺存する遺跡の有無を調べることを目的とした。トレンチ5と同様に、南接する道路を挟んで山声屋遺跡の広がりや接触し、縄文遺跡としても全国的に周知されている関係から、攪乱の下層に該期の遺構・遺物が遺存しているかを見極めが必要となる。結果として、攪乱は現地表面-320~340cmレベルに達しており、その下層は黄白色の砂礫層(地山)であった(図版4・1段目右)。写真撮影後、簡易測量を行い、現地表面-1.5mまで埋め戻した。

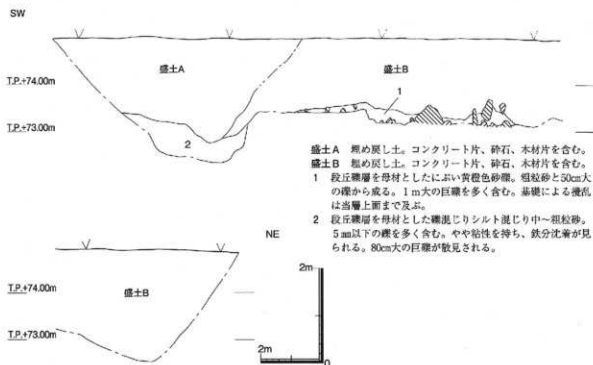
トレンチ7 調査地南東端、敷地内では最も標高の低い平坦部に設定した。地形の急変する所であり、確認が必要な箇所とみてトレンチを入れた。トレンチの規模は2.5m×7m程の矩形で、設定面の標高はT.P.+73mを測る(第34・44図、図版4)。東接する敷地を画する道路面との比高は2mを超えて設定面の方が高い。土層堆積状況は、上から1層盛土(今回の解体に伴う造成土)、2層旧表土(旭化城造成時)、3層推測の表込め土・造成土(築建以前宅地造成土)、4層砂礫層(自然堆積層)、5層巨礫混じり粗粒砂であった。3層最下位に割石が見られたが、矢穴痕は無く、擦痕積み上げ時の石材と判断した。3・4層は自然堆積層で、遺構・遺物は出土していない。4層は、段丘礫層もしくは段丘礫層を母材とした自然堆積層と判断する。

トレンチ8 旭塚の東方、トレンチ2と同一平面に当る造成面に設定した。トレンチの規模は2m×16mで、設定面の標高はT.P.+78mを測る(第34・45図、図版4)。トレンチ2では、比較的浅いレベルで遺物が出土したため、当トレンチでは深部の遺跡の有無を調べることに重点を置いた。30cm程度の砕石層の下には、同様にアスファルト層があり、その下には100~120cmの盛土層がある。現地表面-120~150cmで、上面が土壌化する砂礫層を確認し、精査を行ったが、遺構はなかった。

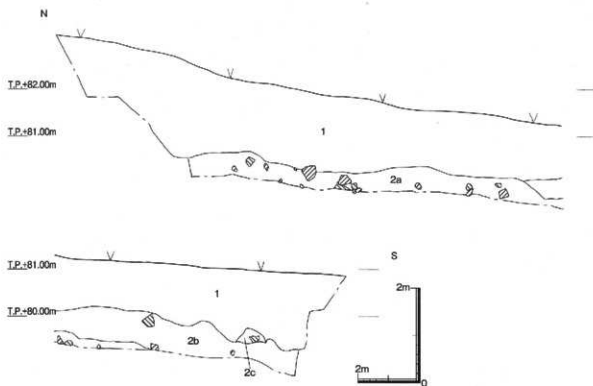
トレンチ9 調査地北辺に道路とはやや斜交して、東西軸で設定した。トレンチの規模は2m×25m、設定面の標高はT.P.+86.5mを測る(第34・46図、図版4)。当トレンチは、東側で造成土・解体痕が見られるものの、旧地形が良好に遺存していた。砕石層や盛土層を取り除くと砂礫層の累重が観察でき、中央から西端にかけて、自然流路が確認できた。上位部分は後世の削平を受けているが、中位~下位は流水による浸食作用が明瞭であった。当古墳群の横穴式石室墳は、このような流路などの下刻作用によって生じた残丘状の小尾根状地形に築かれることが多く、こうした旧地形自体の遺存状況がトレンチ外における埋没墳の存在を示唆している。

トレンチ10 調査地北半域に南北軸で設定した(第34・47図、図版4)。設定箇所には旧建築物の基礎があり、攪乱の深度把握を目的に、下層に遺跡が遺存しているか否かを見極めた。まず、攪乱および基礎床は現地表面-150cmで、その中には砕石層や解体後の盛土層を含んでいる。下層は明黄褐色凝結し中~細粒砂が遺存しており、土師器片を包含していた。出土遺物のまとまりや土壌層の確認から、古墳時代~古代の遺構が周辺に遺存している可能性が高い。

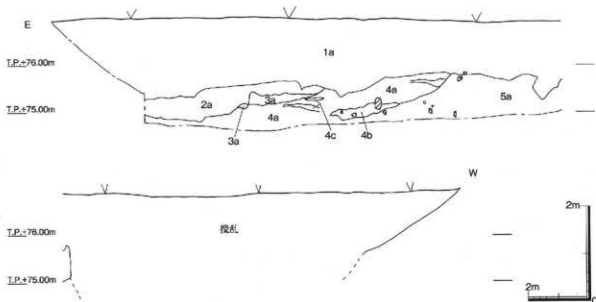
トレンチ11 旭塚古墳の南東部、いわゆる東側前庭部付近に設定した。現状では、南東に下るなだらかな傾斜をもっている。トレンチの幅2m、長さ28m、設定面の標高T.P.+75~77mを測り、落差が認められる(第34・48図、図版4)。北西端で、アスファルト面が一部残っており、工事などによる大規模な攪乱からは免れていることが予測された。その結果、現地表面-50~60cmのレベルで、安定した堆積層を確認した。4a層からは、



第41図 第1次確認調査 トレンチ4 北西壁土層断面図 タテ1/80 ヨコ1/120

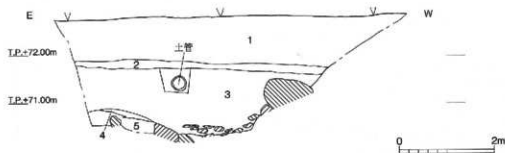


第42図 第1次確認調査 トレンチ5 西壁土層断面図 タテ1/80 ヨコ1/120



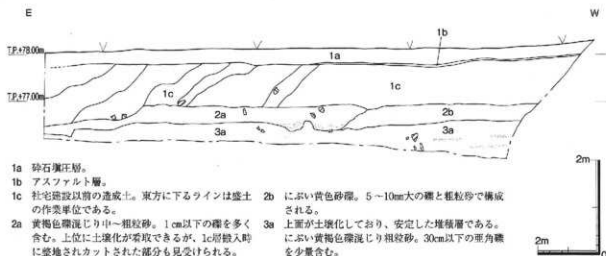
- 1a 現代の盛土。複数層に分けられるが一括している。下位までビニール・コンクリート片を含む。
- 2a 段丘層を母材とする再堆積層。褐色礫質シルト質中粒砂。3～5mmの風化花崗岩粒を多く含む。さらに、淡黄色シルト質細粒砂のブロック土（断面径20cm）を中量含む。かたく硬まる。
- 3a 自然堆積層。オリブ黄色砂礫。東に下がるラミナが観察できる。一過性の流水堆積層。
- 4a 斜面地の自然堆積層。明黄褐色礫泥じり中～粗粒砂。1cm以下の風化花崗岩を中量含む。鉄分沈着が見られる。後世の植物根はこの土層にまで及ぶ。
- 4b 傾斜地変換点の溜り。にぶい黄色シルト。植物遺体を若干含む。
- 4c にぶい黄色細礫泥じり極細粒砂。局所的に確認できる堆積層。
- 5a 斜面堆積層。暗灰黄色礫泥じり中粒砂。10～30cm大の風化花崗岩を含む。土の締まりは並である。
- ※土層断面図上では図化できていないが、攪乱の底（G.L. -3.2～-3.4m）で黄白色礫質泥～極細粒砂層（地山）を確認した。

第43図 第1次確認調査 トレンチ6 南壁土層断面図 タテ1/80 ヨコ1/120

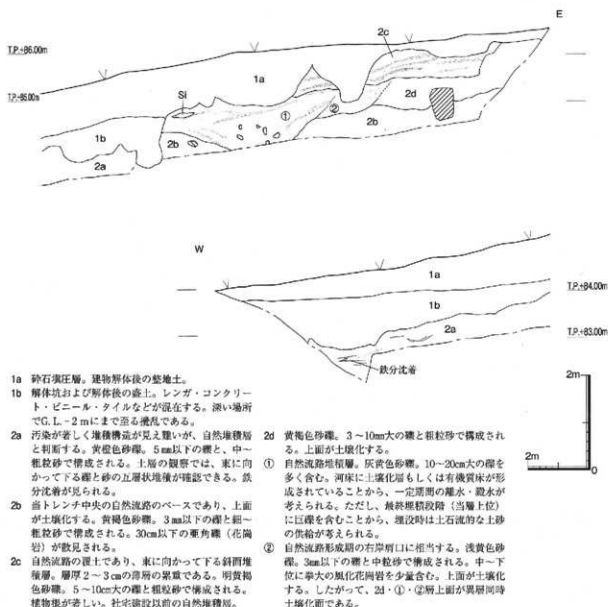


- 1 造成土。当地点は土を入れたのみで、砕石による増圧は為されていない。
- 2 造成前の旧表土。
- 3 住宅建設以前の宅地造成時の盛土、および擁壁の裏込め土。黄色礫泥じり粗粒砂。下位に矢穴痕を持たない花崗岩割石を多数含む。
- 4 黄灰色砂礫。1cm以下の礫と極粗粒砂から成る。
- 5 自然堆積層。淡黄色礫泥じり中粒砂。1m径の巨礫を多数含む。

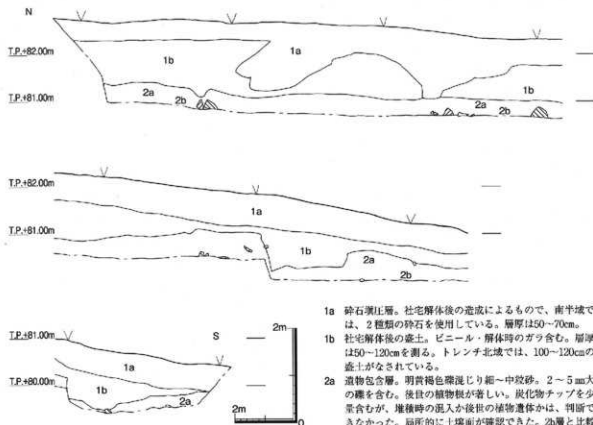
第44図 第1次確認調査 トレンチ7 南壁土層断面図 1/80



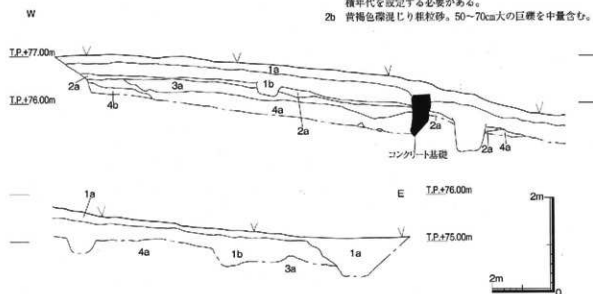
第45図 第1次確認調査 トレンチ8 南壁土層断面図 タテ1/80 ヨコ1/120



第46図 第1次確認調査 トレンチ9 北壁土層断面図 タテ1/80 ヨコ1/120



第47図 第1次確認調査 トレンチ10 東壁土層断面図
タテ1/80 ヨコ1/120



- 1a 砕石填圧層。2種類の砕石を含む。アスファルト塊を含む。
1b 社宅建設以前の盛土。
2a 旧表土層。礫混じり細粒砂。トレンチ西半部のみ遺存する。東半部は、社宅建設時に削平される。
3a 斜面地の自然堆積層。黄褐色砂礫。3～5mm大の礫と粗粒砂から成る。鉄分沈着が観察できる。
4a 遺物包含層。上面が土填化し、安定した堆積層である。明黄褐色礫混じりシルト混じり中粒砂。5mm以下の礫を含み、植物遺物が散見される。上位に、瓦器・須臾器片を含む。
4b 旭塚の基礎層と判断する。オリブ色礫混じり中粒砂。3～5mm大の礫を多く含む。30cm大の歪角礫が散見される。非常に堅く締まる。

第48図 第1次確認調査 トレンチ11 北壁土層断面図 タテ1/80 ヨコ1/120

瓦器細片や須恵器片が出土している。この遺物包含層は、当トレンチ南東端から2m付近まで遺存している。

このトレンチは、旭塚古墳の開口部～前庭部に相当し、土器の散布も広範囲で、墓前儀礼を含む重要な遺構が遺存しているものと判断される。

(坂田)

③小 結

第1次の確認調査は、地権者からの依頼により、芦屋市山芦屋町23番地（敷地面積7,438.01㎡）の事業予定地において、旭塚古墳を基点とする埋蔵文化財の広がりを確認する目的で実施した。対象地は、さまざまな時期の周知遺跡の範囲が重複する状況であり、複合遺跡の性格を細かく見極める目的で実施した。調査の対象範囲は、敷地全域であり、既存建物の基礎床の下に遺跡が遺存していることも考慮して、旭化成株式会社の社宅（旭化成芦屋アパート）の解体後にトレンチを掘入した。幅2mのトレンチ方式で、旧地形の変化や古墳立地の微地形の情報を吸収するため、可能な限り距離を長く取るように設定した（第34図）。その結果は、本章の第2節②項に記載したとおりであるが、旭塚古墳以外にも他の埋蔵文化財を包蔵することが判明した（図版3・4）。

その結果を一覧に供すれば、第34図と第1表左に示すとおりである。現存している旭塚古墳以外では、トレンチ1、トレンチ2、トレンチ3の東半（旭塚古墳寄り）、トレンチ9、トレンチ10、トレンチ11において、何らかの遺跡が遺存している兆候が看取できた。第34図の太線囲みは、それらを根拠として埋蔵文化財の包蔵範囲を明確化したものである。この範囲では、工事損壊などに際し、発掘調査を必要とすることにしたが、遺跡の性格と残存度をさらに確かめるために、第2次確認調査を行う必要があることも通知した。

確認調査面積は、事業地全体の8%程度に留まるため、具体的なことが明らかになっているわけではないが、旭塚古墳の遺地条件は、調査地内では最も良好とみられ、敷地内には他に起伏に首尾根筋と谷筋が派生していることが判明した。基盤層との関係で、旭塚古墳を除くその他の群集墳構成墳がすべて削平を受けたとは考え難く、堆積状況からみて、墳丘や石室が地下深くに随所で埋没していることを示唆する調査所見である。古墳時代の須恵器や土師器が群がりとなって適宜距離を置いてみられるのは以上の推測を裏づけ、深部の探査を伴う面的な第2次確認調査が不可欠である。

以後、土地利用計画、設計図の詳細がまとまれば、開発計画により則した具体的な協議が必要である。また、旭塚古墳は、兵庫県下において屈指の横穴式石室であり、調査のみならず古墳そのものの将来に向けての保護協議、活用施策を別途に進めていく必要があると判断した。

(森岡)

(3) 第2次確認調査の実施

①調査方法と調査経過

第2次確認調査は、旭塚古墳の保存を前提の第一に、事業者の掘く開発計画とどのように調整が図られるかを最大の目的とし、その調査範囲は、第1次確認調査により判明した埋蔵文化財遺存範囲（第34図の太線囲み）を対象とした（図版遺構内表紙写真、調査区概要部全景）。しかし、平面調査によって遺構面がその範囲を超えてさらに続くことと判断された箇所は、一部この範囲を超えて掘削したエリアが存在する（第49・50図）。

第2次確認調査については、旭塚古墳を要とする調査区以外に面的調査を行う必要があった。その調査区をAトレンチと呼ぶ。それぞれの調査区の規模・掘削面積は、Aトレンチが幅約13m、長さ約32m、調査面積416㎡を測る。その南西コーナー付近には、5.5m×6mの拡張部①(27.5㎡)、9m×10mの拡張部②(90㎡)を設けた。旭塚古墳に設定したトレンチは、さまざまな部位にわたる。前庭部では石室主軸を境に東Ⅰ～Ⅴ区、西Ⅰ～Ⅳ区を南北長2～3m、東西長6～7m規模でそれぞれ設定した。墳丘部では、墳丘保存計画を受け、周囲に大小9本の断削りトレンチを設定するに留めた。それぞれのトレンチにおける具体的な規模や目的は後項にて詳述する。

発掘調査は、表土・盛土・造成土・砕石層を重機で掘削し、以下は層位ごとに人力掘削に進めた。ただし、旭塚古墳の墳丘部に関しては、表土層からすべて人力にて慎重に掘削した。発掘による排出土は、敷地内に仮置きし、調査終了後に埋め戻した。

測量の基準杭1（X・Y=0）は第1次確認調査で使用した旭塚開口部中央に任意に打設したものをそのまま踏襲した。石室主軸ラインをY=0とし、北・東方向にプラス値を、南・西方向にマイナス値を与え、仮座標を設定した。仮座標のY軸は、磁北から23°西偏する（〔武庫川女子大学考古学研究会1984〕掲載の石室主軸は、28°西偏）。測量調査におけるすべての基準点、基準線は、これを使用するとともに、任意点であるため、国土座標に基づく平面図にも記入した。基準高は、調査地南辺を東西に走る市道のマンホール高T.P.+73.24m（本市下水道部所管台帳記載）から水準測量によって求めた。写真撮影は、35mmリバーサルフィルム、35mmモノクロフィルムを使用し、デジタルカメラを併用して、記録した。また、遺構写真の一部と遺物写真は、考古・文化財写真家の梅原章一氏に専門撮影を依頼した。

なお、すべての調査図面および出土資料・調査記録などは、芦屋市教育委員会生涯学習課（文化財担当）三条整理事務所（芦原市役所分室）にて整理し、一括保管している。広く活用されることを望むものである。

発掘調査は、平成19年（2007）7月2日より準備工を開始し、平成19年11月30日に終了した。ただし、一部補足的な調査を地権者の許可を得て12月上旬に実施した。調査期間は約5ヶ月を要し、調査終了後には、直ちに三条整理事務所にて実測原図・写真・出土遺物の応急整理を行い、実績報告書の作成に努めた。以下の日誌抄は、発掘調査作業の記録のみを重点的に記述する（第51～55図）。（森岡・坂田）

調査日誌抄

2007年7月2日（月） 晴れ

本日より、本敷地内の準備工を開始した。

7月3日（火）～4日（水） 雨

雨天のため、作業を中止した。4日は通電工事のみ行った。

7月5日（木） 晴れ

準備工を継続し、トイレ・テントなどの設置。

7月6日（金） 晴れ

都合により、作業停止。

7月9日（月） 晴れのち曇り

本日から機械掘削を開始した。敷地北域の最高位平坦面より旭塚墳丘東部に向けた幅13m、全長約32mのトレンチを略南北方向で設定した（Aトレンチ）。掘削は北端の高所部から開始した。盛土は80～100cmを測り、盛土から下は人力掘削で掘り進めることとした。

7月10日（火） 曇り一時雨

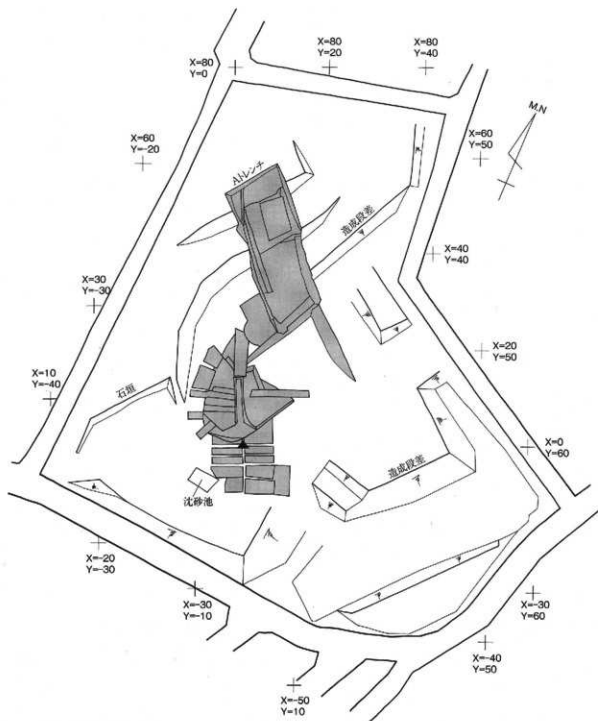
先日に続き、機械掘削の継続作業を行った。最高位平坦面の機械掘削がほぼ完了し、全体の1/4程度まで進行している。測量基準となる調査杭の準備を開始した。

7月11日（水） 曇り時々雨のち晴れ

雨天の予報が出ていたが、本日は現場作業を決定した。午後から完全に雨は上がり、機械掘削を続行した。須臾器片が盛土内およびその直下層より数点出土している。調査杭を打設。杭は第1次確認調査時の基点（X・Y=0）を使用し、旭塚古墳石室主軸の設定も兼ねた調査座標を組んだ。

ベルトコンベアーの搬入。本日より、作業員を5人増員した。

本格的な発掘調査を開始した。

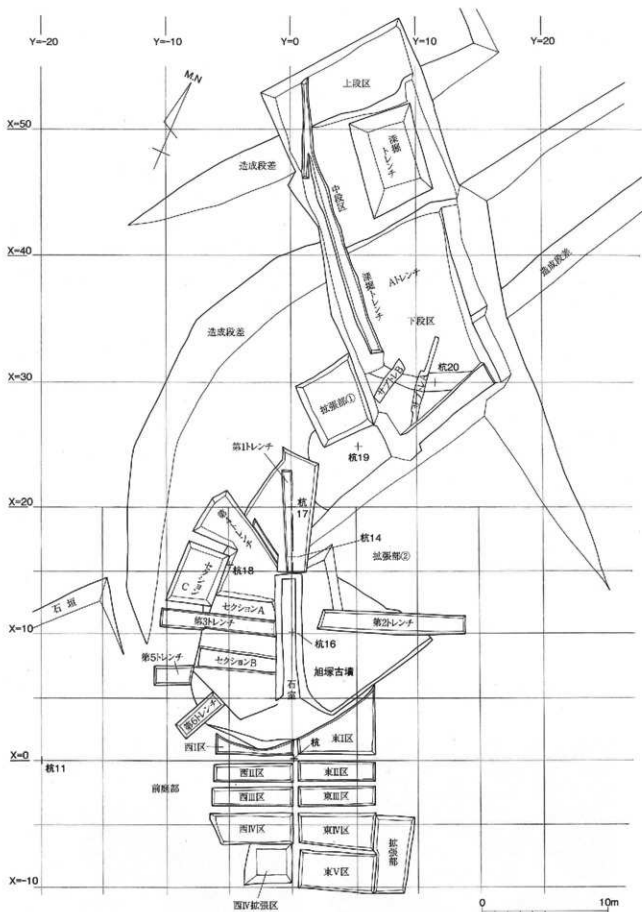


※アミカケ部分は第50図に示す
レンチ掘削部分と対応する。

※▲は水準測量原点を示す。
T.P.+77.127mを計測。

0 20m

第49図 調査地全体図・座標割付図 1/800



第50図 トレンチ配置図と座標割付平面図 1 / 300

7月12日(木) 雨

台風4号接近のため、テント・物置・ネットフェンスの養生を行った。機械掘削を継続しながら、残土を填圧した。

7月13日(金) 雨

台風による降雨のため、作業を中止した。

7月17日(火) 晴れ

週末の台風でトレンチ内には雨水が溜まっていたため、水抜き作業を行った。並行して、ベルトコンベアーの設置を指示した。新たに調査坑(Na12・13)を2本追加した。

7月18日(水) 晴れ一時雨

Aトレンチ北端より人力掘削を開始した。盛土直下の表土を掘削中。遺物は出土していない。西側先行トレンチの土層観察を行い、今後の見通しをつけた。機械掘削床面より70cmほど下に土壌層を確認した。当層を精査面とする。トレンチ配置図の作成。藤川祐作氏来跡。

7月19日(木) 晴れ

Aトレンチでは、旧建物建築時に行われた造成段差が認められ、北から2段目を機械掘削床から10~15cm掘り下げた。須恵器片が4点出土。3段目(下段)の掘り下げにも着手した。

トレンチの機械掘削最終日となり、コンテナハウスと同一平坦面部分(旭塚東側)に取りかかった。当エリアは旭化成寮の基礎掘形に相当し、攪乱は2~3mの深さに及ぶ。

7月20日(金) 晴れ

Aトレンチの2~3段目の掘り下げを継続。旧表土より下で須恵器片・土師器片が出土した。遺構ラインは検出しておらず、現時点では流出遺物・流出包含層と考えられる。

7月23日(月) 晴れ

Aトレンチ北から4段目、サブトレンチの南半城で子持器台の破片が出土した。出土層位は、有機質の旧表土直下である。比較的確存度が良く、復元可能品であろう。他に律令期の土師器杯片が出土している。こ

れら須恵器片が出土するエリアの土器は、すべて浮かし掘りで掘削し、土器溜りAと称することにした。

7月24日(火) 晴れ

土器溜りAの清掃・精査と撮影後すぐに平面・立面図(1/10)の作成。さらに、同一面にて、土坑101を検出した。旭塚の東、旭化成寮基礎掘形断面の略柱状図を作成。

7月25日(水) 晴れ

土器溜りAの観察計を平面図コピーに記す。土器溜りAの西側を5m程拡張した。再度、機械掘削を行い、旧表土上面で機械掘削床とした。本市文化財保護審議委員の村川行弘氏・神木哲男氏来跡。

7月26日(木) 晴れ

北から1~3段目までを精査。小石充填に使用できそうな石材は数点確認できるが、明確な遺構は遺存していない。拡張部旧表土層より5点の遺物を検出した。藤原教育長、大橋生涯学習課課長補佐来跡。

7月27日(金) 晴れ

拡張部を土器溜りA検出レベルまで慎重に発掘。夕方の時点では、須恵器の続きは出てこない。梶井氏(設計担当者)来跡。

7月30日(月) くもり

北から3・4段目の精査を行った。第1次確認調査10トレンチの北壁にかかる攪乱坑から須恵器片1点と10円銅貨が1点出土した。

7月31日(火) 晴れ

北から1~2段目の清掃発掘を継続する。角上氏(東海アナース)来跡。

8月1日(水) 晴れ

北から1~2段目(3回目)の精査。未だ下層に見える土壌層には到達しない。今回の掘り下げでは遺物は出土しなかった。写真撮影後、再度1~3段目を掘り下げる。2・3段目間中央東西セクションの断面実測。

8月2日(木) 晴れのち曇り

本日、台風5号が接近中。午前中に北から1・2段目を精査し、記録撮影を行った。午後から調査地内の



第51図 市学芸員の現場検討とビデオ記録撮影



第52図 現代の竜山石工も来跡しての現場検証

養生に取り掛かる。

8月3日(金) 曇り一時雨

台風接近のため、作業中止。

8月6日(月) 晴れ

北域から土壌層を目指して掘り下げを進める。石は浮かし掘りで残しながら面を下げていった。

山本徹男氏(市内遺跡ビデオ撮影・映像作家)による、調査風景や現場進行状況の撮影。国政さん(臨時の任用職員)・仲谷さん・小島さん・相澤さん(文化財ボランティア)来跡。

8月7日(火) 晴れ

昨日の掘削作業を継続した。土壌層は本来調査地全域で確認できるものと思われるが、前平や攪乱などで消滅している箇所がある。夕方、1・2段目の精査が完了し、写真撮影を行った。山本氏ほか1名来跡。

8月8日(水) 晴れ

土壌層精査後、浮かし掘りで残っていた石材の中で、明らかに転石であるものを除去した。さらに、次の精査面を探るため、西側のサブトレンチを北端まで延長し、東側にもサブトレンチを設定した。夕方には両方のサブトレンチが掘り上がり、次の段取りを立てるも土層の見極めがつきにくい。堆積環境にあまり変化がない可能性がある。土器溜りAから北へ2mの地点で、土師器片が出土しており、座標を測って取り上げた。太田宏明氏(河内長野市教育委員会、横穴式石室研究者)来跡。

8月9日(木) 晴れ

北から1・2段目の掘り下げ。層理面がなく、20cmずつ掘り下げる。これまでと同様に、石は浮かし掘りで残すこととした。藤川氏来跡。

8月10日(金) 晴れ

猛暑が続き作業員さんの疲労もピークか。土壌層掘り下げ段階で露見した石材の浮かし掘り状況を写真撮影。明日から盆休みのため、現場周りの養生を行った。カメラ・測量機器などの貴重品を三条整理事務所に一時撤収した。

8月13日～8月17日

夏期休暇。現場の作業を休止する。

8月20日(月) 晴れ

夏期休暇中の養生を解除し、ベルトコンベアーの設置を行う。北半部の掘り下げ。

8月21日(火) 晴れ

先日の掘り下げの続きと、旭塚墳丘部の掃除。

8月22日(水) 晴れ

前日までの掘削が完了し、精査状況を撮影する。北端と東端にサブトレンチを設定し、その掘削にかかる。

8月23日(木) 雨のち晴れ

朝方に大雨が降ったため、作業を中止した。

8月24日(金) 晴れ時々雨

Aトレンチ北・東側のサブトレンチが掘り上がり、

次に精査する面を検討する。

石橋氏(旭化成株式会社)、梅本さん(文化財ボランティア)来跡。

8月27日(月) 晴れ

Aトレンチ北壁の壁面精査。トレンチが深くなってきたため、犬走りを設けて壁面の強化を行った。分層後、実測図を作成した。

8月28日(火) 曇り

北半より6a層の掘り下げを行う。山本氏ほか1名来跡。

8月29日(水) 曇り

低気圧前線が南下している模様。雨が降ったり止んだりの高温多湿の1日だった。Aトレンチでは、昨日より掘り下げていた北半部が終わり、精査状況の撮影を行う。当面以下は、サブトレンチを観察しても、層理面がないため、20～40cmの単位で掘り下げを進める。この掘り下げに関しては、南半部も通して行い、堆積状況の把握に努める。

8月30日(木) 曇り

南半部の掘削開始。土器溜りAは、未だ浮かし掘りのまま残しておく。旭化成ホームズ担当者来跡。

8月31日(金) 曇り

Aトレンチ全体を精査し、南側に3段の足場を組んで全景撮影。

9月3日(月) 晴れ

Aトレンチ南側、土器溜りAの2mほど東で、土師器の甕と須恵器の平皿を検出した。今のところ掘形はない。守田囃託来跡。

9月4日(火) 晴れ

昨日検出した須恵器と土師器の状況写真を撮影した。これらの土器は、幅1m程度の溝の中に入っている様で、古墳や祭場などの周縁になる可能性も考えられる。須恵器は焼き歪みのみられる平皿、土師器は外面ハケメ調整を施す甕である。

9月5日(水) 晴れ

朝に担当学芸員2名で今後の段取りについて打ち合わせを行う。南側の溝は明瞭に観察できるが、北側が不明瞭である。周縁とは限らないが、再度サブトレンチを検証しながら、北側のみ慎重に掘り下げを行う。

9月6日(木) 曇り

関東地方に台風9号接近中。風が強く、雲行きが悪くなってきた。夕方にはテント・道具類の養生を行った。トレンチ配置図の追加図面を作成した。守田囃託・佐藤補助員・藤川氏来跡。

9月7日(金) 晴れ

近畿圏では台風の影響はさほどなく、現場に関しては何も問題はなかった。今日からAトレンチ北半分の深掘トレンチを設定し、掘削を開始した。

9月10日(月) 曇りのち晴れ

深掘トレンチ掘削を続行。深掘トレンチの先端を調査

査トレンチ配置図に追加する。

9月11日(火) 晴れ

少し涼しくなってきた。深掘トレンチの掘削を継続。掘削途中で炭化物が散見されたため、そのレベルを維持したまま精査。炭化物とともに、赤色粘土塊を確認した。平面写真と断面写真撮影。炭化物と赤色粘土のサンプルを採取する。

9月12日(水) 晴れ

午前中は、旭塚古墳の除草除去を優先し、全景撮影の準備を行う。足場は石室開口部側と、奥壁側にて撮影した。梅原章一氏(写真家、本現場の専門撮影委託)、大橋課長補佐来跡。

9月13日(木) 晴れ

午前中、Aトレンチ北半部の深掘トレンチの完掘。土層断面を撮影し、実測準備を進める。

旭塚古墳前庭部のトレンチ設定を行い、掘削を開始した。前庭部に施設は存在するのか。

9月14日(金) 晴れ

旭塚古墳前庭部の表土掘削。砕石とアスファルト層を重機で除去した。Aトレンチ北半部の北壁・西壁土層断面実測。梅本素子さん、仲谷由利子さん、久保ふく子さん(文化財ボランティア)来跡。週末の台風に伴って養生を行う。

9月18日(火) 晴れ

Aトレンチ北半部の西壁土層断面実測の続行。

9月19日(水) 晴れ

Aトレンチの土層断面実測を継続し、土層註記。

9月20日(木) 晴れ

Aトレンチ南半部、上の断面実測。全ての調査坑のレベルチェックと補正。旭塚前庭部の掘削続行。

9月21日(金) 晴れのち曇り

旭塚前庭部の掘削。前庭部は住宅内の路面があったところで、土層全体に強い墳圧がかかっており、非常にたかく締まっている。守田囀託来跡。

9月25日(火) 晴れ

昨夜から明け方の降雨でトレンチ内は雨水が溜まっ

ていた。旭塚前庭部の掘削。盛土・砕石・置土の直下層で土器片が出土した。座標を測量し、ナンバーを付して取り上げた。

9月26日(水) 晴れ

前庭部の黄色パウダー状の土層(黄白色極細粒砂)の上面で、数点の土器片を検出した。出土位置の座標を測量し、ナンバーを付して取り上げた。

9月27日(木) 晴れ

前庭部の精査を継続した。黄色パウダー上面の精査状況を撮影する。

9月28日(金) 晴れ

前庭部の掘り下げ。梅原氏に写真を依頼し、墳丘全景及び土器溜りAの撮影を行う。

10月1日(月) 晴れ

本日より新採用の住本調査補助員従事。前庭部黄色シルト中位面の精査が完了し、写真撮影。中位面においても土器片が散見されるが、遺構に伴うものではないようだ。

10月2日(火) 晴れ

前庭部、礫混じり黄灰シルト上面で精査・撮影。東Ⅱ～Ⅳ区で数点の遺物が出土し、逐一座標を測って取り上げた。なお、西Ⅳ区では凝灰岩片と思しき剥片が出土したので、浮かし掘りを指示した。

10月3日(水) 曇り

前庭部、黄灰砂下面で精査。西Ⅳ区の礫と東Ⅳ区の遺物出土状況を中心に写真撮影。藤川氏来跡。

10月4日(木) 晴れ

午後から旭塚古墳の保存協議(旭化成株式会社、旭化成ホームズ、市公園緑地課、教育委員会生涯学習課)を行う。さらに三次元デジタル測量(東海アナース、文化財サービス)の打ち合せを進める。前庭部東Ⅳ区の土器出土状況の撮影と実測準備。遺物はこれまでは異なっており、密集度が高い。破砕行為の可能性もあるため、縮尺1/2の平面図を作成する。

10月5日(金) 晴れ

東Ⅳ区の土器出土状況の平面実測作業を続ける。A



第53図 報道関係者発表の光景(2007年11月5日)



第54図 現地説明会の一コマ(2007年11月17日)

トレンチ南域の拡張。守田囑託、山本補助員、西岡補助員来跡。

10月9日(火) 曇り

東Ⅳ区の凝灰岩礫集積部の平面実測。前庭部セクション土層断面実測開始。右側壁矢穴石の平面実測。

10月10日(水) 晴れ

東Ⅳ区の凝灰岩礫集積部の平面実測。前庭部セクション土層断面図の実測開始。梅原草一氏、本日は墳丘背面から大股溝を遡るカットを撮影。

10月11日(木) 晴れ

旭塚古墳石室の三次元測量を行った。前庭部土層断面図作成を継続。西Ⅳ区、礫集積実測を続行。

10月12日(金) 晴れ

Aトレンチ拡張部、器台出土面まで掘削。墳丘西トレンチの際を掘削。墳丘西トレンチで、G.L. -2.5mで土管を検出した。墳丘西部は大半のマウンドが削平されている可能性が高い。墳丘奥壁の積み直し石材の除去。積み直し石材はコンクリートで固められている。木許守氏(御所市教育委員会)来跡。

10月15日(月) 晴れ

Aトレンチ拡張部を土器溜りAの検出面までの掘り下げ、全景撮影を行う。前庭部西Ⅳ区の凝灰岩礫集積部の平面図が完成した。

旭塚古墳奥壁表込部の擾乱・盛土の除去を行った。白谷囑託・守田囑託来跡。

10月16日(火) 晴れ

墳丘南面の石垣を除去。墳丘第3トレンチ表土剥ぎ。Aトレンチ拡張部、完形の須恵器平瓶・土師器壺の検出面までの掘り下げを行う。

10月17日(水) 晴れ

前庭部西Ⅳ区を南側に2m程拡張した。南西半は擾乱によって削平を受けている。掘削掘削断面を観察すると、凝灰岩割石層は確認できず、数片の破片が見える。このことから凝灰岩礫集積は擾乱によって切られているのではなく、擾乱まではその南限があるものと推測できる。

10月18日(木) 晴れ

墳丘上に設定した第1トレンチの西壁土層断面実測。Aトレンチ内に調査杭を新設した。竹村学芸員・守田囑託来跡。

10月22日(金) 晴れ

石室床面の表土剥ぎを開始した。主軸を境に西側を掘削。表土中からビンに入った古い手紙?(第76・77図)と須恵器片を検出した。羨門部西側の石垣表込め土内で須恵器・土師器片を検出した。Aトレンチ、完形土器出土面にて以前より観察できた溝を再検出し、撮影。竹村学芸員来跡。

10月23日(火) 晴れ

石室内床面の西半腐植土を取り除き、写真撮影。床面南半からは、前庭部西Ⅳ区で検出した凝灰岩片十数点

がシルト質粘土に混じって出土している。Aトレンチ溝は、サブトレンチを2ヶ所設定して断面形状を確認した。自然堆積層が当溝によって明らかに切られていることから、人為的な掘り込みとみて間違いない。竹村学芸員来跡。

10月24日(水) 晴れ

Aトレンチ、溝201平面実測。墳丘第2トレンチ北壁の土層断面実測。凝灰岩礫集積や石室石材の見学者と共に検討作業を行った(奥田尚氏・梅原草一氏・加藤氏・藤川祐作氏、本市学芸員)。

10月25日(木) 晴れ

Aトレンチ、溝201の遺構掘り。西Ⅳ区拡張部の実測開始。石室内凝灰岩礫敷遺構の実測開始。墳丘上のトレンチ配置図作成。白谷囑託・西岡補助員来跡。

10月26日(金) 雨

雨天のため、作業を中止した。

10月29日(月) 晴れ

墳丘北西部の表土層を掘削。遊離コッパ石材が傾をみせ始めた。Aトレンチ溝201の埋土掘削を開始。埋土からは遺物は出土していない。その肩部から石礫が1点出土した。

北垣恵一郎氏・藤原清尚氏・中村浩氏・藤川祐作氏が来跡し、凝灰岩礫集積の起源・産地および目的、遺構の性格について検討を深めた。凝灰岩に関しては、肉眼観察では竜山石の可能性が高いとの判断であるが、分析に出したほうが良いとのご助言を受けた。辻康男氏(パリオ・サーヴェイ株式会社)来跡。

10月30日(火) 晴れ

前庭部東Ⅴ区を新設し、東西Ⅳ区で検出した土器溜りや凝灰岩の範囲を押さえる。墳丘北西側は、2層目の盛土の掘削に着手した。墳丘北西側には、50cm大の花崗岩礫が出土し、外区・内区列石の可能性も視野に入れながら、層位の検証を行った。山本徹男氏及び山歩き同好会のメンバー2名来跡。

10月31日(水) 晴れ

前庭部東Ⅴ区の機械掘削前後の精査。墳丘北西側にサブトレンチを抜いて、残りの造成土の厚みを検証する。墳丘第2・3トレンチを延長し、周溝を掘る。墳丘前面の石材を実測。喜多貞裕氏(文化財サービス)来跡。

11月1日(木) 曇り

前庭部東Ⅴ区、2面目の掘削。土器が散見され、座標上の確認を行って取り上げた。墳丘第3トレンチ延長部では、周溝らしき落ち込みを検出した。主軸からは7.5mを測る。墳丘北西部の石列が墳丘内に蔵するものか、後世のものかの判断が必要である。

11月2日(金) 晴れ

墳丘北西部列石検出状況の撮影。前庭部、凝灰岩礫集積部の実測を終了する。

11月5日(月) 晴れ

墳丘北側の拡張部で検出していた花崗岩コッパ面の

追加実測を行う。墳丘北西の内区列石の浮かし掘り作業。13時より、報道関係者来跡（第53図）。

11月6日（火） 晴れ

石室内床面東半部の腐植土を掘削。腐植土中にも竜山石が混じっていることから、竜山石片の置かれた時期を再考する必要が出てきた。

11月7日（水） 晴れ

午後より、和田晴吾氏（立命館大学教授）来跡。旭塚古墳の構造的特長と畿内での位置付け、本遺跡で見られる竜山石の意義など興味深いご教示を頂いた。石室内主軸断面の実測。山本徹男氏来跡。

11月8日（木） 晴れ

Aトレンチ、溝201（周濠状遺構）のセクション断面A・Bの土層断面実測。墳丘西側の周濠確認トレンチの掘削を行う。ユニットハウス前にて、碎石の隙間からキラリと輝くものが目に入り、採取して手にとってみると、耳環であった。7世紀に入る手法に気がつく。遺存状態は良好である。すぐに三条事務所へ持ち帰り、応急的なクリーニングを行った。藤川氏、桑原補助員来跡。

11月9日（金） 晴れ

墳丘裾南西付近に3本目のトレンチを設定した。側壁矢穴石の平面断面実測を完了した。梅原氏、西岡・山本補助員来跡。

11月12日（月） 晴れ時々雨

本日は曇りがちの天気であり、梅原章一氏による専門撮影を行った。最初に前庭部の竜山石コップ面から石室開口部付近、そして城山山頂までを入れるカットを、次に多角形を構成する羨門西側の貼石面を、最後に墳丘西部の内区列石を2方向から撮影した。石室内は降雨のためと、太陽光線の傾きから後日に見送ることとし、風景写真とした。

また、清水一文氏（高砂市教育委員会）、高原孝明氏（高砂・郷土歴史を学ぶ会・竜山石文化会）、現役の竜山石石工職人が来跡し、竜山石のコップについて、日常熟覧されている立場から検討して頂き、ご意見をもらった。市民の方も何人来跡した（第52図）。

11月13日（火） 晴れ

玄室床面にサブトレンチを設定した。腐植土より下の黄色砂質土を15cmほど下げると主軸に直交する幅30cmの溝が新たに検出された。断面は矩形を呈し、石材移動のためのコロレールの枕木据形であろうか。

墳丘奥壁に繋がる寮の建物撮影断面の実測作業。註記は明日に持ち越すこととした。

11月14日（水） 晴れ

玄室床面のサブトレンチを羨道部に延長すると、袖石付近で焼土類似の赤色を呈する土を検出した。写真・図面を取り、掘削を進めた。奥壁の裏込めが一部見える所まで掘削。寮建設時に大半を損傷していることが判った。玄室左側壁上面石材中に、彫りかけ途中

の矢穴痕を2石検出した。

11月15日（木） 晴れ

墳丘全域のデジタル測量を実施。前庭部、Aトレンチの精査。東村（魚津）純子氏、魚津知克氏・学生・研究生2名（大手前大学）、直宮憲一氏・吉田健一氏（宝塚市教育委員会）来跡。

11月16日（金） 晴れ

梅原章一氏による石室構造の写真撮影。現説前の準備・清掃と石室内実測の続行。笠栗拓氏（岡山県古代吉備文化財センター）、西谷麻衣子（奈良女子大学大学院）、渡邊邦雄氏（大阪市立高等学校教諭）来跡。

11月17日（土） 晴れ

現地説明会の当日。午前中、案内ルート、説明看板、パネル貼り、周辺調査搬入展示遺物の梱包と開梱。14時より説明会を開始した。450人を超える市民・考古学ファン・研究者が来跡した。天候も大変良かった。

11月19日（月） 晴れ

墳丘第5トレンチの断割りを開始。前庭部の遺物取り上げ。本庄補助員、市民の方2名来跡する。

11月20日（火） 晴れ

多角部分の断割りにおいて、テラス面らしきものを確認。長頸壺の体部や土師器片が多数検出され始める。基底石も整然と面をもって並んでいる。前庭西V区で検出した完形甕の立面図を仕上げた。Aトレンチの完形遺物の立面図に着手する。

11月21日（水） 晴れ

前庭部において、竜山石コップ面の広がりを探るため、セクションを取り外した。墳丘第3トレンチでは、側壁底レベルまで掘り下げた。墳丘第6トレンチの土層断面を実測。墳丘右裾テラス部で検出していた遺物を観察すると、古墳時代終末期の須恵器片や、煮沸形態の土師器把手部がみられる。石室内床面右半分の竜山石を取り上げると、竜山石のコップ面の下から須恵器片が数点出土した。築造時代に限りなく近いものであれば、破片やとり残しでも、大きな意義があるものと思われる。接合関係にも注意を払いたい。



第55図 藤原教育長現地視察風景（2009. 11. 28）

11月22日(木) 晴れ

墳丘南西部テラス面の転石を取り除き、少し見えていた土器を検出した。第6トレンチの土層断面実測。墓壇掘形ラインの検討を行うが、解釈もさまざまあって解決せず。北山峰生氏(奈良県立橿原考古学研究所)、小原補助員来跡。

11月26日(月) 晴れ

墳丘南西部テラス面の転石をさらに3石取り除き、下に広がる土器を検出した。新たに、竪3点と横板2点が完形に近い状態で出土した。Aトレンチの社宅の工事掘形に則する東西トレンチの土層註記を完了した。竜山石コップ面の実測を継続。梅原章一氏来跡。

11月27日(火) 晴れ

前庭部竜山石散布面の精査と追加実測。梅原氏による専門撮影。市民4名、見学のため来跡。

11月28日(水) 晴れ

前庭部竜山石散布面の石出し清掃と、追加実測。右墳丘裾部テラス面の遺物検出作業。山本氏による遺跡記録とビデオ撮影。藤原教育長、松本部長、川崎次長来跡。新しく加わった所見について説明する。

11月29日(木) 晴れ

前庭部のセクションベルトの除去。石室主軸ラインの土層断面を追加実測。本市文化財審議会現場視察。横田真吾氏(宇治市歴史資料館)来跡。

11月30日(金) 晴れ

補足調査に必要な器材を残し、撤収作業を行う。前庭部遺物出土状況平面図の作成。石室主軸ラインの土

層断面実測を継続する。寺前直人氏(大阪大学)・同行学生(神戸女学院大学)来跡。

12月3日(月) 雨のち晴れ

午前中、三条整理事務所にて図面整理。本日から、補足的な調査に入る。墳丘南西部テラス面出土土器の追加実測。柴畑光博氏他職員1名(宮崎県都市教育委員会)来跡。

12月4日(火) 晴れ

墳丘南西部テラス面出土土器の取り上げ作業を開始。土器には個々にナンバーを付して収納した。石室床下胴木の痕跡の再精査。前庭部コップ面の石材の取り上げ。Aトレンチの埋め戻しを開始した。山本徹男氏、ほか1名来跡。

12月5日(水) 晴れ

石室主軸ラインの補足実測。前庭部十字セクションの土層断面図作成。西川氏(中村石材)、藤川氏来跡。

12月6日(木) 晴れ

前庭部十字セクションの実測を続ける。石室内東西ラインの測図を行う。

12月7日(金) 晴れ

前庭部主軸ラインの土層断面実測。墳丘西裾部の西壁土層断面図を作成。市民4名見学のため、来跡。

12月10日(月) 晴れ

補足実測、図面の最終チェックを完了し、すべての調査備品を三条整理事務所に撤収し、発掘調査を完了した。(坂田)

②城大調査区Aトレンチの調査概要

トレンチの設定と概観 Aトレンチは、前項で記述したように、事業地北部から旭塚古墳東端に向けての斜面造成地に短辺13m×長辺32mの矩形の調査区をあらためて設定した。標高はT.P.+77~86mを測る緩斜面である。第1次確認調査(第34図)のトレンチ1の遺物出土地点と、9・10トレンチを内包している。旭成社宅建設計時の地形改変と解体時に生じた造成段差が現状で4段ほどみられ、記述の便宜上、調査区を細分して「北から1段目」「北から2段目」…、あるいは「上段」「下段」…などと呼称することがある(第49・50図)。

Aトレンチ検出の遺構を集約すると、北から4段目、旭塚古墳北側とはほぼ同レベルのエリア、旭塚古墳奥壁から北東へ20m隔たった所で子持器台や土器器杯を含む土器溜りを検出した。これを土器溜りAと呼称する。また、その下層レベルにおいて、完形の土師器甕1点、須恵器平瓶1点を伴う円弧を描く溝状遺構を検出した。これらの遺構は南に偏在して分布し、北半では須恵器片を少量含む流出遺物包含層が確認されるに留まった(第56~62図、図版5~11)。

基本層序 本調査区の層序は、トレンチ壁面の高低差を反映した北東壁土層断面を基本とし、北壁や拡張部北西壁との照合を行い、互いの整合性を確認した。T.P.+77~86mの約10mに及ぶ落差がみられ、水平方向には約30mかけて下がる緩斜面である。上記したように、造成段差による地形の急激な下降が認められるものの、現地表から1~2m程の造成土や盛土を除去すると、城山の山麓裾であることを実感できる斜面堆積層を確認し得た。自然の堆積状況を観察できる最も新しい時期の堆積層が、華大~牛頭大の風化花崗岩礫を含む黄褐色凝結じり粗粒砂の3層であり、北域では下層確認トレンチ最深層である13層に至るまで人為的な痕跡は見られない。しかし、4・9・10・11層の各層上位が土壌化しており、土地全体に一定期間の開放状態を断続的に生じさせながら堆積のかさ上げが進んでいったことが推測される(第56~58図、図版11)。

NW

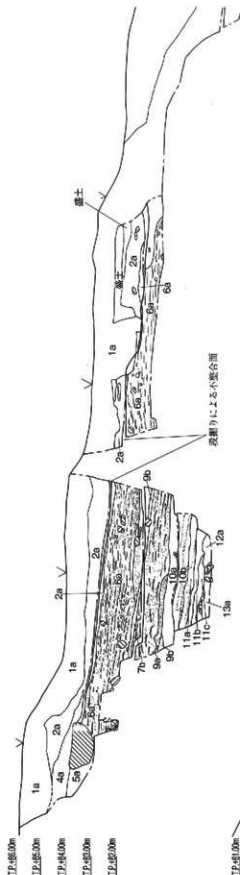
T2a45.00m

T2a45.00m

T2a45.00m

T2a45.00m

T2a45.00m



SE

T2a45.00m

T2a45.00m

T2a45.00m

T2a45.00m

T2a45.00m

T2a45.00m



- 1a 現地表層の土壌腐及び造成土。下面にアスファルトが部分的に露出する。
 2a 浅黄色礫混じり中～粗粒砂。風化底柱宅遺跡時の造成土の可能性が高い。
 3a 黄褐色礫混じり粗粒砂。準大～準大の礫を多く含む。
 3b 褐色礫混じり中～細粒砂。上位に土壌化が観察できる。
 4a 暗オリーブ色中粒砂。上位に土壌化が見られる。
 5a 浅黄色礫混じり粗粒砂。5cm以下の礫と準大の風化花崗岩を中量含む。
 6a 暗灰色～灰白色砂礫層。10cm以下の礫と粗～細粒砂から成る。
 7a 灰白色礫質粗粒砂。人頭～牛頭大の風化花崗岩を多く含む。
 7b 黄褐色礫混じりシルト質粘土。当トレンチの底層。

- 8a 自然堆積層。灰黄色砂礫と、黄褐色シルト質礫混～中粒砂の薄層が何枚も互層状に堆積する。
 9a 褐色礫混じりシルト質中粒砂。上位が土壌化する。
 9b 上部に黄褐色礫混じり中粒砂。中に粗粒砂のツミが見られる。
 10a 上部に黄褐色礫混じり粗粒砂。上位が土壌化する。
 10b 灰黄色砂礫。3cm以下の礫と粗粒砂から成る。
 11a 灰黄色シルト混じり粗～細粒砂。上位が土壌化する。下位で湧水が確認できる。
 11b オリーブ黄色中粒砂。
 11c 暗灰色シルト質中粒砂。大礫層群を母材とする粘土が極少量混入する。
 12a 灰黄色礫砂礫混じり粗。自然堆積層。大礫層群（灰白色粘土）を母材とする30cm大のプロックを含む。
 13a 上部に黄褐色砂礫。最深部は礫層。30cm大の礫（花崗岩）と粗粒砂から成る。湧水層。

第56図 A トレンチ 北東型土層断面図 1/150

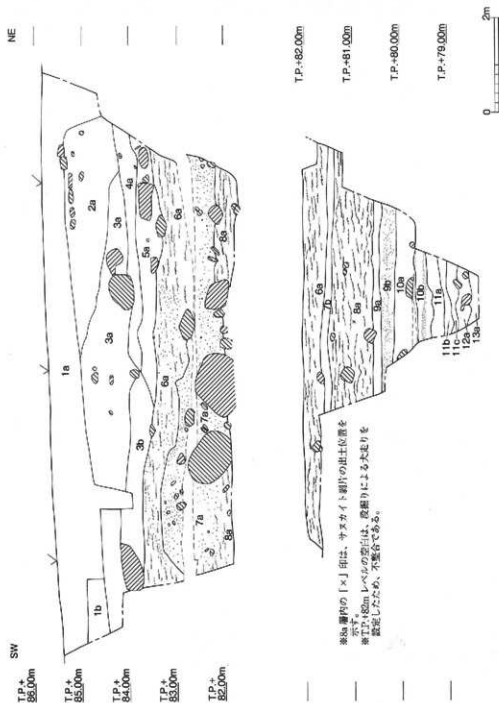


6a層にみる互層地構層



6a~8a層の互層地構層

互層地構状況写真



第57図 Aトレンチ 北西壁土層断面図 1/80

一方、南半域で検出した土器溜りAや円弧状の溝は基本層序の6層と対応し、本敷地全体でみた旭塚古墳の造営開始層位と合致する。土器溜りAと溝は、層位的にみると厳密には若干の時期差を有した形で検出しているが、土器溜りAを構成する特徴的な遺物である子持器台本体部と接合関係を保つ破片が、造成時に二次的に移動堆積したとみられる土層内にも混入しており、造成時の削平レベルと6層の境界が曖昧な箇所もあって、両遺構の先後関係の詰めは層位的にみて盤石を期するものではない。

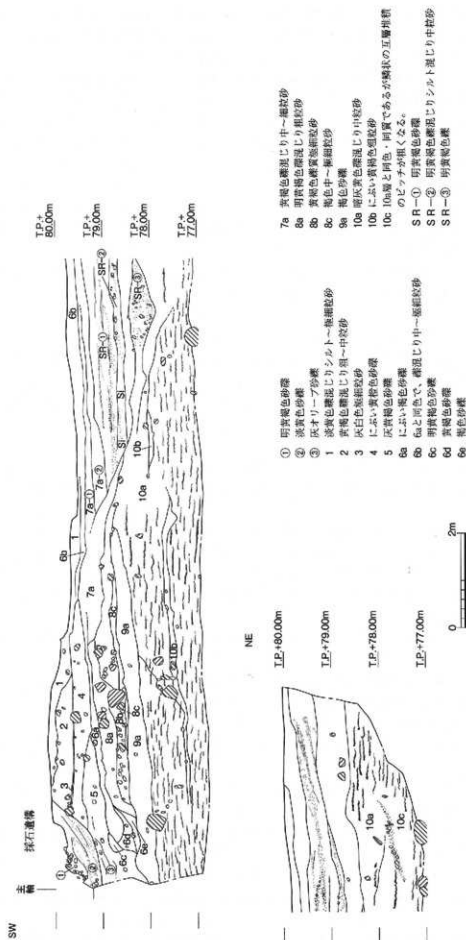
次いで、旭塚古墳の墳丘構築技術と関連することで最も重要な手懸りを与えてくれたのは、当トレンチの6層以下で確認した縮状の厚い互層堆積である。調査時において、「鱗」状とも形容、呼称していた厚い自然堆積層であり、局所的に観察すれば、厳密な版築層と見紛う性状を有している。この縮状の互層堆積については、6・8層で顕著に観察でき、8層は6層に比べ互層のピッチが粗くなる傾向が認められる。後述するが、旭塚古墳の墳丘地山削り出しの核とも言うべき堆積層は、このうちピッチの細かい6層が主体となっている。

さらにもう一点指摘しておくが、本地点周辺で確認される無遺物層（地山層）は、300数十万年前の生成年代を上限とする大阪層群の隆起層や、25～15万年前に六甲山南斜面に再堆積した花崗岩を母材とする段丘礫層の特徴が認められる。11・12層では大阪層群を起源とする灰白色粘土のブロックが観察され、6・7層の方は後者の段丘礫層を母材としている。

以下には、Aトレンチの壁面土層の観察結果の要点を記す。断面実測図に用いた土層番号の呼称方法や表現方法は、第1次確認調査における各トレンチの概要に準じている（第56～58図）。

Aトレンチ北東・北西壁土層観察記録

- 1a 現地表面を含む造成盛土。下面にアスファルトが部分的に遺存する。コンクリート・ガラを含む。須恵器片・土師器片を包含する。
- 2a 旭化成社宅建設時の造成土の可能性が高い。浅黄色（2.5Y7/3）礫混じり中～粗粒砂。20cm大の礫少量と3～10mm大の礫を多く含む。
- 3a 斜面地の経年堆積層。南西に下る傾斜を持ち、谷地形の埋積土か。黄褐色（2.5Y5/6）礫混じり粗粒砂。拳大～牛頭大の礫を多く含む。須恵器片・土師器片を含む。
- 3b 上位に土壌化が観察できる。3a層と3b層間に一定の開放期間があったと思われる。褐色（10YR4/4）礫混じり中～細粒砂。礫の粒度は3a層と同じ。
- 4a 上位に土壌化が見られる。比較的安定した堆積層であり、南西に緩やかに下る。暗オリーブ色（5Y4/3）中粒砂。2mm大の礫を少量含む。
- 5a 浅黄色（2.5Y7/4）礫混じり粗粒砂。5mm大の礫と拳大の風化花崗岩を中量含む。
- 6a 垂直断面では層厚1cmの薄層が縮状もしくは鱗状に累重する。暗灰黄色（2.5Y4/2）と灰白色（5Y7/1）の混色砂礫層。10cm大の礫を少量と粗～細粒砂から成る。植物遺体と炭化物チップが散見される。南域の遺構層位属。
- 7a 灰白色（7.5Y8/2）礫質粗粒砂。人頭～牛頭大の風化花崗岩を多く含む。段丘礫層を起源とする。
- 7b 黄褐色（10YR5/6）礫混じりシルト質粘土。2mm以下の細礫を含む。植物遺体が散見される。比較的安定した堆積層。当トレンチ全体の壁層。
- 8a 自然堆積層。灰黄色（2.5Y6/2）砂礫と、黄褐色（10YR5/6）シルト質極細～中粒砂の薄層が何枚も互層状に堆積する。垂直断面が縮目状もしくは鱗状に見え、当トレンチ内では、6a層でも同様の堆積構造を持っており、堆積環境が近似している。植物遺体が散見される。サヌカイト剥片を1点検出した。
- 9a 上位が土壌化する。褐灰色（10YR5/1）礫混じりシルト質中粒砂。5mm以下の礫と炭化物チップを含む。
- 9b におい黄棕色（10YR6/3）礫混じり中粒砂。5～10mm大の礫を含む。中位に粗粒砂のラミナが見られる。
- 10a 上位が土壌化する。におい褐色（7.5YR5/4）礫混じり極細粒砂。土の締まりが良好。比較的安定した堆積層。上位に炭化物チップが散見される。
- 10b 灰黄色（2.5Y6/2）砂礫。3cm以下の礫と粗粒砂から成る。中位にラミナが観察できる。
- 11a 上位が土壌化する。暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト混じり細～粗粒砂。炭化物チップが少量観察できる。下位で湧水が確認できる。
- 11b オリーブ黄色（5Y6/3）中粒砂。やや含水率が高い。



第58図 A トレンチ掘張部 北西壁土層断面図 1/80

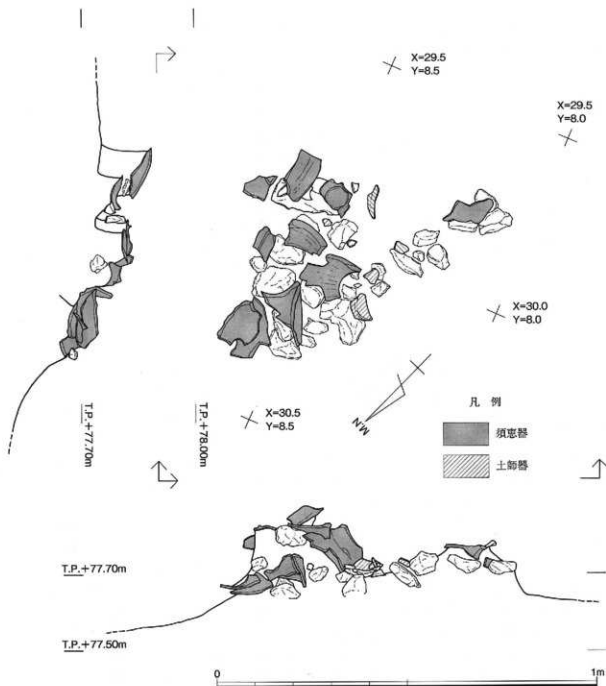
- 11c 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) シルト質中粒砂。やや粘性を持つ。大阪層群を母材とする粘土が極少量混入する。
- 12a 自然堆積層。灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂礫混じり泥。3mm以下の礫と中粒砂を含む。大阪層群 (灰白色粘土) を母材とする30cm大のブロックを含む。準大の風化花崗岩を少量含む。

13a 最深確認層。にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 砂礫。30cm大の礫 (花崗岩) と極粗粒砂から成る。湧水層。

拡張部北西壁土層断面について Aトレンチを拡張した当壁面は、旭塚古墳の奥壁をかすめ、墳丘北東部に建っていた旧築物の基礎掘形である。Aトレンチを横断する配置で、南西から北東に長軸を持つ。地形変化のコンタインに平行することから、傾斜に沿った北東壁土層断面では判り難かった微小隆起や微支尾根、谷筋、谷埋め堆積などが明瞭に観察できる点で有効である。当断面図のSR①～③などが谷筋に相当し、旭塚古墳はこの谷筋からみた右岸 (西肩部) に立地し、換言すれば、墳丘はAトレンチ北端の方から派生する微支尾根状地形の先端部に構築されていることが理解される。以下に土層観察結果を要記するが、基本層序である北壁土層と層名が対応していないため、広域対比可能な鍵層を中心に基本層序も併記する (第50・56～58、図版11)。

拡張部北西壁土層観察記録

- ① 近世に帰属する花崗岩コッパ溜り。明黄褐色 (2.5Y 6/6) 砂礫。5mm以下の礫と中粒砂から成る。
- ② 淡黄色 (2.5Y 8/4) 砂礫。下位に5～10mm大の礫を含み、奥壁に向かって下る。上～中位は①層と同質である。
- ③ 採石土坑もしくは廃棄土坑の掘形埋土。灰オリーブ (5Y 6/2) 砂礫。5mm以下の礫と中粒砂から成る。極細粒砂～シルトの薄層が入る。コッパは近世初頭に帰属するが、当掘形への廃棄年代は近代に下る可能性も考えられる。
- 1 淡黄色 (2.5Y 8/4) 礫混じりシルト～極細粒砂。Aトレンチ拡張部で広範囲に観察され、須臾器片・土師器片が散見される。墳丘構築以降の堆積土。
- 2 黄褐色 (2.5Y 5/3) 礫混じり粗～中粒砂。
- 3 灰白色 (2.5Y 8/1) 極細粒砂。墳丘構築以降の整地面である。
- 4 にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 砂礫。10mm以下の礫と粗粒砂から成る。古墳時代の土壌層を被覆する層。人為的な埋積土。
- 5 灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂礫。3mm以下の礫と粗粒砂から成る。ラミナは観察できない。極少量の風化花崗岩 (10mm以下) を含む。4層と同様に、古墳時代の土壌層を被覆する層。
- 6a にぶい褐色 (7.5YR 5/4) 砂礫。基本層序6a層に対応する。墳丘構築時の地表面。上位に土壌化が観察でき、墳丘に向かって緩やかな傾斜が見られる。局所的に鱗状の互層堆積が見られる。上面が土器溜りAや円弧状の溝に対応する面。
- 6b 6aと同色で、礫混じり中～極細粒砂。2～10mm大の礫を多く含み、後世の植生によって堆積構造が崩れている。
- 6c 明黄褐色 (10YR 6/6) 砂礫。6a層を母材としたブロック土。
- 6d 黄褐色 (10YR 5/6) 砂礫。6a層の変移層で、6a層と比べて準大の礫を含まない。
- 6e 褐色 (10YR 4/6) 砂礫。6a層の変移層で、8a層の落ち込みに貼り付くように堆積する。
- 7a 黄褐色 (10YR 5/6) 礫混じり中～細粒砂。10mm以下の礫を中量含む。準大の礫が散見される。水分含有量並。
- 8a 明黄褐色 (10YR 6/8) 礫混じり粗粒砂。5mm以下の礫を多く含み、15～30cm大の礫を少量含む。6a層と比べて粗い互層を成すが、局所的にビッチが細かい鱗状の堆積が観察できる。
- 8b 黄褐色 (10YR 5/6) 礫質極細粒砂。高密度に巨礫や大礫を包含する。一過性の洪水堆積が観察できる。粒度に逆級化が見られる。
- 8c 褐色 (10YR 4/6) 中～極細粒砂。東を流下する流路のオーバーフローしたもの。
- 9a 褐色 (10YR 4/4) 砂礫。細礫と中粒砂の互層。南に傾斜する10a層に沿って累重する自然堆積層。鱗状に堆積する。
- 10a 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 礫混じり中粒砂。2～5mm大の礫と中粒砂から成る。鱗状の互層堆積でビッチは細かい。



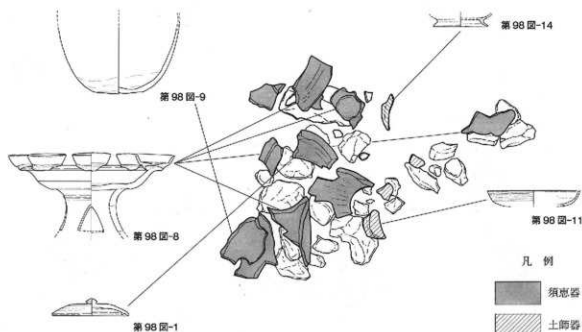
10b ぶい黄褐色(10YR 4/3)粗粒砂。やや粘性を帯びる。鱗状の互層堆積が一時休止し、土壌化が進行したと考えられる。

10c 10a層と同色・同質であるが、鱗状の互層堆積のピッチがかなり粗くなる。すなわち、互層を構成する礫と中粒砂一単位の各層厚が増す。

SR-① 明黄褐色(2.5Y 7/6)砂礫。10mm以下の礫と粗粒砂から成る。流水堆積層。一定間隔で、シルト質中粒砂・シルト質細粒砂が観察でき、流量の変化が看取される。

SR-② 明黄褐色(10YR 6/6)礫混じりシルト混じり中粒砂。一時期開放状態になったと考えられ、土壌の形成が観察できる。

SR-③ 明黄褐色(10YR 6/8)礫。下に凸の河道中心部を充填し、10cm大の亜角礫が高密度に堆積する。



第60図 Aトレンチ 土器溜りA 土器出土状況 1/10 遺物 1/4

土器溜りA 基本層序の6層上面に帰属する。旭塚古墳の石室奥壁から北東へ約20mの地点(座標X=8m、Y=30m)で検出した。検出レベルはT.P.+77.9mを測り、遺構自体の遺存状態は悪い(第59・60図、図版8)。先述したが、旧建物掘形の間に相当し、造成土を除去すると、すぐに一面に遺物片が出土し始める状況であった。動きの著しい付近の造成土に包含される遺物とこの土器溜りの遺物が接合関係を持つなど、遺構上部が削平や移動を受けていることは明白であり、第59図に示したように鳥状に浮かせて発掘を進めたため、把握した土器群が本来の遺構の形状(原形)を保っていると考えられるには躊躇を覚える。平面・断面の精査では、いずれにおいてもこの土器群を包蔵する土坑状の掘り込みなど遺構の掘形を確認することはできなかった。しかし、出土遺物の破断面の風化度合いから、無意識な現代の造成による破壊とは考え難く、削平を受ける前から、意図的に破砕されていたことが窺える土器が目につく(巻頭図版8、第98図)。

第59・60図をみて明らかのように、溜りと認識した土器群は、東西60cm、南北80cmの広がりをもせ、垂直方向には25cm程度の落差をみせる。出土状況を観察すると、圧倒的比率で須恵器片が多く、土師器片は数%に過ぎない印象を持ったが、須恵器片が子持器台という特殊な大型品を構成するものであることを勘案すれば、至極当然のことであり、個体数でカウントした場合には、両者は同等数であったことも考え得る。第V章第4節で詳述するが、当遺構では、この他に、須恵器の杯・壺や土師器の杯・皿類が出土している(第98図、図版33~35・38・39)。

さらに、注視しておきたいことは、これら土器群に混じって準大程度の花崗岩が土器溜りの下、もしくは土器片の隙間から20個前後出土している。帰属層位である6層が花崗岩礫を全く包含していないわけではないが、明らかに石材の高密度が窺える。墳丘前庭部や古墳の墳頂並びに周辺で土器を破砕する祭祀行為は普遍的に存在するが、子持器台などもその対象とするのか、多数の花崗岩礫は何を意味するのかなど不明な点が多い(第60図)。

遺構の帰属時期は、旭塚古墳の築造時期と同時期か、その直後と考えられよう。

円弧状の溝201 基本層序6層中位まで掘り進めると、円弧状に巡る溝を検出した(第61図)。これを全周しないという想定から、溝201と呼んでおく。旭塚古墳奥壁から北東に25m(座標X=30、Y=10)付近に位置する。幅は0.8~1.3mと広狭がみられるが、深さは0.4m程である。断面形状は逆台形か碗形を呈し、やや南寄りの下方に最深部が偏る。検出レベルはT.P.+79.7~79.9mを測る。レベルの数値では、土器溜りAと同レベルであるが、層位的には6層の上面ではなく、6層の中程になる。遺構構築面をサブトレンチA・B断面双方で検討す

ると、固有層名1・4・5層以上から構築されていることは明らかで、本案の肩が造成や削平による損壊を受けていることが判る。

溝の土は4層に細分でき(①～④)、黄色系の細粒砂～中粒砂を主体とする。

検出した溝が全周すると想定した場合、円弧から推測される径は約16mで、全体の1/6程度が遺存しているものと考えられる。求心部分の遺構や北側の溝の延長部分の検出に努め、幾度となくサブトレンチを抜いて精査を試みたが、墓堀掘形も北側の溝の残存部も何ら検出されなかった。溝の北側延長部分が削平を受けたと考えても、墓堀掘形まで消失することは層位とレベルからは整合がとれず、当遺構の性格について、検出状況のみから古墳周溝と推定することは難しいように思われる。

しかし、その機能の一端については、完形土器を伴っていた点からの類推が許されよう。特記すべき完形土器2点の出土状況は、旭塚古墳に付随する儀礼・祭祀を伴う特殊遺構の様相を窺がわせる(第62図、図版9・10)。平面・立面の検出状況を詳細に観察すると、溝の内側肩近くで土師器の甕1点と、須恵器の平瓶1点が口縁部を上に向け、正置した状態で出土した。両者は土圧による亀裂および破損が認められるものの、個体としての遺存率は高く、完形に近い姿で埋置されたものとみられる。個体の詳細な観察は後述するが(V-4、第99図)、須恵器の平瓶は焼成時点で焼歪みかなり生じたものを敢えて使用している感がある。一方、土師器の甕は、略直方体を呈する65cm×25cm×30cmの花崗岩にもたれ掛かる様に据え置かれていた。この花崗岩には人為的加工痕はみられない。埴輪層の性格・性質もあるが、両土器の埋置には、平面・断面のいずれにおいても掘形が全く確認できなかった。口縁部を上に向けて正置している状況から、土坑を掘って据え置くことが想像し得るが、幾度となく精査しても、掘形のラインとすべき土質の変化部分は検出できなかった。結果として、現段階ではこの2点の土器を開放状態にあった溝201に伴う供献土器として扱い、報告することとした(巻頭図版9・10)。

溝の周辺では、ササキト製石礫(第109図1)や土師器片が出土している。いずれも遊離遺物とみてよい。

③旭塚古墳の墳丘・石室確認調査

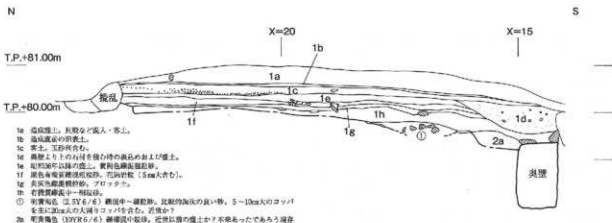
墳丘トレンチの概要 原形や外部施設の判然としない墳丘には、計6本のトレンチを順次設定し、石室や墳丘盛土の構築過程や後世の改変状況を把握した。本墳は既存建物(旭化成社)の基礎工事によって、北東の一角およそ1/4が破壊されており、遺存の想定される部分に墳丘を断断するトレンチを3本(第1～3トレンチ)、墳丘裾部のみし上部盛土のみ掘削し、墳丘内列石を検出したトレンチが3本(第4～6トレンチ)、土層断面を3ヶ所(セクションA～C)設定、精査した。また、開口部やや西寄りでは、昭和36年に京都大学考古学研究室(調査者 小林行雄氏)により既に確認されていた外護列石を追認すべく再掘削したところ、貼石風の新たな外護列石と共に未確認の夥しい量の土器を副えるテラス面を検出した(第72・73図、図版21～25)。

前庭部に設けた調査区では、竜山石の加工作業などを伴う敷布面を確認した。本墳の立地する西摂地域の大甲山地前山では、花崗岩もしくは花崗斑岩、花崗閃緑岩などが石材利用の主体であり、竜山石を産出する播磨地域とは地質構造が異なることから判断すると、前庭部で検出された竜山石敷布面がこの時期、非常に特殊な理由でもって構築されていることが窺える(図版26～30、巻頭図版11)。

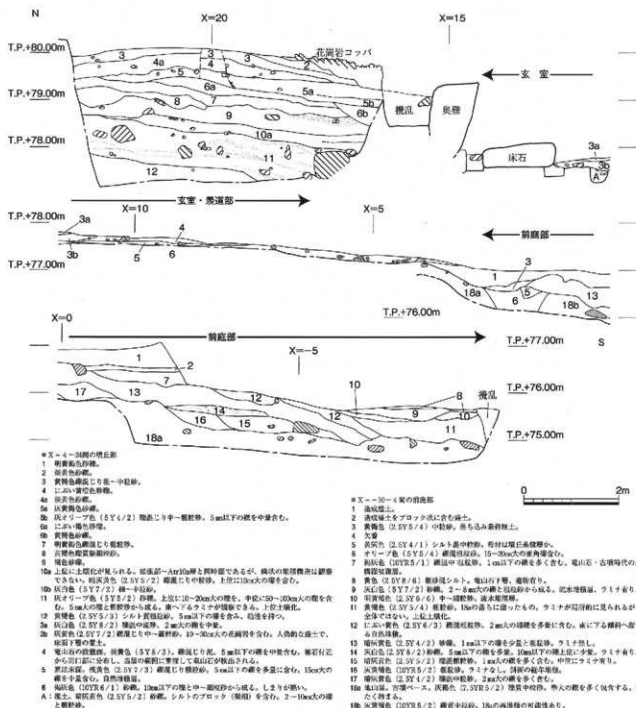
石室の床面に設定したトレンチは、向後の床面施設の保存を最大限考慮し、主軸ラインから西に30cmの幅に限った深部掘削に留めた。このトレンチでは、玄室において石室主軸に直交するよう掘削された溝状の掘形を検出した。石室壁体には巨石を傾用しており、且つ墓堀掘形が深く腰高な構造であることから考えて、この溝は開口部から石室石材を運び入れるために敷かれたコロレールの綱木据え付け痕である可能性を考えてみた。

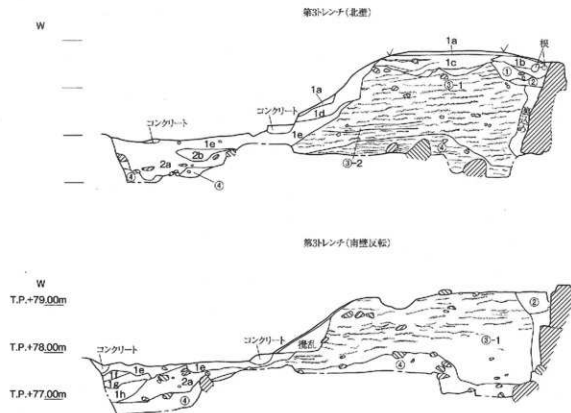
以下では、古墳の部位に即しつつ項目を掲げて所見を詳述する(図版12～31)。

墳丘構造 本墳の墳丘構造を知る上で必要な地質的環境について、先ず述べておきたい。旭塚古墳は、城山山麓斜面の微凸谷地形を埋積したラミナが顕著な河成堆積物上に立地し、墳丘自体は微隆起もしくは小尾根が舌状に細く張り出した頂部に位置する。背面側と周囲を掘り下げ残核状のコアマウンドを造り出し、これを墳丘基盤として、さらに上部に墳丘盛土を施したと考えられる。墳丘背面はこうした地形をカットして整形を施したと考えられるが、敷地内の道路面の位置やレベルにおいて重複しており、既に明確さを欠いている。第66図第5トレンチ北壁の墳丘裾部の③層上面がこの地形整形と関与するとみて大過ない。墳丘上部は削平を受けているため、明確な墳丘盛土が観察できる箇所が少なく、墳丘構築過程の段階的な嵩上げの単位にまで詳細について言及することはできない(第63～67図、図版12～15)。



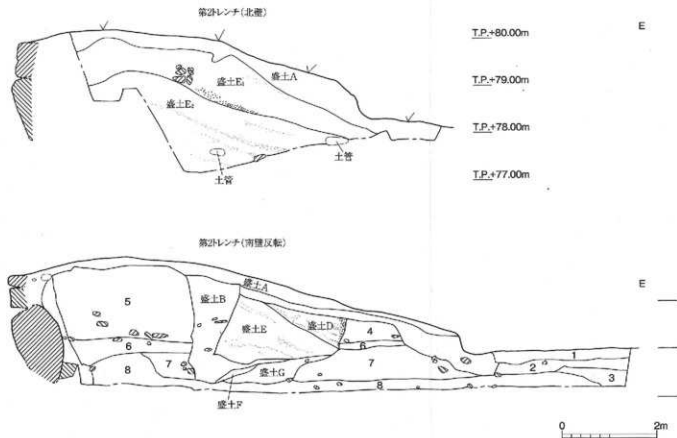
第63図 第1トレンチ 主軸ラインより西へ30~60cm 西壁土層断面図 1/80





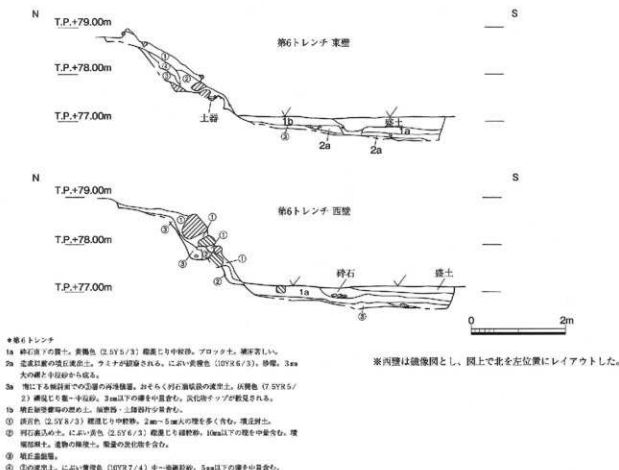
※第3トレンチ北壁

- 1a 腐植土。
- 1b フェンス形状。
- 1c フェンス形状。
- 1d 腐植土。盛土。石垣表込め。
- 1e 灰黄色 (2.5Y 6/2) 礫混じり中粒砂。砕石下層の腐土。5 cm未満の礫を中量含む。
- 1f 灰色 (5Y 5/1) 礫混じり粗粒砂。砕石下層の腐土。1 cm未満の礫を多量含む。
- 1g 灰青褐色 (10YR 5/2) 中粒砂。10 cm以下の礫を少量含む。
- 1h オリーブ色 (5Y 4/2) 砂礫。3 cm未満の粗粒砂から成るブロック土。
- 2a 墳丘流出土。③層を母材とする。にぶい黄褐色 (10YR 6/4)。砂礫。3 mm大の礫と中一極細粒砂から成る。20 cm大の三角礫を少量含む。
- 2b 墳丘流出土。灰黄色 (2.5Y 6/2) 中粒砂。10 cm大の花崗岩礫を少量含む。墳丘に向かって下るツミナが観察できる。
- ① 墓坑形状。①を母材とし、右側壁に向かって若干下る。作業単位がある。にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 礫混じりシルト混じり中粒砂。5 mm以下の礫を多く含む。
- ② 墓坑形状。①を母材とする。にぶい黄褐色 (10YR 5/4)。礫混じり中一極細粒砂。5 mm以下の礫を多く含む。
- ③-1 墳丘基盤層。炭化物チップが散見される。
- ③-2 墳丘基盤層。一定期間の埋没状態が推定される。褐色と灰白色から成る。塊状の堆積は観察できる。第2トレンチに対応する土壌層がある。遺物は含まない。
- ④ にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 雑質礫混じり中粒砂。50~80 cm大の礫を包含し、2 mm大の細礫を中量含む。上位に塊状の堆積が観察できる。右室内墓坑底面に対応する。



※第2トレンチ南壁

- 1 造成土。バラスを含む。
 - 2 墳丘外自然堆積層。二次的に移動した遺物が混入する。にぶい黄褐色 (10YR 7/4)。砂礫。2 mm大の礫と中一極細粒砂から成る。
 - 3 8の層に覆まる自然堆積層。浅黄色 (2.5Y 7/3) 礫混じり細粒砂。10 cm以下の礫を中量含む。Fe2+含有。
 - 4 墳丘盛土。5層を母材とする人為的な盛土と思われる。褐色 (10YR 6/1) 砂礫。5 mm以下の礫と中粒砂から成る。
 - 5 土質。土色は10a層に対応する。墳丘基盤層。にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 礫混じりシルト混じり中粒砂と灰白色 (2.5Y 7/1) 細一極細粒砂が厚さ2~4 cm程度で、互層状に断続する。
 - 6 土壌層。堆積構造は、5・7層と変わらない。粘性が増し、開放期間があった事が予測できる。当層により、5~7層が人為的な墳丘盛土ではないと判断できた。5層を構成するにぶい黄褐色土の層厚だけが、6~10 cmに増す。
 - 7 堆積構造は、5・6層と変わらない。互層のピッチは、5層に比較して粗くなる。10c層と類似する。
 - 8 オリーブ黄色 (5Y 6/3) 礫混じり中一極細砂。墳丘断面傾斜堆積。10~80 cm大の礫を中量含む。右室内墓坑底面に対応する。
- ※ 盛土A~Gは、杜宅の解体盛土である。
- ※ 南壁は鏡像図とし、図上で西を左位置にレイアウトした。



第67図 第6トレンチ東壁(上)・西壁(下)土層断面図 1/80

しかし、墳丘北西部は基盤層との境界付近に内区列石を意図的に2〜3重に巡らせる部分が確認されており(付図参照、図版12・13・15)、この列石をもって上部が人為的な墳丘盛土をなし、封土と認識できること、下部が残核状に削り残した自然堆積層を活かした墳丘下部のコアと判断した。

第63・64図第1トレンチ土層断面図・主軸ライン土層断面図の10層以下が下部の自然堆積層とみられる。ただし、奥壁の後背部分には近世に帰属する採石遺構が構築されており、墳丘下部上面が良好に残っているわけではない。第65図第2・3トレンチ土層断面図における所見をみてみよう。北壁は解体建物の掘形内に入っており、造成盛土であるが、南壁に認められる第3トレンチ・③〜1層・④層や、第2トレンチ5層以下などが、溝状の堆積様相を顕著にみせる自然堆積層である。これらシルトとシルト質粘土〜細粒砂の互層は一見すると、終末期古墳特有の版築による築成封土と見紛うぐらゐ類似するが、人為的な性格のものではないことは、Aトレンチの各セクションとの層序比較や観察などから確信を持つに至った所見である(図版14・15)。

また、先述したように、京都大学考古学研究室による過去の調査によって、墳形が円墳ではないことは既に指摘されていたが、今回の調査では、新たに検出した西前面貼石やその基底列石の交角の検討から多角形墳になることが判明した。この貼石に関しては、当項目内で見出しを掲げ、別途後述する。

石室構造 巨石墳として知られる本墳の石室は、現状では天井石のすべてと、奥壁の上段、側壁の一部を失っている。昭和36年の調査時にはこれらの石材は既になく、奥壁に接する右側壁2段目や左側壁奥から5石目に相当する2段目の石材上面に、徳川大坂城東六甲採石場に伴う元和・寛永期(17世紀初頭)の欠穴列が確認できることから、近世初頭には既に天井石を欠いていたことが判明している(巻頭図版4・5、図版16・17)。

石室の平面プランは、擬型を呈して開口する退化の進んだ両袖式で、奥から3石目と4石目の間で玄室と羨道を分けている。しかし、床面と接する根入りの部分は際だった据え付け位置の拡張による区別を見せず、4石目以降の上部をより内側に傾倒させることで玄室・羨道の空間的区別を図っている（第68～71図、図版16～20）。

石室の規模は、全長9.8m、玄室幅2.1m、玄室長4.1m、羨道幅1.6m、羨道長5.7m、玄室残存高2.1m、羨道残存高約1.5mを計測する。石材の使い方は、巨石を立位に用いることを基本とし、奥壁に接する左右側壁に見られるような内面正方形となる石材の上に2段目石材を横位に乗せるパターンが特徴としてみられ、自然石の巨石を用いた石舞台型式と切石を用いた岩山型式の中間的様相に当たる用石法の変換期を表す古墳としてもその特徴が目ざされよう。さらに、前述した墳丘構造とあいまって墓域掘形が異常に深いことに加え、奥壁直下の巨大な床石が築造当初から安定した現位置に据えられていたことが判明する。その使用法は、石佛壇との関連も窺わせる石室構築技術の一つの要素として見出すことができる（巻頭図版5、図版20）。

遺存する奥壁には、原位置を保つ側壁の高さから、さらにもう1段同規模の石材が乗せられていたと判断できるが、おそらく奥壁の裏で検出された近世採石遺構が示唆する石切作業の際に持ち出されたと考えられる。1段目奥壁の規模は高さ1.5m以上、幅1.9m以上、奥行1.1m以上の略立方体を呈し（第68～71図、図版17・20）、玄室面には平滑な剖面を採用している。この剖面が金属工具によって仕上げられたものか、花崗岩に特有な石の目に則した平滑な自然割れかは解釈が分かれるところであるが、詳細な観察で認められる腹部の凹みや彎曲、チョウナ痕が無いことから、後者の可能性が高いと判断している。なお、重量については、比重計算からおおよそ5～6tと推定されよう（巻頭図版4・5、図版16・17）。

床石が原位置を保っていることは先述したとおりであるが、1石のみ奥壁際に置かれる例は類型に乏しい。播磨・丹後・丹波および紀伊において顕著に見られる石櫓の構造では、当該位置に板石を用いた棚や台が設置される例は少数確認できるが（鳳1号墳・音羽10号墳など）、本石室の構造とは無関係であろう。この床石は発掘当初、上段奥壁の転落石の一つとも考えたが、石材の居居り面までサブトレンチを抜くことによって地山整地面が確認され、動いた形跡もみられず、原位置であることを再度確認した。本来は、同規模の石材がもう1石手前に置かれ、2石で玄室を埋め、石櫓の様に構成していたことを考えてみたが、床面における竜山石の敷布範囲や地山のレベルから、2石目が置かれていた可能性はきわめて低いとみられる。さらに、上面法量がおおよそ1.7m×1.5mという玄室奥半の平面空間を目一杯に使用したサイズの合致は、床石を石室空間に合わせたのではなく、空間自体を先行設置された床石に合わせたと考える方がより理に則している（第68図・図版20）。

次に開口部に見られる羨門立柱石について言及する。右側壁の1石が顕著な存在であり、高さ1.4m、幅1mの先端がやや尖り気味の紡錘形を呈する。石材の特徴として、中腰に割り込みを設けて、現状では人為加工を施した後補石材を噛ませ支持されている。割り込みの加工時期は今となっては不明瞭ではあるが、築造当初からあった加工痕との指摘もみられ、将来に検討を残す。いずれにせよ、羨門立柱石の長大化に関しては、播磨地域に多い傾向と考えられ、竜山石の使用とも関連して、被葬者の出自を考証する一要素として注視しておきたい。

石室床面の遺構と遺物 石室内の発掘調査は、恒久保存を前提とするため、禁殺かつ限定的に行った。床面の調査については、損壊が及ばないことや昭和36年の調査で既に床面を検出していることから、表土剥ぎは玄室・羨道の全域を対象とし、これ以下の掘削は主軸から約30cm幅に限って右側壁側についてのみ実施した。玄室の床巨石から開口部まで設定した。トレンチの掘削深度は、古墳構築前の堆積層上面までとした（第68図）。

まず、先の調査時以降に数10年堆積した有機質の高腐土を除去し、直下に広がる黄灰色砂質土の上面が当時の発掘で確認された推定床面と判断した。この上面において、注目すべきは前庭部でも確認された竜山石の石片が多数検出された。竜山石は砕片化されたものであり、10cm未満の剥片が数多く遺存していた。石室内の床面全体に竜山石剥片が計画的に敷かれていたと連断することはできないが、数の多寡はみられるものの、ほぼ全域で検出されていることを確認した。また、前庭部で検出された竜山石の使用石材と、石室内床面のそれと石片の個々に法量上の違いがみられ、前庭部の石片には、1cm大から50cm大のものまでのばらつきが見られるのに対し、石室内のそれは5cm前後の法量に集中している点でかなり意図的な選択が加えられていることが推測される。

検出面で認められる石材の全点回収に加え、掘削排出土すべてを集めて篩にかけ採取しつつ観察を進めた結果、人工的な加工痕を保持する石槽の一部などの残材的な製品片は1点も確認していない。すなわち、石室内で検出した竜山石の用途の一つとして考えられた、棺材の製作・加工や破却などの可能性は極めて薄いと見えよう。

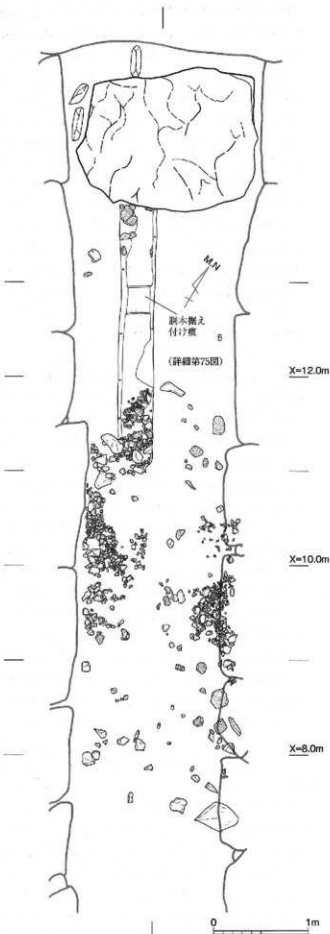
さらに、竜山石検出面からは、須恵器が数点出土した。第103図1～7に示したものであり、坏・高坏などの破片である（図版61）。追葬などを考慮すると、石室内出土遺物の帰属時期を古墳築造時期に直結させることに抵触を感じるが、いずれもTK 209～TK 217の型式幅に収まるもので、石室構造やテラス面で出土した遺物から推測される築造の年代観と比較し、大きな齟齬が生じない時期とみられる。

既に墳丘トレンチの概要でも若干触れたが、床面主軸トレンチ内で東西に横断する溝状遺構を検出した。溝はX=12.8m付近で確認し、検出レベルは、T.P.+77.75mを計測する。玄室右側壁の下端にまで入り込むように続く。幅30～40cmを測り、断面形は深い逆台形を呈し、深度は30cm前後である。底面については、意識的な平坦成形がみられず、埋土は単一層で、暗灰黄色砂礫質から成り、シルトのブロック土を若干含む。残念ながら、他の床面エリアで同様な溝が検出できなかったため、断定はできないもののコロレールの刷木堀え付け痕と推測する。その根拠は、断面矩形を呈して、方形木質部の腐植が推測できること、かなりの重量物の基礎支えが硬質の地山成形によってなされていることなどで、玄室部の石室用材と深く関係するものと思われた。

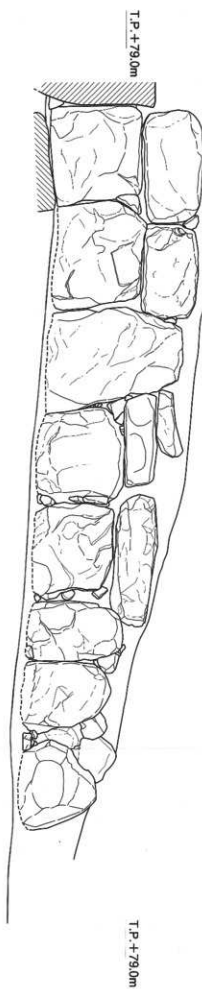
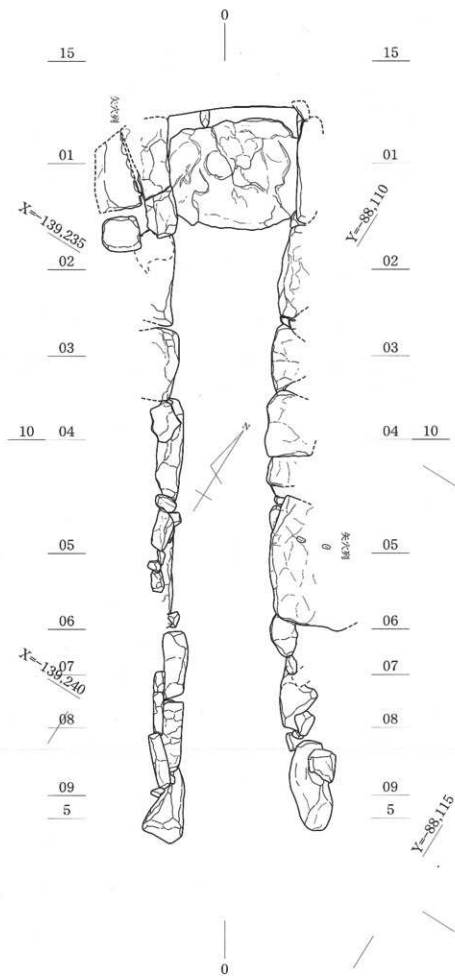
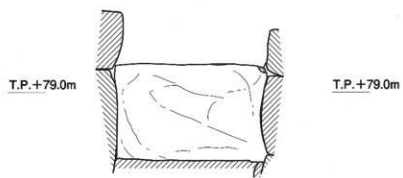
また、床面下の全面発掘を実施していないこともあって、明確な排水路は確認されず、現状ではないものと判断した。なお、昭和30年代に検出された骨片や「ベニガラを含む砂」は確認できなかった。

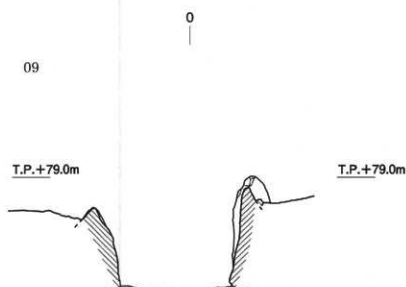
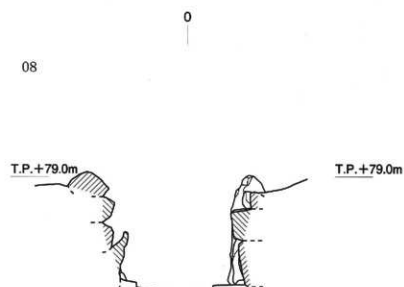
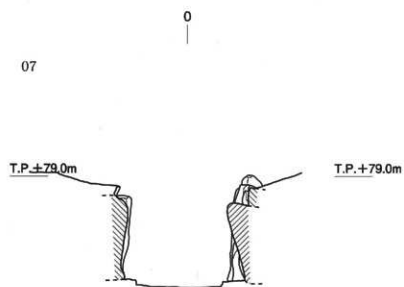
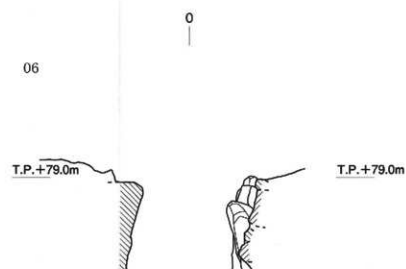
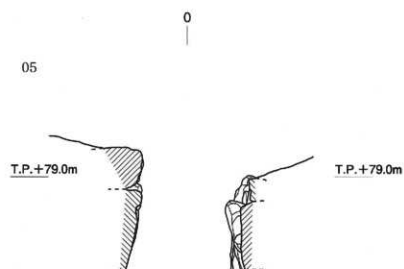
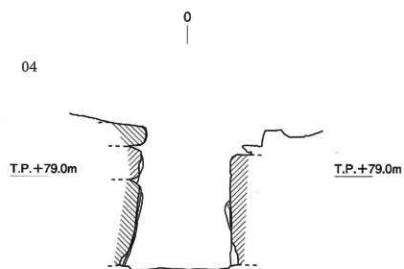
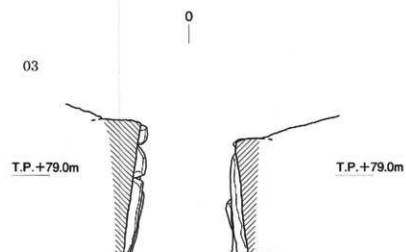
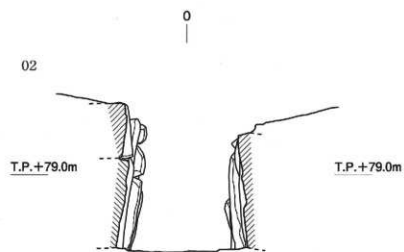
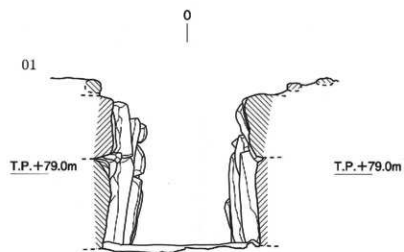
レイアウト上、第76・77図に配したが、追記として、表土である腐植土内から薬散を使ったタイムカプセルが1個出土した。中には、キャラクターがプリントされたメモ用紙が5枚と、ヒトの絵が描かれた積木状の木片が3個入っていた。3枚のメモ用紙にはそれぞれ3名分のプロフィールが記載された手書きのものと、残り1枚には本敷地内の地図が描かれていた。文面から推測すると、旭化成寮に住んでいた当時小学生くらいの女児で、内1名の引越しに際し、別れをメモリアルとしたものであることが判る。地図を見ると、敷地内の建物の配置と共に旭塚古墳の存在も描かれており、当然ながら古墳としての認識があったことが判って興味深い。1970年代後半以降に埋められたものとみられる。

外部施設 城山・三条古墳群には、外護列石を有する古墳が数基存在することが既に知られている（城山3号墳・三条5号墳など）。本墳もその内の一つであったが、この調査では、151°の交角を持つ



第68図 石室内竜山石出土状況平面図 1/40





第71図 旭塚古墳石室断面図（奥壁からの見通し図） 1/50

-7
8

-6

-5

-4

-3

-2

-1



7

6

5

4

第72図 墳丘南西部 コーナー部とテラス面 遺存状況写真 1/20

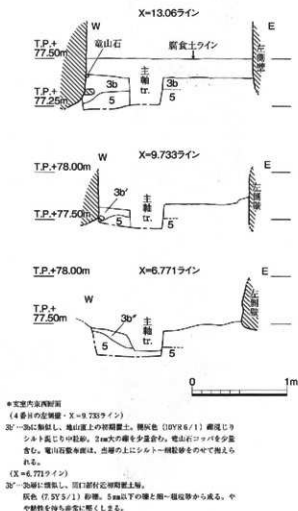
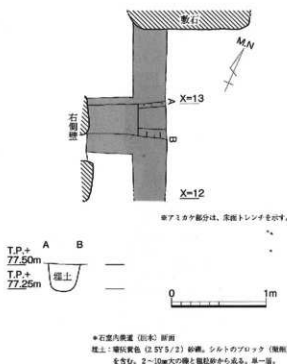
3

- 71 -

72



第73図 墳丘南西部 コーナー部とテラス面 遺存状況平面図 1/20



第76図 石室内表土出土の開封前のタイムカプセル



第77図 興味深いタイムカプセルの中身一覽

コーナー部に4~5段、高さ120cm程の貼石の遺存を確認した。葺石とは異なり、石材の平らな面を意識的に外表面に配するものであり、手の込んだ表込め造作はほとんど認められない。石材種は、黒雲母花崗岩（六甲花崗岩）・布引花崗閃緑岩・泥岩ホルンフェルス・花崗斑岩などが見られ、小振りの自然石を使用している。辺をなす外護列石の東と西を区別し、その残存長と高さを計測すると、東270cmと約120cm、西が230cmと約110cmを測る。勾配については、東西ともに65°の数値が得られる。外護列石が全周していたのか、一部だけに存在していたのかは全くもって不明ではあるが、昭和36年の調査結果も含めて考えると、開口部から西前面の範囲には確実に列石を巡らしていることが判った。

現状で基底石は50cm以上の略方形もしくは下端に安定感を持たせた石材を選択的に用いているようで、2段目以上の石材とは使用法を区別することが可能である（第72・73・79~82図、図版21・22）。

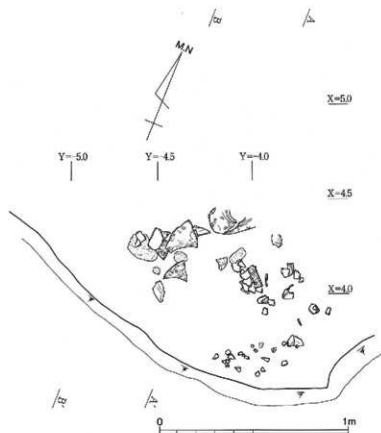
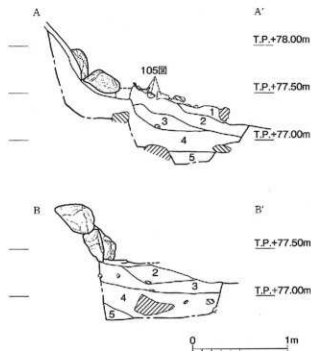
墳丘（縁）テラス面の存在と供献土器群 墳丘南西部、石積み列石による多角形部の一部を検出したエリアにおいて、裾部に意識的に造られたテラス状の遺構を検出した（第72・73図）。幅1.2m、長さ2.2mの僅かな遺存範囲であるにもかかわらず、完



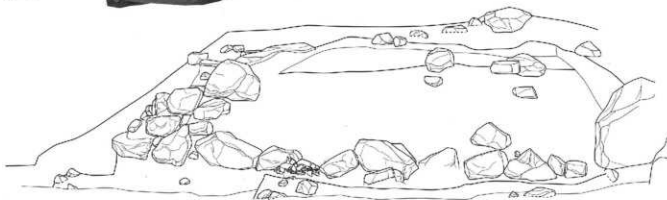
第78图 古墙正面图·写真 1/100

＊墳丘南西テラス面（列石見通し）東側

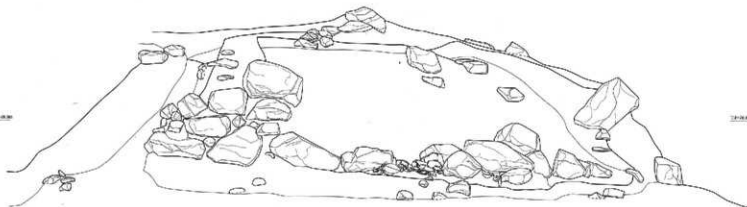
- 1 4層および2層の再堆積層、列石によって割れた土器が多く含まれる。灰色（5Y5/1）礫混中～粗粒砂。2～5mm大の礫を中量含む。
- 2 テラス機能面、上面はやや崩れている。土器群の乗る面。明黄褐色（2.5Y6/6）中粒砂。堅くしまる。人偽的造成面。
- 3 黄褐色（2.5Y5/4）礫混細～中粒砂。10mm以下の礫を少量と2mm大の礫を中量含む。テラス造成時の人偽的覆土。
- 4 墳丘基盤層。オリブ黄色（5Y6/3）礫混じり中～粗粒砂。塊状の堆積。
- 5 石室内墓室基盤層と対応する。淡黄色（2.5Y7/3）礫混じり粗粒砂。5mm以下の礫を多量に含む。15cm大の礫を中量含む。自然堆積層。



第79図 墳丘南西部テラス面検出直前の平面図 1/20・断断面図 1/40



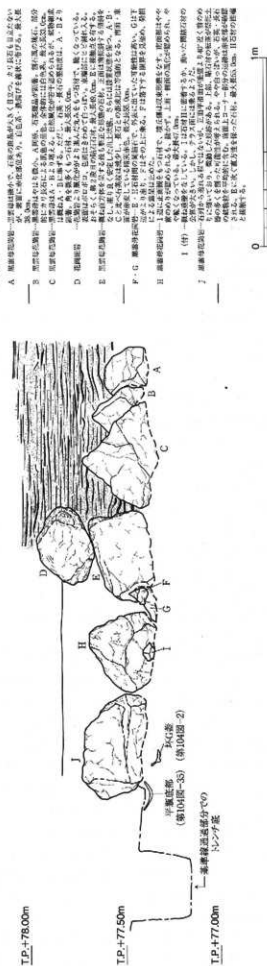
第80図 開口部西側外護列石東面 1/50



第81図 開口部西側外護列石西面 1/50



第82図 墳丘後半域前面第2辺基底石列、石列正面観 立面図 1/20



形の須恵器や土師器が数多く出土した。墳丘に改変を加える路面が敷設され、大部分が削平を被っている状況にあった。このテラスが墳丘裾に沿ってどの範囲にわたって築かれていたかは不明であるが、遺存部分の僅かな面積で土師の総個体数55点を超えることから推測すると、築造当時のテラス面には夥しい量の供献土師があったことが想像される。土師の種類と内訳は、土師器12個体・須恵器40個体を数え、器種として土師器には、甕・把手付甕（土埴）・甕など煮沸形態の土器が、須恵器には、坏・高坏・甕・長頸壺・甕・平瓶・小型埴・小型壺・横瓶などがみられる。また、甕（第104図38・39）や付付長頸壺（第104図36）が、ほぼ直立した状態、掘え付けられた態様で出土したことにより、テラス上面の土器群が葬送儀礼時の原位置を良好に保っていることが判断され、甕と埴と小型壺の組み合わせが、25cm～30cmの一定間隔を保ちながら少なくとも3セットあることが確認でき、その数や配置にも一定の意味が考えられた。

土師質の甕・鍋・瓶など煮沸機能の土器（第107図8～12）は、「黄泉戸奥」なる飲食儀礼（小林1976、寺前2006など）を想起させる遺物としても重要で、古墳時代後期の横穴式石室墳においても普遍的に見られるこうした儀礼行為が、供献土師が著しく減少する終末期に属する本墳においても、依然として採用されていたことが注目されよう（第83・84図、図版23～25）。

これまでに、城山古墳群を構成する他の古墳でも、このような土師器の甕やミニチュアの甕形土師が出土しており、群としての副葬・供献土師の特性を反映している。

前庭部の調査と検出遺構 終末期古墳特有の開口前庭部における祭祀遺構や埴壇状遺構（前庭外部施設）の存否を検討するため、比較的大い範囲を視野に入れた調査区を設定し、層位を確認しつつ掘り進めた。この前庭部は、発掘前の敷地内において路面や宅地造成による削平や盛土など、地形や地盤の改変が著しい位置に当たり、現地表面より30～40cmの墳丘層から下は、古代以前の堆積層が比較的良好に遺存していた。

墳丘裾部から約12m、石室開口部床面との比高差157cmの所で（T.P. + 75.9m）、古墳時代とみられる遺構面を検出した。このレベルでは予期もしなかった捕磨石の石材を伴う遺構面が

次々と姿を現し、甦然とした。すなわち、西側の右前庭部では、西Ⅳ・Ⅳ拡張区を中心に竜山石の剥片・砕石面が露呈し（第85～88図）、東Ⅳ・Ⅴ区では土師器・須恵器の土器片散布面を検出した（第89・90図）。いずれも、帰属層位と出土遺物から、堀坂古墳の築造時期と対応する遺構面であることを確認している。

竜山石の剥片・砕石面は、東西4.8m、南北5.0mの範囲で確認された（第85・87図）。石片は高密度に散布され、個々の大きさは、1cm以下の微小片から70cm大の大型剥片までの著しい格差が認められる。石室内の竜山石片同様、全点を回収する方針で図化した後に解体的に取り上げた。回収資料を計測した結果、大型片（16.1cm以上）が626片144,113g、中型片（2.1～16cm）が20,743片174,670g、小（2cm以下）17,013片10,806gで、総個体数38,382片、総重量329,595gを測る（第3表、巻頭図版11、図版27～30）。なお、石片には平滑面など製品加工を施した痕跡は一切みられなかった。当敷布面を構成する石片を過覧すると、中クラス以下の石片そのものの大量獲得が目的であることが推測され、石棺などの製品加工に伴って生じた剥片や砕片の残材ではないことが窺える。すなわち、遺構の性格として、石片自体の取得と利用が目的的ななされ、それに則って機能し、前庭において意識的に散布することに墓前祭祀や儀礼的意味合いを強く持たせたものとみておきたい。

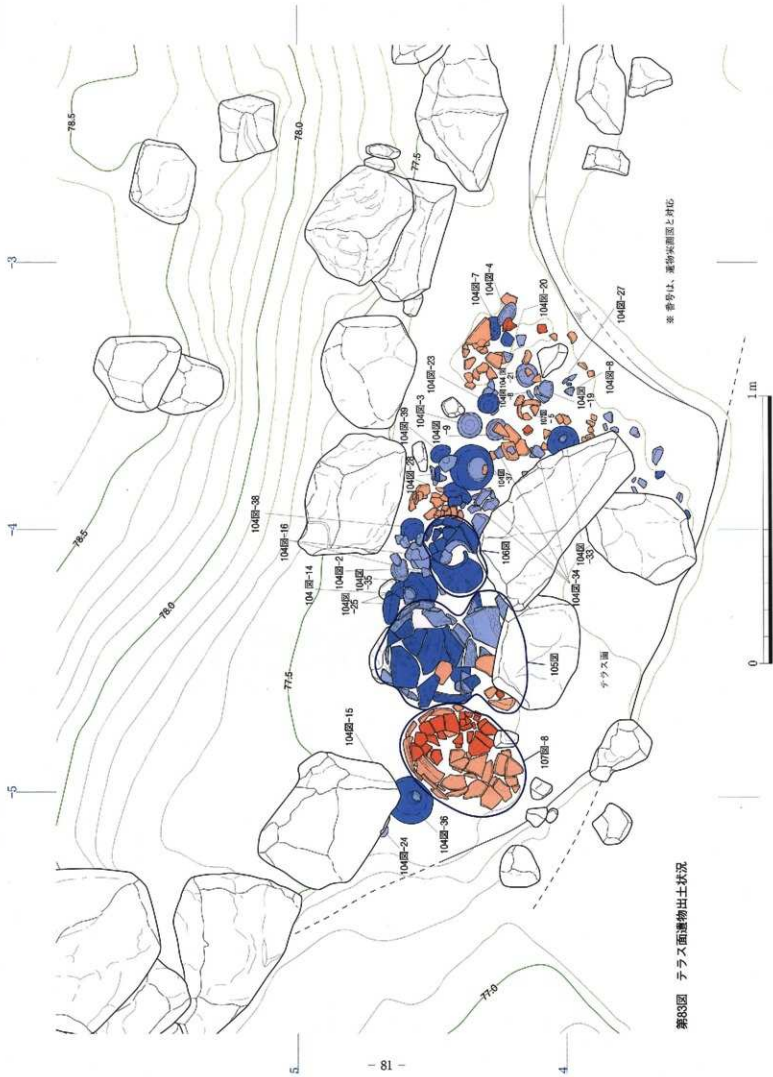
次に、左前庭部では、T.P.+76.5mで土器散布面を検出した（第85・89・90図）。遺物と石材はすべて浮かし掘りで掘削を進め、出土状況を総体として把握した。検出状況について一言すれば、須恵器と土師器が5cm程度の大きさで破砕された形跡を留めており、意図的な打割土器類の廃棄行為が読み取れる。遺物量は、東Ⅳ・Ⅴ区を中心として、同心円状に広がりを持ち、散布状況を減じている。被砕土器が目立つ中で特異な例としては、東Ⅳ・Ⅴ区間のセクションベルト内で出土した土師器の甕をあげることができる。口縁部を上に向け、完形に近い状態で遺存していた（第91図・図版27～3段目右）。当個体が納まる直径20cmの円形の土坑に埋置されたもので、器内埋土中に他の遺物などは含まれていなかった。

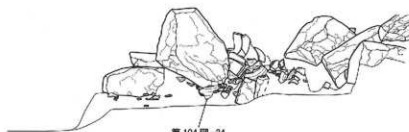
徳川大坂城石切場関連遺構 堀坂古墳は城山・三条古墳群に包括されると共に、城山刻印群の推定範囲に位置している。今回の調査では、後者と関連する遺構も見出されている。先ず、石室の構成壁石に江戸時代初期の遺構を追認することができた。明確なものは左右両側壁の壁石に残されていたAタイプの矢穴列（森岡・藤川2008）がある。昭和30年代に既に図化されていた奥壁に接する右側壁の2段目石材の上面に8個の矢穴から成る1列の矢穴列が見られる（第92図、第2表）。本来の石の目と矢穴列が適合しなかったためか、矢穴イと矢穴ウの間に不測の割れが生じ、用材として搬出されなかったと思われる。矢穴個々の法量は計測表（第2表）に委ねるが、当石材の矢穴は列として直線的ではなく、下取り線や割り付けの痕跡も確認できない。矢口や矢底の整形も見劣りするもので、比較的確り技術の推定は矢穴列と言えよう。矢穴列検出面は本来、側壁がもう1段積まれるか、天井石が架橋される石材位置にあり、古墳時代の往時には表面に出ていない面である。すなわち、これらの矢穴が穿たれる時点では、天井石や上部壁石が無かったことが確実であり、江戸時代初期の段階で石室が露天近くになっていたか、採石の過程で一部取り除かれたものと判断される。

2つ目の箇所は、左側壁奥側から5石目の2段目（上段）石材にみられ、未完成状態の矢穴を確認した。第94図に示したように、2個の矢穴が確認でき、両穴の間隔は30cm弱を測る開きがある。彫り作業を途中でやめており、現状の深さは2cm程度である。この2個の矢穴を観察しても判るように、下取り線を引かず各矢穴を単体で穿っていることから、先の例と同様に、技術的には計画性もなく推定印象を受ける。また、矢穴列の位置から彫り作業の対象石材を築石用材に使用する意図がないことが窺える。

これらの採石行為とは別に、奥壁の裏込めに相当する部分で、多量のコッパを伴う作業土坑を検出した。検出面は第1トレンチの表土下115～120cmで、上部堆積の1a～1h層を除去した段階である（付図、図版31）。想定される土坑は東西2.0m、南北1.9m程度の不整形で、その一部がトレンチにかかった状況である。土坑は計測可能な最深部で60cmを計測する。埋土は礫混中～細粒砂で、人為的に堆積している様態である。埋土にはCタイプの矢穴底を伴うコッパが確認されており、徳川大坂城再築時期より下のものであるが、冒頭の2例から勘案すると、Aタイプ矢穴使用時期である江戸時代初期に先ず機能し、一定期間を置きながらも、後続遺構として矢穴Cタイプの採用時期に、再度採石活動が行われたものと推測される。それは、土層断面（第58・64図）からも一定の説明がつけられる。

墳丘主軸ラインに沿って探入した第1トレンチの堆積状況から、奥壁の2段目はAタイプの機能時期にすでに取り除かれていたことが判っており、天井石と合わせて石垣用材として搬出された可能性は十分考えてよい。





T.P. + 77.00m

T.P. + 77.00m

第104図-34

(東から)



T.P. + 77.00m

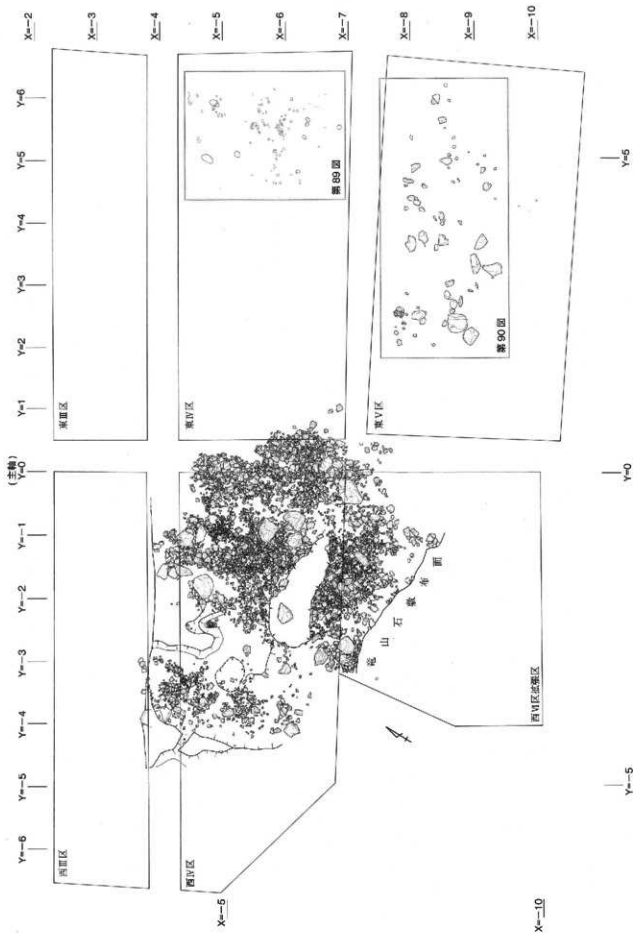
T.P. + 77.00m

第104図-36

(西から)

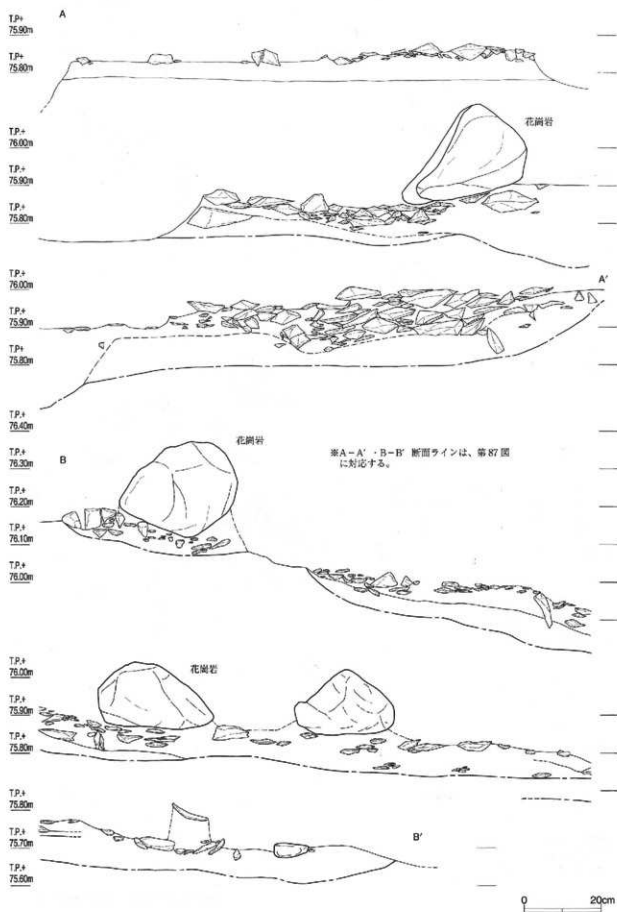


第84図 テラス面遺物出土状況立面図 1 / 20

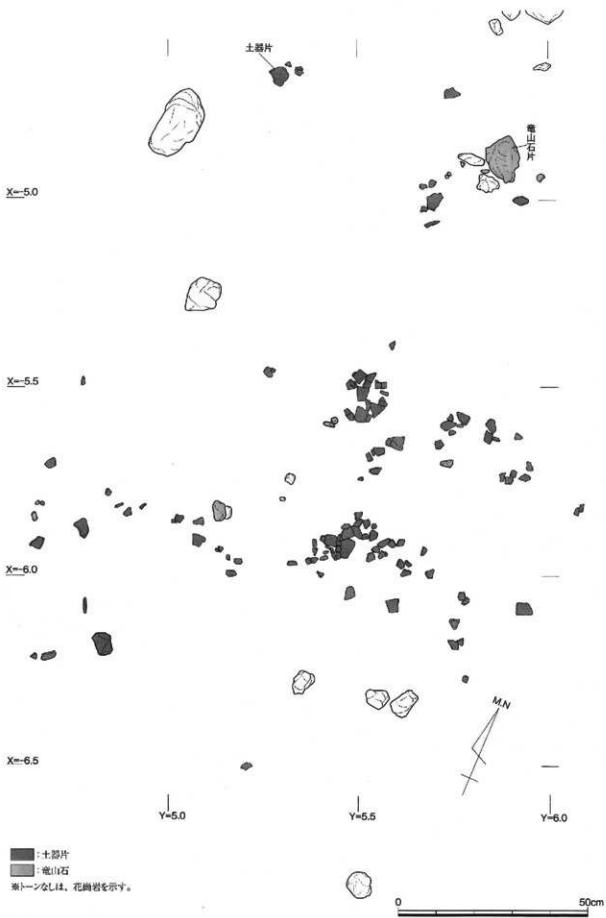


第85図 前庭部西Ⅲ・Ⅳ区、東Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区平面図 1/60

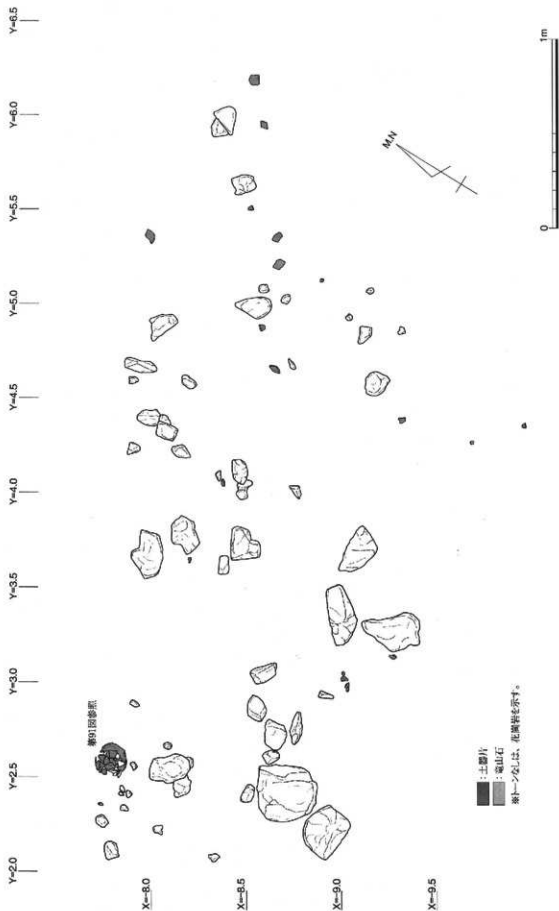




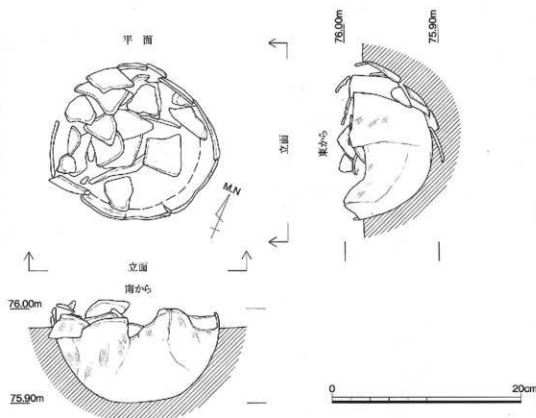
第88図 前底部Ⅳ区 十字セクション断面図 1/10



第89図 前庭部東IV区 土器出土状況平面図 1/10



第90図 前庭部東V区 土器出土状況平面図 1/20



第91図 前庭部東V区 土器出土状況平面・立面図 1/4

④小 結

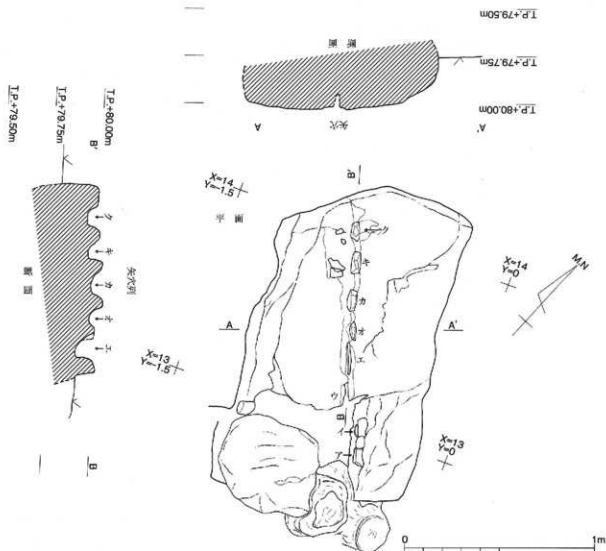
制約を設けて実施した旭塚古墳の確認調査結果は、以上のとおりである。40有余年ぶりにこの古墳に調査のメスが入ったため、過去の調査内容についても幾分判明したことは、予想外の収穫であった。また、新たに確認できた事実はすこぶる多く、検討課題が山積みの状況になった。

墳丘は一部を除いて事業地内のポケットパークとして保存されることが予定されており、現状保存と向後の再調査を考慮しつつ、一方では最大限、古墳の立地環境や構築技術の掌握、復元を目標の一つとして、矛盾しつつも最小限の調査範囲を設定した。結果的には、阪神間のみならず、近畿圏においても稀少例となる知見や想像し得なかった遺構・遺物が確認され、旭塚古墳の特異性がより明らかとなった。

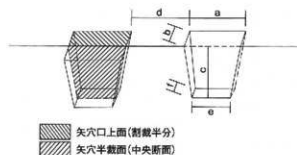
それらの集約を試みると、墳丘南西隅で検出した151°の交角をなす2列の基底石は、本墳の墳形を考える上で重要な情報を提供した。過去に円墳や方墳とみる見解が出されており、今回の調査により多角形墳の可能性が強まった。残念ながら1角のみの検出となったが、古墳時代終末期という時代背景の下で、古墳自体の築造に加え、墳形にも規制が及ぶ微妙な時期に比定される本墳であるだけに、墳形や規模の手照りを与える遺構が検出された成果は大きいものがある。それは、今後全国レベルで考証の歩を進めるべき内容となった。

また、墳丘構造として、尾根の先端の自然地形を残核状に削り出した墳丘に腰高の墓壇を掘り込み、巨石を専ら立位に配する構造は、石室構造や用石法の変遷に照らしても、切石積石室へと移行する過渡期の様相の一つとして注目されよう。横穴式石室と横口式石槨との影響関係も解きほぐす必要があろう。

さらに、前庭部と石室床面で距離を置いて検出した竜山石の砕石面に関しては、その素材自体でもって播磨地域の影響を色濃く反映しているもので、定形化しない石片群そのものが目的的な石材であるという認識を得るに至っている。長大な竈門立柱石を採用した石室羨道構造とも相関して、被葬者の出自像や系譜を推測させる上に欠くべからず要素となった。これらは今後の古代地域像構築への足懸かりとなろう。(森岡・坂田)



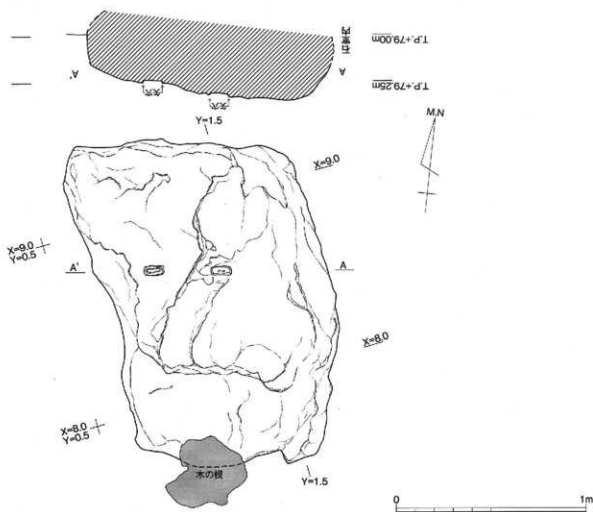
第92図 玄室右側壁 矢穴石平面・断面図 1/20



第93図 矢穴各部法量測定基準模式図

測点 番号	矢穴口 長さ a (cm)	矢穴口 幅 b (cm)	矢穴 深さ c (cm)	ピッチ d (cm)
ア	10		9	6.5
イ	11		7.5	8
ウ	10		7.5	
エ		割れている		
オ	12	7	6	6
カ	12	4.5	6.5	5
キ	11	5	6	2
ク	11	5	5.5	

第2表 玄室右側壁石材矢穴計測値一覧表



第94図 矢穴石平面・断面図 1/20

(4) 第1・2次確認調査の出土遺物

①概観

出土遺物は予想以上に多くみられた。第1次調査出土資料と第2次調査出土資料を大別して、以下に報告する。第1次調査は事業地全体を対象とした確認調査であり、各所に設定したトレンチからの出土資料である。これを掘り所として、調査地全体における遺物包含層の有無や分布範囲を判断した(第34図)。第2次調査は、第1次調査の結果を受けて埋蔵文化財包蔵地としてゾーニングされた対象範囲(Aトレンチおよび拡張部)からの出土遺物と、旭塚古墳に直接伴った遺物に大別できる(巻頭図版12～19、図版32～68)。

遺物総数は、第1次調査分と第2次調査分とを合わせて、土器だけで汎用コンテナ(容量27ℓ)で50箱が出土した。その内訳は、第1次調査出土遺物が1箱のみで、他は第2次調査に帰属する。第2次調査分では、旭塚古墳テラス面出土遺物が大半を占める。以下の記述内容でも示しているが、土器の種類では須恵器が8割、土師器が2割程度を占めている。点数の上では、7世紀代の土師器が比較的に目立っている(巻頭図版12)。

また、特記すべきこととしては、表採資料の中に遺存状態の良い耳環が1点含まれており(巻頭図版15、第110図)、旭塚古墳もしくは周辺の古墳主体部からの流出遺物であることは疑う余地はない。

きわめて稀有な出土資料として竜山石の存在があり、今回の調査では掘削範囲内で確認できた当石材はすべて位置情報を記録の上、取り上げた。総数は、30～50cm大の母岩的な法量のものから、人頭大、拳大、剥片、碎片、

粒状片に至るまで約4万点を数え、総重量は380kgを測る。当石材は摂津に属する芦屋市周辺で産出される石材ではないだけに、これほどまでに膨大な量を選び込んだ原動力や動機が一体何であったのかが注目されよう。

出土遺物の時期を概観すると、数少ない瓦器や土師質皿、弥生土器片、打製石鏃などを除き、大半が6世紀末から7世紀半ば前後の時期に収まり、圧倒的に7世紀に下る遺物が主体を占める。これは上記した塚塚古墳のテラス面出土遺物が相対的に最も多いことに起因する。

なお、須恵器の編年は中村浩氏編年〔中村2001〕と田辺昭三氏編年〔田辺1966・1981〕を参照・引用し、それぞれ「中村編年Ⅰ型式第1段階」を「Ⅰ-1段階」、「田辺編年TK73型式」を「TK73型式」または「TK73」などと略式表示する。また、Ⅱ-5段階以降、TK209型式中段以降については、西弘海氏律令期土器編年〔西1986〕を便宜的に併記した箇所もある。また、個別資料の基礎データについては、草末の第4～10表（p.117～124）の遺物観察表に委ねたい。（森岡・坂田）

②第1次調査出土遺物

出土遺物は、汎用コンテナ（容量27ℓ）で1箱分が出土した。遺物の種類は、須恵器・土師器・瓦器・銭貨がみられ、その内須恵器が大半を占める。出土遺物の時期幅は、弥生時代～近世にわたるが、古墳時代の遺物が突出して多い。これまでに記述してきたが、遺物の包含密度はトレンチごとに濃淡が明瞭であり、存否のみならず、出土するトレンチ内においてもある程度、範囲や層位を限って出土する傾向が見られた。これは、包含層の堆積環境や、遺構からの移動距離など、原位置からの因果関係を何某か反映しているものと考えられる。

図化した遺物6点を第95図に示した（図版32）。以下では、図化できなかった遺物の観察記録を含め、トレンチごとに記述する。なお、場合により、第34図の出土位置番号も対照のために丸囲み数字を用いて提示する。

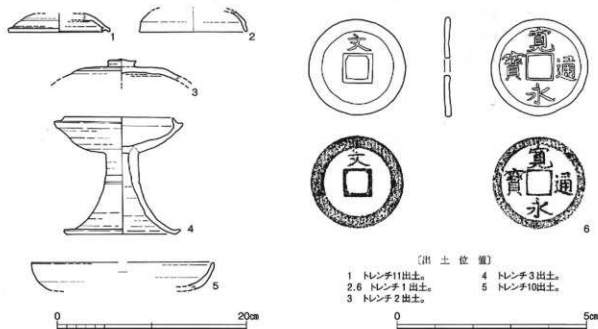
トレンチ1出土遺物 第95図2は、須恵器坏蓋である。旧表土より下から出土した。淡い灰色を呈し、精良な胎土である。Ⅱ-6段階、TK217型式に相当する。口径は11.2cmに復元したが、より小さく復元することも可能であり、短頸壺の蓋にも復元し得る。第34図⑦から出土した。他に⑦からは須恵器甕の体部片9点が出土している。大きな器体になるものであり、3～4片までの接合関係を持つ破片がある一方、完形には復元できない。器蓋は厚く、かなり大型品の断片であろう。いずれの破片も、焼成は良好で、胎土も精緻である。内面調整は同心円の当て具痕が明瞭で、外面は格子目状のタタキが施される。6世紀後半から7世紀代の所産である。

6は、盛土ないし表土から出土した寛永通寶で、銭径2.6cm、経通し方孔の一辺0.7cmを測る。方格の枠幅は表裏で異なる。新寛永に分類され、背面に「文」を鋳出している「背文字銭」である。寛文8年（1668）初鋳の銭貨で、京都の方広寺の火災を鎮静した以後、全国数十ヶ所において鋳造されたものとして知られている。全体的に錆化しているものの、部分的にメタルが看取され、拓影は鮮明である（図版32上）。

2a・3a層より、須恵器甕の体部片が出土した（第34図、⑩・⑪からの出土）。器体はかなり大きくなる甕の残欠片である。須恵器は、他に壺形土器の破片や中型甕の破片も含まれる。壺は肩部まで残っていないが、長頸壺の可能性があり、外面には回転調整痕が残る、内面の同心円当て具痕にはハスリクシが加わる。7世紀中頃に近いか。2片が接合し、他に同一個体片1点が存在する。いずれも⑩出土。土師器では坏か皿の底部の破片も見られる。⑪の出土で、古墳時代後・終末期のものともみられる。トレンチ中央断面で観察された黄灰色礫泥～粗粒砂からはローリングの著しい軟質焼成の甕が出土している。

トレンチ2出土遺物 盛土直下の1d層から、須恵器・土師器・磁器の細片が出土している。土師器片は、甕の口縁部とみられる。いずれも小さな破片であるが、器種・時期の認定できる須恵器の坏蓋が1点（第95図3）出土している。この坏蓋の特徴は、ツマミが扁平で、中央がやや盛り上がり凸状をなしている。体部外面は、1/2ほど回転ヘラケズリが施されている。これらの特徴から、Ⅳ-1段階、西編年飛鳥V期・平城I期の7世紀末から8世紀代の年代を付与することができる。他に須恵器片2点があり、坏蓋天井部や、壺か甕の体部片が認められる。第34図②～④からの出土。土師器は①・⑤から、龍泉窯室同期の破片を含む中国産や国産の青磁片は、墳丘側の榎部掘削坑内（第34図⑨）から出土している。①の盛土直下から検出された土師器は、15世紀前後のヘソ皿片とみられる。

トレンチ3出土遺物 盛土内の遊離遺物であるが、須恵器高坏（第95図4、図版38下段右）が1点と、須恵器片数点、土師器片1点が出土した。高坏は蓋高坏で、透かし窓は無いが、典型的な短脚ではない。脚柱部の中央に1条の沈線が巡る。坏部は口径12～13cm程度で、内傾しながら短く立ち上がるカエリを持つ。受部をはじめ



第95図 第1次調査出土遺物 実測図 1/4, 6のみ1/1

全体的に鈍重となり、無透かし化をとげたものといえ、6世紀末以降の時期に比定できよう。他の破片はローリングを受けているものが目立つ。

トレンチ3・6の北方など、付近の表採遺物として土師器細片1点がみられる。図化はできない。

トレンチ5出土遺物 2a層黄褐色砂礫より、須恵器片1点が出土した(第34図⑬出土)。無蓋高杯の口縁部片と判断されるが定かではない。7世紀代のものとみておきたい。

トレンチ6出土遺物 須恵器片2点(第34図⑭)、土師器片1点(第34図⑮)が出土した。いずれも細片である。他に、トレンチ6の東方では、石垣直下にて弥生時代以前の土器片を表面採集している。

トレンチ10出土遺物 南北トレンチ南寄りの2a層より、土師器片2点が出土した(第34図⑯)。1点は甕の体部片、褐色味の強いもう1点(第95図5)は、坏もしくは皿の口縁部片である。口端には巻き込みが看取され、尖りぎみにシャープな調整痕で仕上げられている。磨減が著しく略文は消えているが、飛鳥時代のものであろう。色調は淡赤褐色、胎土に砂粒を混える。

トレンチ11出土遺物 3a層より、須恵器片や土師器片、瓦質土器片が合計10点出土した(第34図⑰)。いずれも細片でローリングが著しい。土師器の口縁部は甕とみてよい。

4a層より、須恵器片6点と土師器の細片4点が出土した(第34図⑱)。須恵器片のうち、1点が時期の判明する坏蓋で(第95図1)、口径は細小し、内向して短小の度合を進行させたカエリが退化傾向にある特徴を持つ。Ⅲ-1〜2段階、TK217型式に比定され、7世紀中頃前後のものともみられる。胎土良好、堅緻な焼成で濃い灰色を呈している。西暦年で坏Gと呼ばれている一群の土器で、過去にも小異のみられる資料が旭塚古墳近辺で出土している〔武庫川女子大学考古学研究会1984〕。年代的にも整合のとれる資料である。

③第2次調査拡大調査区(Aトレンチ)の出土遺物

Aトレンチから出土した遺物は、土師器・須恵器・サヌカイト片があり、特筆される遺物として旭塚古墳に近い南寄りのエリアで、須恵器の平瓶(完形)や子持器台、土師器の甕(完形)などが分散的に出土した。

表土層出土遺物 第96図1〜3は須恵器の蓋で、1は復元径8.8cmと小さく、2は10cm前後に復元できる。3は径が不完全な復元である。いずれも7世紀代の所産である。カエリは共通して口縁部ラインより上位に取まり、僅かな突出をみせる程度である。宝珠ツマミは3点とも欠損しており、扁平な2にはその剥離痕跡が観察できる。残欠片3の器壁断面には重ね焼きによる焼ムラの色調変化が見られる(図版38・55・57)。

4は須恵器長頸壺あるいは平瓶の肩部と思われる。その上面には深緑色の自然釉が付着する。残存部は全体の1/20程にすぎず、器形・角度・体部径は推定の域を出ない。7世紀代のものであろう(図版58)。

5・6は須恵器高坏の残欠。細身の脚部に無蓋の坏部を乗せる。5は、脚部中位に弱い凹線を1条巡らせる。坏部外底面は回転ヘラケズリの後、回転ナデを施す(図版38)。6は脚の裾端部で、端部は鈍く上位に肥厚する。結構直径はあるだろう。長脚になるものかもしれない(図版58)。

7は須恵器の器台の残欠片とみられる。外底面には脚部の剥離痕が明瞭に残っている。胎土に2mm以下の白色砂粒が顕著に含まれ、器内の芯部は暗紫色を呈する。坏部の退化が目立っている。同一個体と考えられる小破片が数点認められる。第98図8は子持器台との関連を窺わせる資料と言える(図版58)。

筒形で部厚い8は須恵器であるが、器種は不明である。本来の器形は明確ではないが、推測される用途としては子持器台の中央に置かれる台座とも考えられる。出土位置は、子持器台が出土した土器溜りAに近接した表土内であり、社宅造成時の2次的移動と考えてよいだろう。本品は器肉が最大2cmを測り、焼成の貫徹性が窺えず、内部は層状に赤紫色を呈する部分が認められる。また、体部中位に他製品の一部(口縁部片)が融着している。こうした資料が旭塚古墳に伴うものに多く、一つの特徴となっている。径8cm程度に復元できる基部は、外方に尖りぎみに突出するが、先端部を欠くため、正確な形状は知り得ない。また、上部の復元もままならない。

2・3層(機械掘削)出土遺物 機械掘削を行って除去した2・3層からは、散発的に各所で遺物が出土した。原位置を保つものはほとんどないであろう(96図下段)。第96図9～32は須恵器の坏とみられる。9～17が蓋、18～32が身とみられる。9～11には坏Hを含み、12～17は坏Gで、飛鳥Ⅱを中心とするものであろう。9・10は天井部のみ残存している。推定される口径や技法の特徴などから、他の遺物より先行する。9は有蓋高坏の蓋になる公算が高い。軟質な焼成である。10は回転ヘラ削りに古い要素を留める。白っぽい焼上りの11は、口径・器高ともに減じ、口縁部に特徴的な屈折をみる。12は坏Hの身になることも十分考えられ、カエリは結構目立つ。外面には幅広の丁寧なヨコナデを施し、凹面をなす。暗紫色を呈する13・14は近似した法量の破片資料であるが、カエリの端部形態が異なり別個体とみて大過ない。15・16はカエリの退化が1段階進み、類似する蓋である。華やかな作風の17は、壺用の蓋になるかもしれない。18～20は身として図化した。18・19は残存2片から測図しているが、口縁部の立ち上がりは急な折れを作って屈折させる。破片のため器径が定まらないが、3片接合により半完形品になる。20は直径・器形などから勘案すると、飛鳥Ⅱに比定できよう。21～32は坏Gの身であり、端部が反る器形(21・22・28・29)と、上外方に向かいつつも僅かに内湾するもの(23・24・26)がある。半分以上が残り、器形の安定する21は、暗灰青色の焼き上がりを示し、口縁部は丹念にヨコナデ仕上げを行っている(図版57・58)。

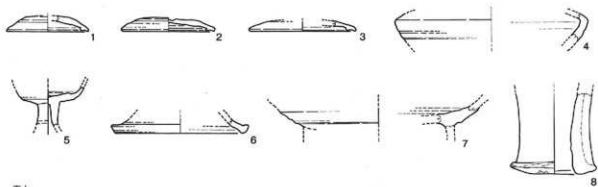
33～35・35' (35と同一個体)は須恵器の平瓶である。小型品の口頸部33は、口縁部中央に弱い凹線を1条巡らせ、内湾ぎみに立ち上がって、端部は丸く収める。胎土・焼成は共に良好(図版40)。34は、33と比べ一回り大きく、口縁部に焼歪みが看取される。口縁部中位に明瞭な1条の凹線を巡らせる。7世紀代の年代を与えてよからう(図版40)。35は体部片で、同一個体と判断できる接合関係を持たない3片からなる。あえて復元実測したが、残りは悪い。器形の特徴として肩部の張りが顕著である。胎土は精緻で、微砂粒をほとんど含まない。底部にヘラ削りをした上、カキ目調整痕を残す。向きをかせると、35'のように図化できる(図版58)。

36～38は須恵器の高坏である。36は、7世紀代の無蓋高坏で、坏部の器形は坏Gと同様の形態を採る。37は脚柱と接する坏部底面の一部が遺存していた。外底面にはヘラケズリの後、強い回転ナデを施す。諸特徴から有蓋高坏とみられ、7世紀でも古い要素を留める。38の脚裾端部片は裾部径が小さく、おそらく短脚の柱状部を持つ7世紀中頃の無蓋高坏であろう。淡灰白色の色調を示す(図版58)。

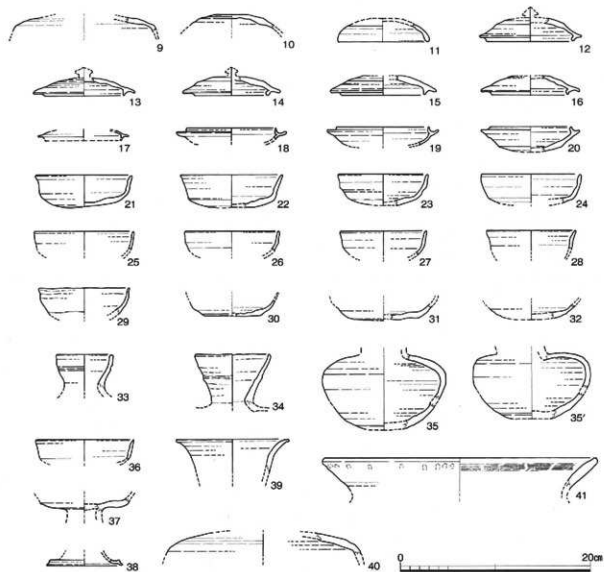
39・40は長頸壺の一部であろう。39は口縁部で、頸部から外上方に直線的に開きながら立ち上がり、端部でさらに大きく外反する。40は胴肩部で、体部との器形屈曲点に弱い凹線を1条施す。細片のため、図化した体部径はあくまで推定である。39と40は同一個体ではない(図版58)。

大型に復元される41は、土師器の甕か壺になるであろう。磨減が著しいが、口縁部内面にヨコナデが観察できる。胎土には1～2mmの長石・石英粒が多く含まれる。7世紀代の所産であろう。墳丘裾部テラス面で出土した第107図8～10のような土器と関連するものである。

西側サブトレンチ Aトレンチの西端に基本土層や堆積関係掌握のため、探査用に入れたトレンチの中から検



表土



2・3層 (機械彫削)

第96図 A トレンチ出土遺物 実測図 1/4

出された遺物をまとめる（第97図、図版57～59）。A地区南端黒色表土直下出土の1は須恵器の坏蓋である。6世紀末から7世紀初頭に比定できる薄いつくりをなす。径は不確か。

2は須恵器の高坏である。7世紀中頃の所産で、短脚のスリムな脚部を持つ。柱状部中にきわめて弱い凹線を1条巡らせる。坏部は薄く、外上方に向って直線的に開く。灰色を呈し、若干の長石を含む。1と同様、南端の黒色表土直下層より出土（図版38左下）。

同じ場所より出土した3・4は須恵器の平瓶の残欠とみられる。3は口縁部のみが残存、4は平瓶もしくは長頸壺の頸部と体部の接合部である。風船技法による推定径5cmの閉塞痕跡が観察できる（図版58）。

5は、須恵器の底部片である。九底風の平底になる器形を探る。坏か壺の底部と思われる。内底面には一定方向のナダが観察される。灰色でも淡い色調である（図版58）。

しっかりした脚を持つ6は、台付長頸壺の脚台部と推定される。断面「ハ」の字状に踏ん張る安定感のある高台であり、暗い灰色を呈するものの焼成は良好である。7世紀中頃のものとみてよいだろう。7は長頸壺の肩部片である。肩部の器形変化点に目立たないながら1条の凹線を巡らせる（図版58）。

8・9は土師器の坏と皿である。8は器高指数の高い坏で、器表は荒れているものの外面に横方向のミガキを密に施す（図版59）。比較的磨滅の少ない9は内面に暗文が観察できる。比較的器径が大きく、坏と言うよりむしろ皿とみられる。外底面に一定方向のヘラ状工具による器面調整痕が観察される。7世紀前半から中頃のものとみておきたい。

10は弥生土器の甕である。口縁部片であり、頸部よりやや反ししながら端部に至る。端部は面をもって仕上げる。胎土に0.5mm以下の赤色・白色砂粒を含む。調整技法はヨコナダ仕上げを基調とする。先行深掘トレンチ出土品なので、弥生時代遺物の包含層に由来するものであろうか（図版59）。

11は脚台の付く坏である。脚台は断面形が「ハ」の字状に踏ん張るようにして端部に至る。胎土には長石粒を多く含む。7世紀半ばに比定される。全体的に器表や、断面にローリングした痕跡を留める。

土器溜りA 土器集中が瞭然としてみられ、出土状況にも高い一括性が窺える（第60・98図）。須恵器（1～9）・土師器（10～14）から成り、須恵器は坏・壺・平瓶・子持器台などによる構成で、バラエティーに富む。全体として原位置を保つものの、遺構としては半壊するもので（第59図・図版8）、当初の組成をかなり欠くことになった土層群と考えられる。

1は須恵器の坏蓋である。割れて出土したのみならず、1/3程を欠く。坏Bで、飛鳥IV段階、7世紀後半に比定される。ツマミは完存しており、扁平化に至る前の段階である。口径は15.8cmを測り、焼型が見られる。暗灰紫色を呈する焼成である（図版39上）。

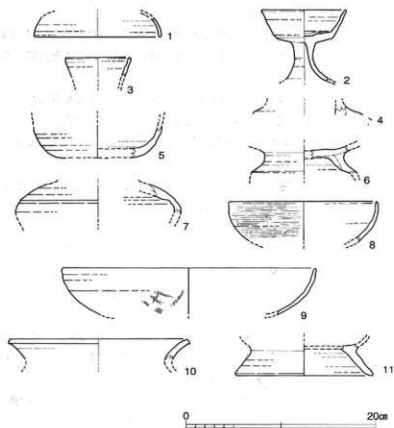
2は坏身である。細片であるが、一応、図化したように復元した。3は須恵器の坏底部である。色調は白っぽくやや軟質な焼上りである。残存部の観察からTK209段階末期の器形が復元できる（図版57）。

4は須恵器広口壺の口頸部である。焼成がきわめてあく軟質で、色調は灰白色を呈する。作りは粗雑で、内面に指押えと粘土帯の巻き上げ痕が観察される。外面中位には、弱い区画凹線を3条巡らせ、中央のとくに微弱的な凹線を踏む様に稚拙で弱い単条の波状文を施す。さらに、口縁部段直下にも同様の稚拙で粗放な波状文を施している。全体に施文技術の退行と省力化が認められる土器である（図版38上）。

5・6は、平瓶および長頸壺の口縁部である。いずれも外上方に立ち上がり、端部を丸く収める。6は端部に強いヨコナダを施し、若干の外反が器形に見られる（図版57）。広口壺の口縁部片7の端部は、拡張みに垂下し、1cm幅の端面を持つ。口縁部外面を巡る1条の弱い凹線が観察される（図版57）。

8は子持器台である。芦屋市内では初出例。接合関係を持つ破片は、本体の帰属する土器溜りA以外にも、周辺の表土内から散発的に出土している。前述した第96図8などもその一つをなすものであろう。坏を周縁に乗せる台脚受部の最大径は30.4cmを測り、広く拡張させた口端面に推定8個（5個残存）の坏身を付ける。坏身の口径はそれぞれ8cm前後で、およそ等間隔に配される。一方、太く頑丈な脚台には、ナイーブな辺から成る三角形の透かし孔が四方に穿たれる。いわゆる「子」である坏身の型式から、7世紀中頃に比定することができよう。旭塚古墳の築造時期と触れ合う。この古墳の土器祭祀の一つとみられる（図版33・34）。

やや鈍重な器体を有する9は、須恵器の体部片である。器形から壺か横瓶になろうが、土師質焼成であり、磨滅度も高いため、外面のカキメや、内面の同心円当て具痕が観察できない。胎土に2mm大の白色砂粒を含む。



第97図 西側サブトレンチ出土遺物 実測図 1/4

に伴う資料のみを一括している。おそらく遺構の年代（7世紀中頃）を示すものとみて問題ない（第99図）。1は大型の平版である。変形を大きく伴う土器であるが、ほぼ完存状態で出土した。焼成時の焼歪みが顕著で、口縁部の1/3程は大きな2ヶ所の亀裂により花びらのように押し広がる。製品としての機能に疑問が残る資料である。推測の域を出ないが、自然軸の付着に偏りがあることや、亀裂破断面にも軸が付着していることから、窯の中で焼成中にゆがみと器形の崩れが生じたとみて過誤はない。焼歪みが起こらなかった場合の正位置復元体部最大径は約21cmで、器高は約17cm、口径10~11cmに推定し得る。大きく開いた口縁端部は部分的に膨らむように終わる。淡黄褐色の焼き上がりであるが、外底面は径14cmで、回転ヘラケズリを施し、その部分に窯壁片や他の須恵器片が溶着している。触診による内面観察では、閉塞栓が体部中軸上にあることが判る。口頸部の倒れこみにより、天井部の周縁がかえって膨らみ、肩部には1条の明瞭な凹線を施している。胎土中に長石・石英粒を比較的多く含み、ムラのある灰色を呈している。TK217型式に併行する大型の平版であり、多くの点でテラス面出土土器と共通の要素を保持している点に留意しておきたい（図版36）。

破片の2は、須恵器の長頸壺である。外反する口縁部外面には自然釉が付着する。他に接合資料がないため、判然としませんが、1・3とはほぼ同時期の年代を示すものである。正確な出土位置は、周溝の検出面（X=28.659m、Y=10.673m、T.P.+79.784m）に当たる。1・3と関係付けられる資料として、注目しておきたい。

3は土師器の甕である。20数点の破片からなるものの完存状態で出土したと言える。球形の体部に短く外反する口縁部を作り出す。体部中位に小さな黒斑が観察できる。ハケメ調整は、体部外面と口縁部内面に施され、ハケの原体（9~10本/cm）は各部位同一のものを使用する。外面のハケメは2工程に分けて行われ、頸部から体部中位までを整然とタテ方向に、その後、底面全体から体部中位までを粗く不整斜め方向に反時計回りに施す。口径は14.6cmを測り、体部最大径とはほぼ同じである（図版37）。

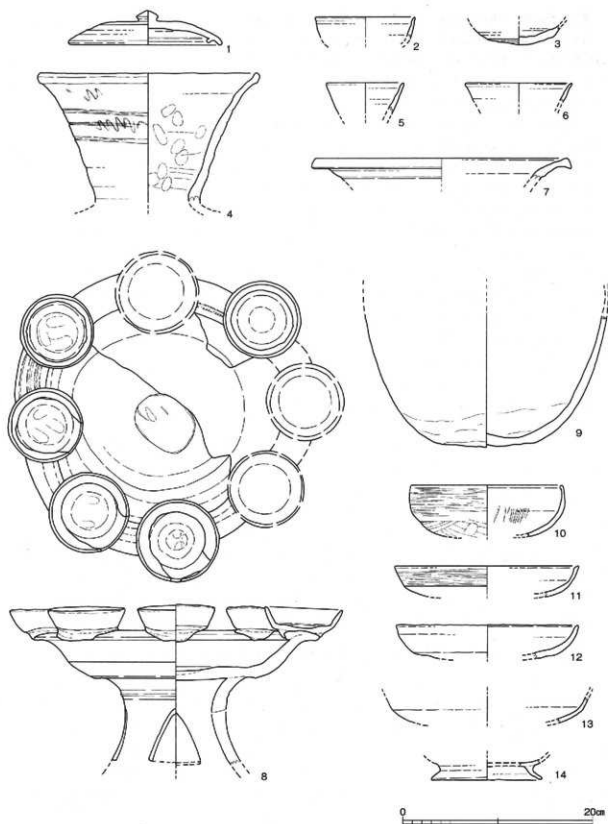
擾乱出土遺物① 第100図にAトレンチの擾乱坑他の遺物を2点載せる。1は須恵器の甕である。口縁部片で、端部は外折させた後、丁寧にヨコナデによって端面を仕上げる。端部断面は、内湾ぎみに矩形をなす。推定口径

丈の高い10は、土師器の坏である。1/5程度を残す外面観察から推測すると、器面上半部に丁寧な横方向のミガキ調整が施されていたものと思われる。また、内面にはタテ方向のミガキが観察できるが、放射状の暗文か否かの判別は、器表が荒れ困難なまでに磨滅している。口縁端部は内湾ぎみに内側に特徴的に丸めて終わる。器高指数から、7世紀半ばの飛鳥Ⅱ段階に比定できよう（図版39）。

11~13は土師器の皿とみられる。いずれも磨滅しており、外面に僅かなミガキ調整が看取されるにすぎない（図版39）。

14は脚台の付く坏である。脚台の断面形は、接合時のナデ付けが強く、内側に僅かに屈曲する。胎土は砂粒をほとんど含まない精緻な生地である。また、色調はぶい橙色を呈する。

溝201出土遺物 明らかに溝



第98図 土器溜りA出土遺物 実測図 1 / 4

37.6cmを測るが、1 / 15以下の小破片であり、不確か（図版57）。

2は復元の口径が22.8cmもあり、土師器の皿とみられる。磨減が著しく、調整技法は不明瞭である。形態から7世紀代の所産と思われる。Aトレンチの旧表土面から出土したものであり、土器溜りAと同一面に比定されるので、その遊離遺物の一部とも考えられよう（図版59）。

擾乱出土遺物②（第1次10トレンチ北西壁付近） 1は須恵器の大甕である。かろうじて行い得た回転復元での体部最大径は58cm以上になる。内面には2種類の同心円当て具痕が観察でき、上位の原体の方が細かい。外面は密な平行タタキを全面に施し、最終調整として間断のみられる粗放なカキメ調整で仕上げる。さらにそれを被うような不整な走向の調整もみられる（図版35）。

④第2次調査塚古墳関係出土遺物

塚古墳から出土した遺物は、なんといっても墳裾テラス面から出土した豊富な器種の土器群であり、須恵器の横瀬・高坏・甕・埴・小型壺・台付長頸壺、土師器の煮沸形態土器などのバリエーションに富んだ膨大な量の供献土器が注目される。さらに、数10年振りの再掘削となる石室床面から須恵器片が出土したことは、墳丘構築時期や追葬の有無などを考える上で重要な指標に成り得るであろう（第102～114図、図版41～56・60～68）。

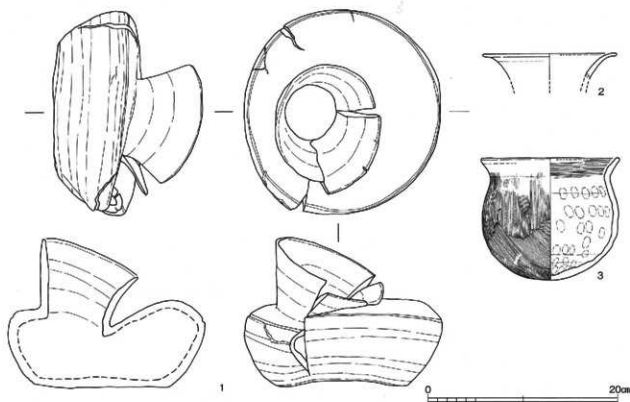
墳丘 墳丘と関係した所から出土した遺物を一括する。

第102図1～7は須恵器、8は弥生土器である。肩部付近の破片1は、坏Hの蓋の一部で、型式的にはやや古色を保つ。2は口縁部に屈折をみる蓋で、外面に1条の弱い擬凹線をみる。坏蓋ともみられるが、天井部への移行が早く、短頸壺の蓋のようなものになるかもしれない。ほぼ、復元完形品となった3・4は坏Gで、外底面の切り差しは、回転ヘラ切り未調整で共通する。口径は両者ともに9cm前後で小さく、器高は約4cmを測る。底部外周にはやや削り込むような粗いタッチのヘラ削り痕を留める。羨門部西側2列目石垣裏込めの最下層から出土した。墳丘構築時期を示す資料として重要である（図版56）。

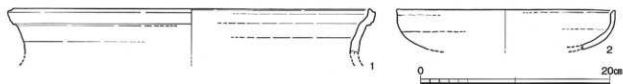
5は長頸壺の頸部片である。遺存部の傾きから口縁部にかけては、外反するタイプのもので、体部と接合する部分は頑丈なつくりをなす。外面には3条の浅い凹線が観察でき、頸部内面には板目状の工具痕が観察できる。

全容の知り得ない6は小型の甕である。内湾ぎみに丸味をもって立ち上がる口縁部端面には、弱い凹線状の窪みが観察でき、端部内面には、2～3mm幅の屈折をみる。体部外面には平行タタキを施し、カキメ調整で仕上げる。内面には同心円当て具痕が明瞭に観察できる。口縁部外面と体部外面には暗緑色の自然釉が濃厚に付着する。釉調がテラス面出土須恵器とも共通する点に留意しておきたい。出土層位は3・4と同じである（図版61）。

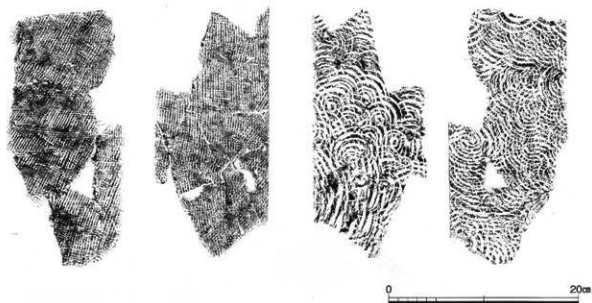
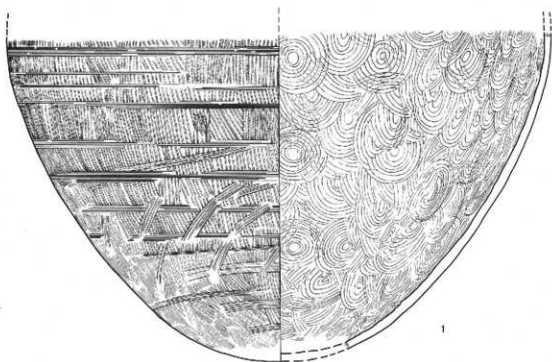
7は器台の脚台裾部の破片である。曲線的なカーブをもって端部に至り、脚裾端部を斜め下方に肥厚させ、外



第99図 A トレンチ溝201出土遺物 実測図 1 / 4



第100図 Aトレンチ攪乱出土遺物① 実測図 1/4



第101図 Aトレンチ攪乱出土遺物② 実測図 1/4, 拓影(外面・内面) 約1/4

端面にかけて樽先列点文を斜めに施す。透かし孔は破断部分の痕跡から復元的に図化した。内外面とも丁寧な回転ナデが施され、胎土も良好である。墳丘北部の盛土内から出土した（図版61）。

8は弥生土器広口壺の口縁部である。口縁端部を折るように斜め下方に垂下させる。磨滅しており文様がみられず、調整技法は不明瞭である。淡茶褐色を呈し、胎土中には長石・角閃石・雲母が散見される。角閃石は等質的に混入しており、器面がにびり褐色を呈する点も踏まえて中河内生駒山麓地域からの搬入品と判断することができよう。墳丘第6トレンチの表土から出土した（第50図）。弥生時代後期前半のものと思われる。背山である城山やその山麓部には、該期の高地性集落遺跡が展開することから、おそらく流出遺物であろう（図版56）。

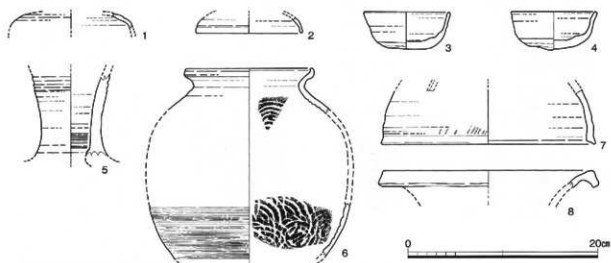
石室内出土遺物 もはや、資料が得られないと考えていた石室内からも、微量ながら土器類が出土した。

第103図1・2・5～7は美道部床面、竜山石剥片の敷布面から出土した。3・4は支室部床面で検出した桐木を東西方向に埋設する掘形から出土した。天井部への移行にやや隆起をもつて変化する1は、暗い灰色を呈する焼成堅調な坯ないしは短頸壺の蓋である。2～4は、坏・高坏の一部とみだが、いずれも微細片であり、器形や径は推定復元である。5・6は扁平化したツمامミを持つ有蓋高坏の蓋と思われる。復元的に全形の知り得る5は、天井部と口縁部の境界に凹線を施す。天井部は丁寧なヘラケズリで整えられる。口径は15.2cm、器高5.3cmに復元でき、塚原古墳全体の須恵器の中では、古い型式に位置づけられる。6のツمامミは中央1.1cm前後が皿状に凹み、周縁を斜め下方に面取りナデ調整する特徴をなすもので、焼成は硬質感をもつ（図版56）。

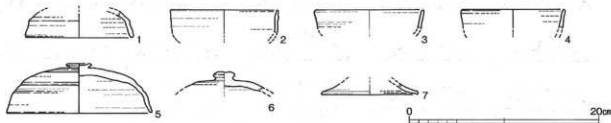
7は高坏の脚裾端部である。脚裾部径は推定10.2cmを測り、やや小ぶりである。無蓋高坏の可能性が高い。裾端はデリケートに下方に尖りぎみに終わる。器内中心部は灰紫色の焼成ムラが観察できる（図版61）。

墳裾テラス面出土遺物 偶発的に残ったにもかかわらず、小型土器類を中心に豊富な器種がみられる（第104図）。本墳の築造時期を考察する上に欠くことのできない資料が多数得られたことを先ず強調しておきたい。

1～18は須恵器の坏で、最も数多く遺存した。1～12は蓋、13～18は身である。蓋は宝珠ツمامミとカエリが付くタイプと判断し、天井部が残存していない場合でもすべて坏Gの蓋として復元実測した。カエリが口縁に収まる1～6・8・11・12と僅かに出る7・9・10が認められる。身はすべてカエリを持たず、口径が小さく、比較的深底のタイプが多い。18は断片であり、径などの復元があまり。底部の切り離しは回転ヘラ切り未調整の外底面を呈する。7世紀前半から中頃のものとみてよい。完形の1は蛤のような自然軸を強く被り、窯体内で別個体の付着が認められる。同じ窯内で焼かれたとみているかなり腰高の天井部を呈する2も同様な自然軸を帯び、重ね焼きの口縁端部残痕が乗る。3・4は完存品であるが、ツمامミは3が2に類似し、器形も含めると、4が2と酷似する。ヘラ削り痕跡が看取される5は、2のタイプに似るものであろう。6.4cmと口径の小さい6は、ツمامミもやや異質で、長頸壺や直口壺の蓋になる可能性がある。扁平な器形で、ツمامミが丸く小さい9も同様であろう。6・7には軸被りの状況や別品の一部付着が外面に認められるなど共通点が存在する。一部を欠きつつも5



第102図 墳丘出土遺物 実測図 1/4



第103図 石室内出土遺物 実測図 1/4

片が接合した8は、天井高が高く、頂点に小さいキノコ形の宝珠ツマミを付ける。口径が10.2cmに復元できる10は、身になる可能性が高いものである。堅い焼成の11や少し軟質味の焼き上がりを示す12などがあり、12は全体的にナイーブな調整テクニックで作られる（図版41）。

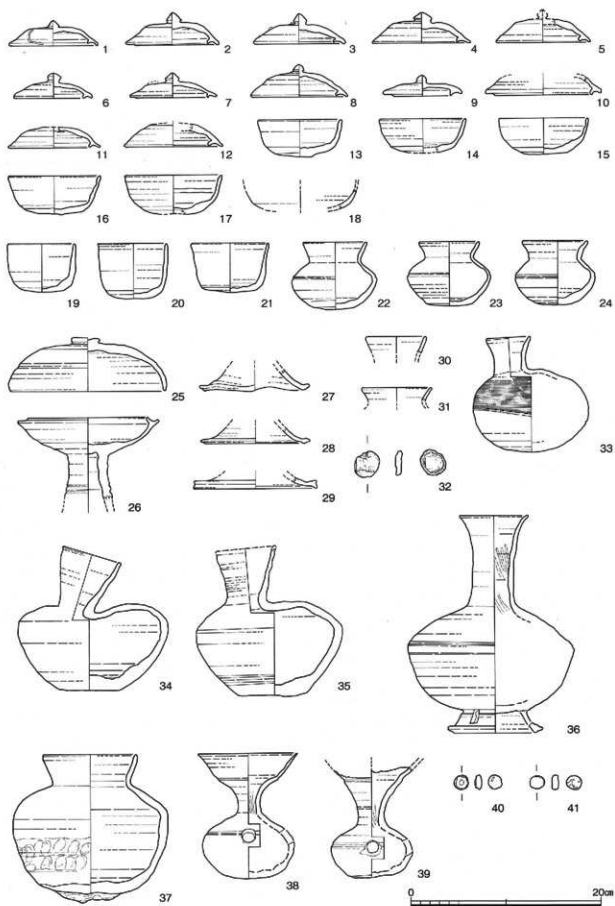
坏身は13が完存するもので、14・15などが欠けや接合を補って全形の窺い知れる資料となる。調整界が顕著な14は半欠品である。13は分厚く重い特徴に加え、ヨコナデなどが鈍重であり、技法全体や色調・焼成が12と酷似するもので、おそらくセット関係を保つてであろう。15は、他の灰白色系の須恵器と異なって、かなり青味を帯びた硬質な焼き上がりを示す。内湾度の緩む16は、15と対照的で軟質に焼き上げられた白みがかる色調の土器で、重量も軽い。生産地を分かつ可能性があろう。全体の2/3を欠損する17は、数片に割れたものを復元したものであり、内面に回転手法による縦線が2条認められることを特徴とする。調整は丁寧。

19～21は深杯・増に分類され、平らな外底面から直上ぎみに口縁部を作りあげる。規格的に作られたものとみられるが、口径は21がやや大きく8.2cmを測り、他の2点は7.0～7.2cmで器高はバラつく。いずれも外面の一部に深緑色の自然釉が付着し、これらの出土配置をみると、以下に記載する小型短頸壺や甕と一定のセット関係を保って置かれていた可能性が高い。手触り感は、21が最もシャープであり、口縁部は僅かに外反する。また、底部の回転仕上げ開りは明瞭である。一部を推定復元した20は、底部に丸味をもたせ、器壁の厚い19は、さらに鈍長で、器内面側に空気の影響痕を2カ所持つ（図版42・43）。

22～24は、おそらく19～21とセットをなす小型の短頸壺であり、31も同器種に属する口縁部片と考えられる。これらは見た目がよく類似するもので、器形的にも注目を引く。口縁部の立ち上がりや口径など微かな差違はあれ、器形・法量や製作技術は互いに近似している。さらに、いずれも使用痕跡が無いことから、当初から供献・祭祀のためだけに用意されたものと考えられる。いずれも扁平な体部の上半側に位置する張り出し部に浅い凹線を施す。凹線は22が最も明瞭で、24がこれに次ぎ、23では幅広不整となる。底部は径4cm前後にヘラ切りされ、後にヨコナデするが、22・23に比し、24ではやや不徹底である。これら3点は比較的硬めに焼かれた土器であり、共に口縁部を中心に打ち欠くような割れを意図的に施している（図版42・43）。

25～29は高杯をまとめた。25・26は有蓋高杯同士であるが、セット関係をなすものではない。一群の土器類より型式的に古い25は、天井部と口縁部の区分点に1条の凹線を巡らせる。ツマミは径3cm未満を測り、天井部内面の指押さえ痕は一定方向のナデにより消す。天井部は分厚い。26の高杯は、坏Hに長い脚柱部を付け、その中位に2条の沈線状の退化凹線を巡らせ、上下2段の意識を持たせるが、透かし孔の配置構造は不詳。27～29の3点は胴部で、端部が上方に肥厚するもの（27・28）と、上下に少し拡張するもの（29）がある。27・28などは作りにシャープさを欠く（図版51・55）。

30・33～35は平瓶で、径2.3～2.8cmを測る32は、口縁部接合時の切り抜き円板である。33～35の体部は、扁球形の体部を持つもの（33）と、肩の張ったやや扁平な体部を持つもの（34・35）など変化がみられる。口縁部の一部を欠く33は、体部中位まで回転ヘラケズリを、中位から円板閉塞栓の接合痕跡が見られる背部までカキメを施して仕上げる。32の切り抜き円板は完形で遺存しており、平瓶が体部の一方に偏った位置で斜めに口縁部を接合する特徴から、体部と閉塞栓の一部を切り抜いていることが判る資料である。切り取り断面を観察すると、外面からヘラ状工具で時計回りに一回りさせている。厚みは5mm前後で、口縁部接合部の器壁の厚みを表している。



第104図 墳丘裾部テラス面出土遺物 実測図 1 / 4